

ジャン・クリストフ

JEAN-CHRISTOPHE

第八卷 女友達

青空文庫

フランス以外で成功を博しかけていたにもかかわらず、クリストフとオリヴィエの物質的情况は、なかなかよくなつてゆかなかつた。きまつてときどき困難な時期がやってきて、空腹な思いをしなければならなかつた。その代わり金があるときには、平素の二倍も食べて補つていた。けれどそれも長い間には、結局身体を弱らす摂生法だつた。

今またちようど二人は不如意な時期にあつた。クリストフは夜中過ぎまで起きていて、ヘヒトから頼まれた編曲の無趣味な仕事を片付けた。寝たのは明け方近くで、無駄なことに費やした時間を取り返すために、ぐっすり眠つてしまった。オリヴィエは早くから出かけていた。パリーの向こう側の場末で講義をしなければならなかつたのである。八時ごろに、手紙を届けに来る門番の男が呼鈴を鳴らした。いつもならその男は、強いて起こさないで扉の下へ手紙を差し入れてゆくのだつた。がその朝に限つて扉をたたきつづけた。クリストフは寝ぼけながら、ぶつぶつ言つて扉を開きにいつた。門番は微笑しながら盛んにしゃべりたてて、ある新聞記事のことを言つていたが、クリストフはそれに耳を貸さず、顔も見ないで手紙を引つたくり、扉を押しやつたままよくも閉めずに、また寢床にはいつて、前よりもなおぐつすりと眠つた。

一時間ばかり後にまた、彼は室の中の人の足音にはっと眼を覚ました。そして寝台の裾のほうに、見知らぬ顔の人が丁重に会釈してるのを見て、呆氣にとられた。それはある新聞記者で、扉が開いてるのを見て遠慮なくはいり込んで来たのだった。クリストフは腹をたてて飛び起きた。

「何をしにここへ来たんです？」と彼は叫んだ。

彼は枕をつかんで、その侵入者に投げつけてやろうとした。侵入者は逃げ出すような態度をしたが、それから二人で話し合った。男はナシオン新聞の探訪員で、グラン・ジュールナル新聞に出た評論に関して、クラフト氏に面会したがってるのだった。

「どんな評論ですか。」

「まだお読みになりませんか。」

探訪員は説明の労をとってくれた。

クリストフはまた寝てしまった。眠気のためにぼんやりしていなかったら、相手を外に追い出すところだった。しかし勝手にしゃべらしておくほうが大儀でなかった。彼は蒲団の中にもぐり込み、眼を閉じ、眠ったふりをした。そしてそのままほんとうに眠ってしまったところだった。しかし相手は執拗で、評論の初めを声高に読みだした。クリストフは

すぐに耳をそばだてた。クラフト氏は当代の音楽的天才だと書かれていた。クリストフは眠ったふりをする役目を忘れて、びっくりした怒鳴り声をたて、上半身を起こして言った。「其奴らは狂人だ。何かに取り憑かれてる。」

探訪員はそれに乗じて読むのをやめ、いろんな質問をかけ始めた。クリストフはなんの考えもなくそれに答えた。新聞を取り上げて、第一ページにのつてる自分の肖像を茫然とながめた。しかしその評論を読むだけの隙がなかった。新聞記者がも一人はいつて来たのだった。こんどは彼も本気に腹をたてた。出て行ってしまえと怒鳴りつけた。しかし彼らは少しも出て行こうとしなかった。室内の家具や壁の写真などの配置から、本人の顔つきまでを、手早く書き止めてしまった。クリストフは笑いだしまた怒りだして、彼らの肩をとらえて押しやり、シャツのまま外に送り出して、そのあとから扉に差し金をおろしてしまった。

しかしその日はどうしたことが、彼は一人落ち着いてることが許されなかった。身仕舞いを終わるか終わらないうちに、ふたたび扉をたたく者があった。ただ数人のごく親しい者のみが知ってる一定のたたき方だった。クリストフは扉を聞いてみた。するとそれも見知らぬ男だった。彼はすぐに追い出そうとした。が相手は言い逆らって、自分こそあの新

聞評論の筆者であるということを楯にとつた。天才だとほめてくれる者を追い出す法はない！ クリストフは嫌々ながらも、崇拜者の感激の言葉を聞いてやらざるを得なかった。彼は天から降ってきたような突然の名声に驚いて、前日何か傑作をでもみずから知らずに演奏させたのかしらと怪しんだ。しかしよく調べてみるだけの余裕がなかった。その新聞記者がやって来たのは、社長閣下のアルセーヌ・ガマーシユ自身が彼に会いたがってるので、ぜひとも彼を引つ張り出して、すぐに新聞社へ連れてゆかたためにあつた。下に自動車も待つていた。クリストフは断わろうとした。しかし率直な感じやすい彼は、相手の好意的な勧誘に会つて、ついに心ならずも我が折つた。

それから十分ばかりして、彼は社長に紹介された。この絶対主権者の社長の前では、すべてのものが震えおののいていた。五十年配の強健な快男子で、背が低くむっくりして、丸い大きな頭、角刈りにした灰色の頭髮、赤い顔、横柄な言葉つき、重々しい誇張的な音調、そしてときどきごつごつした快弁を弄した。彼はその絶大な自信の念をもつてパリーにのしかかつていた。事務家で、敏腕家で、利己的で、率直でまた狡猾で、熱情的で、一人よがりである彼は、自分の仕事をフランスの仕事と同一視し、人類の仕事とさえも同一視していた。自分の利益と自分の新聞の繁栄と社会の安泰とを、彼は同種のものだ

と見なし、密接に関係してるものだと見なししていた。自分に害を与うるものはフランスに害を与うるものだと、確信しきっていた。私敵を撲滅するためには、断然国家をも転覆しかねなかつた。それでも彼は、寛仁な行ないをなし得ないではなかつた。腹がいっぱいなときに人は理想家となるごとく、彼も一種の理想家であつて、父なる神のごとくに、塵ちりの中から憐あわれな人間をときどき引き出してやるのを好んでいた。そしてそれは、無から光榮をもこしらえ出し、大臣をもこしらえ出し、意のままに国王をもこしらえたり廃したりし得るといふ、自分の偉大な力を示さんがためであつた。彼の権能はすべてのものに及んでいた。氣に入れば天才をもこしらえ出していた。

その日彼は、クリストフを「こしらえ」たのだつた。

知らず知らずにその先せんべん鞭むちをつけたのは、オリヴィエだつた。

オリヴィエは自分のためにはなんらの奔走もしなかつたし、ひどく広告をきらつていて、黒死病ペストをでも避けるように新聞記者を避けていたけれど、事が自分の友に関係するときは、他に尽くすべき義務があると考えていた。世のやさしい母親、正直な中流婦人、りっぱな人妻は、そのやくざな息子むすこへ何かある特典を得させることができるならば、自分の身

体を買つてもいいと思つてゐるが、オリヴィエもちようどそれに似ていた。

オリヴィエは諸雑誌に筆を執つていたし、多くの批評家や文芸愛好家と接触してゐたので、おりがあればかならずクリストフの噂うわさをしてゐた。そしてしばらく前から、自分の言葉が聞きいれられてゐるのを見て我ながら驚いた。文学界や社交界に広まつてゆく、一種の好奇の動きを、一種の妙な風説を、彼は周囲に感知した。その起源はなんであつたらうか、イギリスやドイツでクリストフの作品が最近演奏されたのにたいする、新聞紙の多少の反響であつたらうか。いや、はつきりした原因があるのではなさそうだった。それは、パリの空気を吸つていて、サン・ジャック塔の气象台よりもなおよく、どういふ風が起こりかけていて明日はどうなるということ、前日から知つてゐるような、見張りを事としてゐる精神の人々には、よくわかつてゐる現象の一つだった。電気の震動が通つてゐるこの神経質な大都會のうちには、眼に見えない光榮の潮流があり、露あわな名聲に先立つ隠れたる名聲があり、客間の漠ぼく然ぜんたる風評があり、時至れば広告的論説となつて現われてくる、イーリアス以上のもの出づがあり、新しい偶像の名前をもつとも堅い鼓膜にも響き通らせる、太鼓の太音があるのである。それにまた時とするとその大らつぱは、賞賛の対称たる当人のもつとも親しいもつともよい友人らを逃げ出させることすらある。けれどその責任は友人

らのほうにもある。

ところでオリヴィエは、グラン・ジュールナルの評論に関係があった。彼は人々がクリストフにたいして示してゐる興味を利用し、巧みな報道によつてそれを煽りたてさせるだけの注意をとつた。用心してクリストフを直接に新聞記者と接触させはしなかつた。何か面白くないことが起こりはすまいかと恐れたのだった。けれど、グラン・ジュールナルの求めにより、策略をもつてクリストフに気づかれないようにして、彼と一人の探訪員とをあつちあひする機会を得た。それらの用心は、ますます人の好奇心を刺激し、クリストフをいつそう面白い人物にした。オリヴィエはまだかつて公表機関との交渉に経験がなかつた。一度動き出したらもう取り締まることも抑制することもできない恐るべき機械を、自分が動かすようになるうとは考えに入れていなかつた。

で彼は、講義に出かける道すがら、グラン・ジュールナルの評論を読むと、ぼうぜん呆然としてしまつた。そんなひどいことを書かれようとは予期していなかつた。新聞というものは、あらゆる調査をよせ集めて、書くべき対象を多少ともよく知りつくしてから、初めて筆にのぼすものだ、彼は考えていた。がそれはあまりに世間知らずだった。新聞が一つの新しい光栄者を発見するの労をとる場合には、それはもちろん新聞自身のためであつて、発

見の名誉を他の新聞から奪わんがためにである。それで、讚めるものを少しも理解しなくても構わず、ただ急いでやらなければならぬ。しかし作家のほうでそれをぐずぐず言う者はめつたにない。賞賛されるときにはいつもかなり理解されてるわけだから。

グラン・ジュールナルはまず、クリストフの悲惨な境遇についてばかばかしいことを述べたて、クリストフをドイツの専制主義の犠牲者だとし、自由の使徒だとし、帝国主義のドイツからのがれて、自由な魂の避難所たるフランスへ逃げ込んだのだと言い——（熱狂的な愛国心の台辞を並べるにはいい口実である）——つぎに、彼の天才を激賞していた。

しかし彼の天才について実際は何にも知っていなかった——彼がドイツにいるときの初期の作で、今では自分でも恥ずかしかつてなくしてしまいたがつてる、二、三の平凡な旋^{メロデ}

律^イ以外には、何にも知っていなかった。けれどその評論の筆者は、クリストフの作品については無知であっても、クリストフの意図をもって——彼がクリストフの意図だとしてるものをもって、足りないところを補っていた。あちらこちらで拾い上げたクリストフやオリヴィエの二、三言、クリストフのことなら知りつくしてると自称してるグージャールみたいな連中の言葉、それだけでもう筆者にとつては、「共和的な天才——民主主義の大音楽家」たるジャン・クリストフの面影を作り出すのに、十分だったのである。筆者はこ

の機会に乗じて、現代フランスの音楽家ら、ことに民主主義などをいっこう気にかけていないもつとも独創的な音楽家を、ののしり散らしていた。ただ、りっぱな選挙論をもってらしい一、二の作曲家ばかりは、その例外だとしていた。彼らの音楽がその選挙論よりずっと劣つてるのは残念なことだった。しかしそれは些事さじにすぎなかった。そのうえ、彼らにたいする賛辞も、またクリストフにたいする賛辞でさえも、他の音楽家らにたいする非難ほど重大なものではなかった。パリーでは、一人の者を讃ほめてる評論を読むときには、「だれのことが悪く言われてるか」と考えるのが、いつも慎重な方法である。

オリヴィエは、新聞を読んでゆくに従つて恥ずかしさに顔を赤くし、そして考えた。

「俺おれはとんだことをしたものだ！」

彼は講義をするのもようやくのことだった。自由の身になるとすぐに、家へ駆けもどつた。クリストフが新聞記者らといっしょに出かけたことを知ると、このうえもなくびっくりした。昼食には帰つて来るだろうと待つてみた。がクリストフは帰つて来なかった。オリヴィエは時がたつにつれて心配になつて考えた。

「彼らはクリストフに馬鹿ばかなことを言わしてるに違いない。」

三時ごろ、クリストフはごく快活な様子で帰つてきた。アルセーヌ・ガマーシユと昼食

を共にしたのだった。シャンペン酒を飲んだので頭が少しぼんやりしていた。どんなことを言いどんなことをしたかとオリヴィエから気がかりそうに尋ねられたが、彼にはその不安の理由が少しもわからなかった。

「何をしたかつて？ 素敵な昼飯を食ったよ。もう長らくあんなによく食ったことはなかった。」

彼はその献立表を述べてきかした。

「それから酒も……いろいろな色のを飲んだよ。」

オリヴィエはそれをさえぎって、他の客たちのことを尋ねた。

「他の客たちだつて？……僕はよく知らない。ガマーシユがいた。丸っこい男で、このうえもなく純真な奴だ。評論の筆者のクロドミールもいた。面白い奴だ。それから、三、四人の知らない記者がいたが、みなたいへん快活で、僕に親切と好意とを見せてくれた。一粒選りのりっぱな連中だったよ。」

オリヴィエは承認の様子を示さなかった。クリストフはオリヴィエがあまり喜ばないのが不思議だった。

「君はあの評論を読んでいないんだね。」

「読んだとも。そして君自身はよく読んでみたのか。」

「読んだ……と言つても、ちよつと見ただけだが、その隙ひまがなかったんだ。」

「じゃあ、少し読んでみたまえ。」

クリストフは読んだ。そして初めから放笑ふきだした。

「馬鹿め！」と彼は言った。

彼は笑いこけた。

「おやおや、」と彼はつづけて言った、「批評家つてみな自惚うぬぼれてばかりいやがる。何にも知つていないくせに。」

しかし読んでゆくに従つて、彼は腹をたて始めた。あまりに愚劣だった。彼を物笑いの種となしていた。彼を「共和的な音楽家」としたがっていた。それはなんらの意味をもなさなかつた……。がまあそんな洒落しゃれはどうでもいいとして……彼の「共和的な」芸術を、彼以前の大家らの「聖器所の芸術」に対立せしめていた——（そういう大家らの魂からこそ彼は養われたのだつた）——あまりにひどいことだった……。

「阿呆あほうどもが！ 俺を馬鹿者にしようとしてやがる……。」

そのうえ、彼のことに關して、彼が多少とも——（むしろごくわずかばかり）——愛し

てるフランスの才能ある音楽家らを、自分の職分を心得ていたりつぱな仕事をしてる音楽家らを、いじめつける理由がどこにあるう？　そしてもつともいけないことには——彼はその故国にたいして嫌悪けんおすべき感情をいだいてるものと推測されていた……。そういうことは、とうてい我慢のできないことだった。

「僕は奴らに手紙を書いてやる。」とクリストフは言った。

オリヴィエはそれをなだめた。

「いや、今書いちゃいけない！」と彼は言った。「君はあまり興奮しすぎてる。明日、頭が休まってるから……。」

クリストフは強情を張った。彼は言いたいことがあるときにはもう待っておれなかった。ただ書いた手紙をオリヴィエに見せることだけは約束した。それも無駄むだではなかった。手紙はひどく修正された。ことに彼がドイツにたいしていだいてるとされてる意見を熱心に訂正した箇所が、はなはだしく修正された。クリストフはその手紙を出しに駆けていった。「こうしておけばいくらかいいだろう。」と彼はもどつて来て言った。「手紙が明日発表されるだろうから。」

オリヴィエは疑わしい様子で頭を撮った。それから、やはりなお気がかりだったので、

クリストフの眼をのぞき込みながら言った。

「クリストフ、君は食事中別に不謹慎なことは何も言わなかったろうね。」

「言うものか。」とクリストフは笑いながら言った。

「確かかね。」

「ああ。くよくよするなよ。」

オリヴィエは少し安心した。しかしクリストフはちつとも安心できなかった。彼はやらにしゃべり散らしたことを思い出した。あのと彼は、すぐにいい気になってしまったのだった。ちよつとの間も人々を疑おうとはしなかった。彼らはいかにも打ち解けてるらしかつたし、いかにも彼に好意をもつてるらしかつた。そして実際そうだった。人は自分がいいことをしてやった相手にたいしては、いつも好意を示すものである。それにクリストフはいかにも打ち明けた喜びを見せたので、その喜びの情が彼らにも伝わっていった。彼の温情的な遠慮なさ、元氣漑はつらつ漑はつらつたる奇抜き、非常な食欲、喉のども動かさずに酒を飲み込む早さなどは、アルセーヌ・ガマーシユに不快を与えるはずはなかった。ガマーシユもまた食卓の勇者で、無作法で田舎者いなかもで多血質であつて、丈夫でない人々を、食うことも飲むこともできない人々を、パリーのいじけた者どもを、軽蔑けいべつしきつていた。彼は食卓で

人を判断していた。で彼はクリストフを高く買った。そして即座に、彼のガルガンチュアをオペラ座の歌劇に上演させようと申し込んだ。——（これらフランスの中産者らにとつては、ファウストの劫罰や九つの交響曲などを上演することが、当時芸術の極致だった。）

——クリストフは、その唐突な考えをおかしがった。そしてガマーシシが、オペラ座の事務所やまた美術局に電話で命令を伝えようとするのを、ようやくのことで引き止めた。——（ガマーシシの言うところによれば、そういうところにいる人々は皆彼の頤使いしのままになるらしかった。）——そしてガマーシシの申し出はクリストフに、彼の交響詩ダヴィデが先ごろ変なごまかし方をされた事件を思い出さした。で彼は、代議士のルーサンが情婦の門出のために催したダヴィデ公演の詩を、うっかりしゃべってしまった。（第五巻広場の市参照。）ガマーシシはルーサンを少しも好きでなかったから、その話を非常に愉快がった。クリストフは豊富な酒と聴きき手の同情とに元気づいて、多少無遠慮な他の話までもち出した。それらの話を聴き手たちは一言も聞きもらさなかった。ただクリストフだけが、食卓を離れるともう忘れてしまった。そして今オリヴィエに尋ねられて、彼はそれを思い出した。彼は背筋がぞつとするのを覚えた。空むなしい希望をつなぎ得なかったのである。過去に十分経験があつたので、これからどんなことになるかほぼ見当がついた。酔いもさめ

てしまった今では、もうそうなってしまったかのようにはつきり頭に浮かんだ。彼の不謹慎な話は変更されて、悪徳新聞の雑報に掲げられ、彼の芸術上の警句は戦いの武器と変えられるに違いなかった。またあの訂正の手紙についても、どれほどの役にたつかをオリヴィエと同様によく知っていた。新聞記者に答えることは、インキを無駄にすることにすぎない。新聞記者へ言ったことはもう取り返しがつかない。

すべてのことは一々、クリストフの予想どおりに起こってきた。不謹慎な話は新聞に現われたが、訂正の手紙は現われなかった。ガマーシユはただ、彼の心の高潔さを承認するということ、そういう懸念をこうむるのは名誉の至りだということを、彼に伝えただけだった。懸念の事実は自分一人の胸に堅く納めてしまった。そしてクリストフのものだとされてる誤った意見はしだいに広まって行って、パリーの諸新聞に辛辣な批評を惹起し、それからドイツへ伝えられて、ドイツの芸術家が自国についてかく下劣な言辞を弄するのを、人々は憤慨した。

クリストフは、他の新聞の探訪員から面会を求められたので、それをいい機会だとして、ドイツ帝国にたいする自分の愛を弁解し、ドイツ帝国内においても人は少なくともフランス共和国内におけると同じく自由であると言った。——ところが、その相手は保守的な新

聞の記者であつて、彼はすぐに非共和的な宣言をしたのだとされてしまった。

「ますます奇態だ。」とクリストフは言った。「いったい僕の音楽が政治となんの関係があるのか。」

「それがフランス人のいつものやり方だ。」とオリヴィエは言った。「ベートーヴェンについてなされてる論争を見てみたまえ。ある者は彼を過激民主派だとし、ある者は彼を僭^そ侶^{うりよ}派だとし、あるいはパール・デーシエーヌの一派だとし、あるいは君主の奴僕だとしてるじゃないか。」

「なんだつて！ そんな奴らをベートーヴェンは蹴^け飛ば^としてやるに違いない。」

「じゃあ君もそうするさ。」

クリストフは実際そうしなかった。しかし彼は、自分に親切を見せてくれる者にたいしては、あまりに人が善^よくなりすぎるのだった。オリヴィエは彼を一人で置いとくと心配でならなかった。いつも面会人がやってくるのだった。そしてクリストフはいくら用心しようとも誓つても駄目だった。意中を隠すことができなかつた。頭に浮かんだことはなんでも話した。婦人記者がやって来て彼の味方だと言うと、彼は自分の情事をも話してしまった。ある者は彼を利用して、某々の悪口を言う種に使つた。オリヴィエがもどつてきてみると、

クリストフは困りきった様子をしていた。

「また馬鹿なことを言ったんだね。」と彼は尋ねた。

「相変わらずだ。」とクリストフはがっかりして言った。

「ほんとにしようがないね。」

「監禁でもされなくちや……。だが、誓ってこれでおしまいだよ。」

「そうだ、このつきまではね……。」

「いやこれつきりだ。」

その翌日、クリストフは得意げにオリヴィエに言った。

「また一人来たよ。僕は閉め出しを食わしてやった。」

「あまりひどいことをしてはいけません。」とオリヴィエは言った。「彼らにたい心では用心しなければいけない。『この動物は性質きわめて悪し……』なんだからね。こちらではねつければ攻撃してくる……。意趣返しなんかは彼奴らにとって訳ないことなんだ。ちよつとしたことでも言えば、すぐにそれを利用するんだ。」

クリストフは額ひたいに手をあてた。

「ああしまった！」

「またどうかしたのか。」

「扉とびらを閉めながら言つてやった……。」

「なんと？」

「帝王の言葉を。」

「帝王の？」

「そうだ、でなけりや、それに似寄つた者の言葉を……。」

「困つたもんだね。明日になつてみたまえ、第一ページに出てるよ。」

クリストフはびっくりした。しかし翌日新聞を見ると、その記者がはいりもしなかつた彼の部屋へやの記事と、交えもしなかつた会話とが、掲載されていた。

報道は広まるにつれて飾りたてられていった。外国の新聞では、反対の意味に面白くなされていた。フランスの記事が、クリストフは貧困中ギター用に編曲をしていたと伝えると、やがてクリストフはイギリスのある新聞から、自分が往來でギターをひいたことがあると教えられた。

彼は賛辞ばかりを読んでるわけではなかつた。なかなかそれどころではなかつた。クリストフはグラン・ジュールナルの被保護者となつたばかりで、すぐに他の新聞の悪口の的

となつた。未知の天才を他の新聞から発見されたことを承認するのは、新聞の品位に關することだつた。ある新聞は激しく悪口を言つた。グージャーは足下の草を人から刈り取られたのに憤慨して、彼の言葉によれば、事情を是正せんために評論を書いた。彼は旧友クリストフのことを馴れ馴れしい調子で述べ、パリーで初めてクリストフを引き回してやつたのは自分だとしていた。たしかにクリストフは天分の多い音楽家ではあるが、しかし——（旧友のよしみで彼はあえて言つたのである）教養に乏しく、獨創性がなく、無法な傲慢心をもつている。その傲慢心に滑稽なやり方でおもねるのは、かえつて彼のために悪い。彼に必要なのはむしろ、思慮深い、博学な、明敏な、親切な、しかも嚴格な、メントールのごとき指導者である——（それはグージャー自身のことを言つたものだつた。）——また他の音楽家らは、嘲笑つていた。新聞紙の援助を受ける芸術家を輕蔑しきつてゐるらしいふうをした。そして奴隸的な徒輩にたいする嫌惡のふうを装つて、差し出されもしないアルタクセルクセスの贈り物を拒んでいた。ある者はクリストフを非難した。ある者はクリストフに憐憫を浴びせかけた。またオリヴィエに責任を負わせる者もあつた——（それはオリヴィエの仲間たちだつた。）——彼らはオリヴィエの一徹さと皆から遠ざかつてるやり方とを、快く思つていなかつた——けれどオリヴィエが皆から遠ざかつ

ているのは、実を言えば、彼らを軽蔑^{けいべつ}してるからではなくて、むしろ孤独を好むからであつた。しかし人は他人から無用視せられることをもつとも許しがたく思うものである。

オリヴィエはグラン・ジュールナルの評論から私利をむさぼっているのだと噂^{うわさ}する者さえあつた。クリストフを弁護してオリヴィエを非難する者もあつた。人生にたいして十分の武装をしていない繊弱な夢想的な芸術家——クリストフ——を、広場の市の喧騒^{けんそう}裡に投げ込んだオリヴィエの心なしにたいして、彼らは心痛の様子を見せていた。クリストフはその喧騒裡に迷い込んでしまふに違ひなかつた。彼らに言わせると、クリストフは天才はないにしても、執拗^{しつよう}な勉強でりつぱな運命を勝ち得られるのに、悪質^{かお}の香りで酔わされて、未来を駄目にされてるのだつた。それは実に気の毒なことだつた。彼を明るみに引つ張り出さないで、辛抱強く勉強さしておくことが、なぜできなかったのか？

オリヴィエはりつぱに答え返し得たはずである。

「勉強するためには、食べなければならぬ。だれがクリストフにパンを与えてくれるか？」

しかし彼らはそんなことにまごつきはしなかつたろう。いかにも従容^{しやうよう}として答えたに違ひない。

「そんなことは些事さじにすぎない。人は苦しまなければいけない。」

もとより、そういう堅忍論を公言する者は、安楽な人々であった。ある正直者が財産家のもとへ、一人の困つてる芸術家を助けてくれと頼みに行つたとき、その財産家はつぎのようと言つたそうである。

「しかし君、モーツアルトは困窮のために死んだではないか。」

ところが、モーツアルトは生きるのが本望だつたことや、クリストフは生きようと決心してることなどを、オリヴィエが彼らに言つたとしたら、彼らはそれを悪趣味だと考えるに相違なかつた。

クリストフはそういうつまらない喧騒けんそうが厭いやになりだした。いつまでもつづくのかしらと怪しんだ。——けれど二週間もたつと、すっかりおしまひになった。新聞にはもう彼ることが書かれなくなつた。ただ彼は世間に知られた。彼の名前が口へのぼるときには、

「あれはダヴィデの作者だ、ガルガンチュアの作者だ、」と人は言わないで、「ああそう、グラン・ジュールナルの男だ、」と人は言つた。それが有名なるゆえんだつた。

オリヴィエはクリストフのもとに来る手紙の数によって、また自分のところへまで反射

的にやってくる手紙の数によって、クリストフが有名になったことを気づいた。歌劇脚本作者からの提議、音楽会主催者からの申し込み、多くは初め敵だった新しい味方からの友情表白、婦人からの招待、などがやってきた。また新聞の調査用として、いろんなことについてクリストフは意見を求められた。フランスの人口減少問題、理想主義芸術の問題、婦人のコルセットの問題、芝居の裸体問題、——ドイツは頽^た廃^{はい}してるとは思わないかどうか、音楽は終極に達してるとは思わないかどうか、その他種々。クリストフとオリヴィエはそれをいっしょに笑った。しかしクリストフはヒューロン人みたいに粗野でありながら、嘲笑^{あざわら}いながら、晚餐^{ばんさん}の招待を承諾し始めたのだった。オリヴィエはみずから自分の眼を信じ得なかった。

「君が？」と彼は言った。

「そうさ。」とクリストフは揶揄^{やゆ}的な様子で答えた。「美しい婦人を見に行けるのは自分ばかりだと、君は思っているのか。こんどは僕の番だよ。少し楽しみたいんだ。」

「楽しむって、君が！」

実際のことを言えば、クリストフは長い間家に閉じこもって暮らしていたので、にわか
に外に出たくてたまらなくなつた。それにまた、新しい光栄の気を吸うと無邪気な喜びが

感ぜられた。もとより彼はそういう夜会にはひどく退屈を覚え、皆ばかな奴らばかりだと思つた。しかし家に帰つてくると、心と反対のことを意地悪くオリヴィエへ語つた。そして方々の夜会へ出かけて行つたが、二度と同じ所へは行かなかつた。二度の招待を断わるためには、ひどい無遠慮さでおかしな口実をもち出した。オリヴィエはそれに気を悪くした。がクリストフは大笑いをした。彼が客間へ出入りするのには、自分の名声を育てるためではなかつた。自分の生活資料を新たに蓄えんがためであつた。人間の眼つきや身振りや声音などの収集、すべて芸術家がおりにおり自分の絵具板パレットを豊富ならしむべき、形と音と色との材料、それを新たに得んがためであつた。音楽家は音楽ばかりで養われてるものではない。人間の言葉の抑揚、身振りの律動リズム、微笑の諧調かいちょう、などはみな音楽家に、仲間の者シンフォニーの交響曲以上の音楽を暗示するのである。しかし人の顔貌がんぼうや魂のその音楽も客間の中においては、音楽家の音楽と同じく、無味乾燥で変化に乏しいものと言わなければならぬ。各人が自分の風格をもつていて、その中に凝結している。美しい女の微笑も注意の行き届いた装いの中では、パリーの音楽家の旋律メロデーと同じく型にはまったものとなる。男子は女子よりもなおいっそう面白みがない。社交界の萎靡いび的影響を受けて、たちまちのうちに精力は鈍くなり、独特な性格は磨滅まめつしてゆく。クリストフは芸術家らのうちに、多

くの死んだ者や死にかけてる者に出会って驚いた。若い音楽家で、精気と才能とを十分にもちながら、成功のために廃類して、自分を窒息させる阿諛の香を嗅ぐことばかり考え、享樂し眠ることばかり考えてる者があつた。そしてその二十年後の姿は、客間の他の隅に、いる老大家のうちちようど現われていた。その老大家は、煉脂を塗りたて、金持ちで高名で、あらゆる学芸院の会員であり、最高位に上りつめていて、もはや何も恐るべきものも仮借すべきものもないらしく見えながら、あらゆる人の前に平伏し、世論や権力や新聞雑誌の前にびくびくし、もう自分の考えもあえて口に出さず、そのうえもはや考えることもなく、もはや生存することもなく、自分自身の残骸をになつてる驢馬となつて公衆の前に身をさらしていた。

それらの芸術家や才士は、過去に大人物であつたかもしくは大人物になり得られるはずであつたが、その各人の後ろにはかならず女が隠れていて、その女から身を滅ぼされてるのであつた。どの女も皆危険だつた、愚かな女も愚かでない女も、人を愛する女も我が身を愛する女も。そしてすぐれた女ほどさらに危険だつた。すぐれてるだけにますます、間違つた愛情を押しかぶせて芸術家を窒息させるのだった。その愛情はひたすら、天才を飼ひ馴らし、平らにし、枝を切り、削り、香りをつけて、ついには天才を、自分の感受性や

小さな虚栄心や平凡さと同程度のものとなし、自分たちの社会の平凡さと同種のものとなしてしまふのだった。

クリストフはそういう社会を通り過ぎただけではあつたが、その危険を感じるくらいには十分よく観察した。一人ならずの女が、彼を自分の客間に独占しようとし、自分一人の用に独占しようとした。そしてクリストフも、何かを匂におわせる微笑の釣つり針はりを、少しくわえないでもなかつた。もし彼に健全な良識がなかつたならば、また彼女らの周囲で近代のキルケードもからすでに多くの者が変形されてる不安な実例がなかつたならば、彼も無事にのがれ得はしなかつたらう。だが彼は、のろま男の番人たるそれら美人連の群れを、さらに増加したい心は少しもなかつた。彼を追つかけてくる女たちをもつと少なかつたら、彼にとって危険はいつそう大きかつたらう。けれども今では、すべての男女が自分たちのうちに一人の天才がいることをよく承知していて、いつもの例によって、その天才を窒息させようとつとめていた。それらの連中の考えはただ一つしかなくて、花を見れば花瓶かびんにさしたくなり——小鳥を見れば籠かごに入れたくなり——自由な人間を見れば奴僕になしたくなるのである。

クリストフは一時心迷つたが、すぐに気を取り直して、彼らを皆追ひ払つてしまった。

運命は皮肉なものである。無頓着な者には勝手にその網の目をくぐらせるが、疑い深い者、用心深い者、聡明な者にたいしては、なかなか取り逃がすまいとする。パリーの網の目にかかったのはクリストフではなくて、オリヴィエであった。

彼はクリストフの成功のおかげをこうむっていた。クリストフの名声は彼の上にも反映していた。六年以前からときどき書いていたもののためによりも、クリストフを見出した男として、前よりいつそう世に知られていた。それで、クリストフへ宛てられた招待の相伴を受けた。そしてひそかにクリストフを監視するためにいて行った。たぶん彼はその監視の務めにあまり気を取られて、自分自身を監視することは怠つてたに違いない。恋愛は通りかかつて彼をとらえた。

それは痩せた愛くるしい金髪の娘だった。狭い澄んだ額のまわりに漣のように揺らいでる細やかな髪の毛、やや重たげな眼瞼の上のすつきりした眉、雁来紅の青みをもった眼、小鼻のびくびくしてゐる繊細な鼻、軽く凹みを帯びた顴、気まぐれらしい顴、隅がやや脹れてる利発な逸楽的な口、パルメジア二ノ式の純潔な小半獣神みたいな微笑、それから長い細そりした首、ほどよく痩せた身体をもっていた。何かある楽しい気がかりらしい色が浮かんでゐるその若々しい顔は、眼覚めくる春——春の覚醒——の不安な謎に包まれて

いた。彼女はジャックリーヌ・ランジーエーという名だった。

彼女はまだ二十歳になつていなかった。自由な精神をそなえたカトリック教の富裕なりつばな家庭だった。父親は、発明の才ある伶俐れいりなさばけた技師で、新思想を歓迎していた。勤勉と政治的關係と結婚とで財産をこしらえていた。財界におけるパリー風な美しい女との、恋と金との結婚——（彼らにとつては眞の恋愛結婚）——をしたのだった。金銭は残つていたが、愛情は飛び去つてしまつていた。それでもなお多少の火花が消えずにいた。なぜならどちらの愛欲もきわめて強烈だったから。しかし彼らは大袈裟おおげさな貞節觀念を鼻にかけてるのではなかつた。各自に自分の仕事や快樂を追い求めていた。そして、利己的な気ままな抜け目ない好伴侶こうはんりよとして、よく気が合つていた。

彼らの娘は、二人の間の連繫れんけいであるとともに、暗黙な競争の種となつた。二人とも娘を嫉妬しつと深いほど愛していた。どちらも娘のうちに、好ましい欠点をそなえてる自分の姿を見出し、その欠点は娘の優美のために理想化されて眼に映つた。そしてたがいに娘を奪い取ろうと内々努力した。娘のほうでは、全世界が自分のまわりに引きつけられてると信じがちな子供特有のずるい無邪氣さをもつて、そのことを感ぜずにはいなかった。そしてそれにつけ込んだ。両親の間にたえず愛情のせり上げを起こさした。どんなわがままでも、

一方から拒まれるときつと他方から承知された。すると一方は先を越されたことに困って、他方が与えた以上のものをすぐに与えるのだった。かくて娘はひどく甘やかされた。ただ仕合わせなことには、彼女は性質中に何にも悪いものをもつてはいなかった——利己心を除いては。ただしこの利己心は、すべての子供にほとんど共通なものではあるが、あまりに大事にされる金持ちの子供にあつては、障害のないことからくる病的な形をとるものである。

ランジェー夫妻は、娘を鍾しやうあい愛しながらも、自分一身の安逸を少しも犠牲にしたがらなかった。一日の大半は娘を一人放つておいた。それで娘は、夢想する時間に少しも不足を覚えなかった。彼女は早熟であるうえに、自分の前でされる不謹慎な話——（人々は彼女に少しも遠慮をしなかった）——からすぐに啓発されて、六歳になったときにはもう、夫や妻や情人を人物とするちよつとした恋物語を、人形に話してきかせるようになった。もとより彼女のほうに悪心は少しもなかった。けれどそれらの言葉の下にある感情の影をちらと見た目から、人形へ話すのはふつりよしてしまって、その詩を自分自身だけのものとした。彼女のうちには無邪気な情欲の素質があつて、それが地平線の彼方かなたはるかな眼に見えない鐘のように、遠くで鳴り響いていた。ときどき風がさつとその片影を吹き送つ

て来た。それがどこから出て来るかはわからないが、それに包み込まれて、顔が真赤まつかになる心地がし、恐こわさとうれしさとで息もつけなかった。なんのことだか訳がわからなかった。それにまた、それは来た時と同じようにふつと消えてしまうのだった。もう何にも聞こえなかった。かすかなそよぎ、それとわからないほどの余韻が、青い空気中にうつすり残つてるのみだった。けれど、かなた山の向こうにそれがあること、そこへ行かなければならないこと、できるだけ早く行かなければならないこと、それだけはわかつていた。そこに幸福があるのだった。ああそこまで行けさえしたら！……

そこへ達するのを待ちながら彼女は、やがて見出そうとするものにたいして、不思議な想像をめぐらしていた。彼女の少女としての知力にとつての重大事は、それを推察するということだったのである。彼女にはシモーヌ・アダンという同年配の友があつて、この重大な問題についていっしょに話し合つた。自分の知識や、十二年間の経験や、聞きかじつた話や、ひそかにぬすみ読んだ事柄などを、たがいにもち寄つた。そして二人の少女は、自分たちの未来を隠してる古壁の石にしがみつき、爪つまさき先で伸び上がつて、その向こうを見ようとした。しかしどんなことをしても、壁の割れ目からいくらのぞこうとしても、まったく何にも見てとれなかった。彼女らの性質は、無邪氣と詩的な放ほうしやう縦とパリー的な

皮肉との混和したものだ。みずから知らずに大袈裟おおげさなことを口にしながら、ごく単純な事柄で自分の世界を組み立てていた。ジャックリーヌは、だれからもとがめられずに、方々を捜し回り、父のあらゆる書物をこそそのぞいでみた。が幸いにも彼女は、ごく清らかな少女の潔白さと本能とによつて、悪いものに出会つても汚されなかつた。多少露骨な場面や言葉に接しただけで、もう厭いやになつてしまつた。すぐさまその書物を手放して、卑しい連中のまん中を通りすぎた。あたかも、きたない水たまりの中にはいつてびっくりしてる——しかも泥どろみず水のはね返りを少しも受けない——猫ねこのようなものだ。

彼女は小説へは心ひかれなかつた。小説はあまりにはつきりしてあまりに干乾ひからびていた。感動と希望とで彼女の胸を波打たせるものは、詩人の書物だつた——言うまでもなく恋愛の詩集だつた。それは少女の心にやや近かつた。事物を見て取りはししないで、欲望と愛惜プリズムの三稜鏡を通して想像していた。ちやうど彼女のように、古壁の割れ目からのぞいてるらしかつた。しかし実は多くのことを知っており、およそ知るべきことはみな知っているのであつて、ただそれをごくやさしい神秘的な言葉で包んでるのだつた。それで、非常に注意してその抱衣を解きささえすれば、見出せる……見出せる……はずだつた。が彼女は何にも見出さなかつた。けれどいつも見出しかけてはいた……。

二人の好奇な少女は少しも飽きなかった。かすかにおののきながら低い声で、アルフレツド・ド・ミュツセーの詩句やシェリー・プリュドナムの詩句を繰り返した。その詩の中に敗徳の深淵しんえんが想像された。彼女らはそれを写し取り、その一節の中の隠れた意味を尋ね合つた。時とするとなんの意味もないことがあつた。そしてこの潔白な厚顔な十三歳の小娘たちは、恋愛について何にも知らないくせに、半ば冗談に半ば真面目まじめに、恋と快樂とを論じ合つた。そして教室では、教師——ごくやさしい丁寧な年とつた小父さんおじ——の温情に満ちた眼をぬすんで、つぎのような詩句を、その教師がある日見つけて息がつまるほどびっくりした詩句を、帳面に書き散らした。

おう吾われをして、吾われをして、汝なんじをかき抱いだかしめよ、

汝の接吻せつぶんのうちに、物狂わしき恋を吸わしめよ、

一滴また一滴と、幾久しく！……

彼女たちの通つてゐる学校は、ごくはやつていた。教師はみな大学の先生だった。彼女たちはそこに感傷的な憧憬どうけい心の使い道を見出した。少女らのほとんどすべては、自分の教

師に恋していた。教師が若くてさほど醜くなければ、彼女らの心を奪うに十分だった。彼女らは先生からよく思われようとして、天使のようになつて勉強していた。試験のときに先生から悪い点をもらうと涙を流した。先生から讃められると、赤くなったり蒼あおくなつたりして、感謝に満ちた婀娜あだっぽい流し目を注いだ。先生から一人別に呼ばれて、助言されたり称賛されたりすると、それこそ有頂天だった。彼女らの気に入るためには秀才たるの必要はなかつた。体操のときに、その教師から両腕に抱かれてぶらんこに乗せてもらうと、ジャックリーヌは熱くのぼせてしまった。そしていかに一生懸命の張り合いが起こつたことだろう！ いかにも激しい嫉妬しつとの炎が燃やされたことだろう！ そのぶしつけな敵から教師を取りもどさんがために、いかにつましい甘っぽい眼つきが注がれたことだろう！ 講義のときに、彼が口を開いて話し出すと、それを書き取るためにペンや鉛筆があわただしく動かされた。彼女らは理解しようとはつとめなかつた。一言も書き落とさないことが大事だった。そして皆が、一生懸命に書き取りながらも、偶像となつてゐる教師の顔つきや身振りを一々、物珍しげな眼でひそかにうかがつてゐる間に、ジャックリーヌとシモーヌとは小声で尋ね合つた。

「先生が青い玉散らしの襟飾えりりをおつけなすつたら、よくお似合いなさるでしょうね。」

それからまたうれしいものは、着色石版画、空想的な浮華な詩集、詩的様式の版画、——昔や今の、俳優、音楽家、著作家、ムーネ・シユリー、サマン、ドビュツシー、などにたいする愛、——音楽会や客間や街路で、見知らぬ青年らと見かわす眠つき、それからすぐに頭の中に描かれる情熱、——不断の欲求に駆られて、たえず想いを焦がしていたり、いつも恋愛や恋愛のきっかけでいっぱいになっていること、それらのことを、ジャックリ——又とシモーヌとはみな打ち明け合った。けれどそれは、彼女らが大したことを感じてはいない明らかな証拠だったし、また、決して深い感情をいだかないための最上の方法でもあった。けれどその代わりに、それは慢性の病状となってきた。彼女らはみずからそれをあざけてはいたが、大事に養っていた。二人はたがいに刺激し合っていた。シモーヌのほうは空想的であり用心深くて、大それたことをより多く想像しがちだった。ジャックリ——又のほうは真面目であり熱烈であつて、大それたことをより多く実行しやすかった。彼女は幾度もたいへんよからぬことを行ないかけた……。けれど彼女はそれをほんとうに行ないはしなかった。青春期にはたいそうしたものである。生涯のある時期においては、人は狂気沙汰の小動物となつて——（吾人も皆一度はそうであつた）——あるいは自殺のうちに、あるいは見当たりしだいの異性の腕のなかに、将に身を投ぜんとするもの

である。ただ仕合わせにも、たいていの者はそこで立ち止まる。ジャックリーヌも、見た見ないかの男に向かつて熱烈な手紙をいくらかも書き散らした。しかしどれも出さなかつた。ただ一つ心酔しきつた手紙を、自分の名を書かずに、ある無情な狭量な醜い卑しい利己的な批評家に送つた。彼が書いた三、四行の文のなかに感傷的な宝を見出して、それで恋しくなつたのだつた。彼女はまたある一流の俳優おもに想い焦がれた。住居が彼女の家の近くだつた。その門前を通ることに彼女はみずから言つた。

「はいつてみようかしら。」

そしてあるとき彼女は大胆にも、彼が住んでる階まで上がつて行つた。しかし一度そこまでゆくとすぐに逃げ出した。どんなことを言つたらよいか？ いや言うべきことは何一つなかつた。彼を少しも恋してゐるのではなかつた。自分でもそれはよくわかつていた。彼女のそういう無分別さの半ばは、みずから好んでやつてる欺瞞ぎまんだつた。他の半ばは、恋したいという楽しい馬鹿げたいつまでも失うせない欲求だつた。ジャックリーヌはごく惻愴れいりだつたから、それをみずから知らないではなかつた。それでもやはり無分別にならざるを得なかつた。みずからよく知つてる狂人は二人分の狂人に相当する。

彼女は社交界に多く顔を出した。彼女に魅せられてる多くの青年らに取り囲まれ、一人

ならずの者から恋されていた。しかし彼女はそのだれをも愛しないで、皆とふざけていた。自分がどんなに人を苦しめてるかは顧みもしなかった。美しい娘は恋愛を残忍な遊戯となすものである。人に恋されるのは至つて当然のことだと見なして、自分の愛する者にたいする場合を除いては、何にも負い目がないと思つてゐる。自分を恋してる男はすでにもうそれだけで十分幸福だと、好んで思いがちである。ただ彼女の弁護となる一事は、彼女は一日じゆう恋愛のことを考えてはいるけれど、恋愛のなんたるやを少しも知つていないことである。温室的な空気の中に育つた社交界の若い娘は、田舎いなかの娘よりも早熟だと人は想像しがちであるけれど、事實はその反対である。読書や会話は、彼女のうちに恋愛の妄想もうそつを作り出して、それが無為閑散な生活のうちでは、しばしば恋愛狂に似寄つてくることが多い。時とすると彼女は、一編の物語の筋を前から読んでいて、その言葉をすつかり暗誦あんしやうしてることさえある。したがつて彼女はそれを心には少しも感じない。恋愛においても芸術におけるがごとく、他人の言つたことを読んではいけない。自分が感ずることを言わなければいけない。何にも言うことがない前からしゃべろうとあせる者は、けつして何にも言い得ない恐れがある。

ジャックリーヌも、多くの若い娘たちと同じく、すでに他人が経験した感情の埃ほこりのなか

に生きていた。そのために彼女は、手は燃え喉は乾き眼はいらついて、たえず小熱に浮かされた状態にありながら、物事を見てとることができなかつた。が彼女は物事を知つてゐると思つていた。彼女に欠けてゐるのはりっぱな意志ではなかつた。彼女は書物を読んだり人の言葉を聴いたりしてゐた。会話や書物のなかで、ここかしこから断片的に、多くのことを教わつてゐた。自分の内心をさえ読み取ろうとつとめてゐた。彼女はその周囲の人々よりもましであつた。彼女は皆より真実だつた。

一人の婦人が、彼女にいい影響を与えた——あまりに短い間の影響ではあつたが。それは彼女の父の妹で、結婚したことのない四、五十歳の女だつた。マルト・ランジエーという名前で、顔だちはきつぱりしてゐたがしかし陰気できれいではなく、いつも黒服をつけていた。身振りにはある窮屈そうな上品さがあつた。めつたに口をきかず、声もごく低かつた。その灰色の眼の澄んだ目差しと、寂しげな口の善良な微笑とがなかつたら、彼女はほとんど人目につかなかつたらう。

ランジエー家に彼女が姿を見せるのは、ときどきであつて、家族きりしかいない場合だけだつた。ランジエーは彼女にたいして、やや迷惑げな敬意をいだいてゐた。ランジエー夫人は彼女の来訪をあまり喜ばない様子を、夫に隠そうとはしなかつた。それでも彼ら夫

妻は礼儀上、一週間に一回はきまつて彼女を晩餐ばんさんに招いた。そしてお義理にしているのだという様子をあまり見せなかつた。ランジエーは自分自身の話をした。彼がいつも興味をもつのは自分自身のことだつた。ランジエー夫人は習慣的に微笑を浮かべながら、他のことを考えていて、いい加減な返辞ばかりしていた。ごく丁寧なやり方をもつて万事都合よく運んでいった。慎み深い叔母おばが思つたより早く辞し去るときには、心こめたやさしい言葉まで発せられた。ランジエー夫人の美しい微笑は、特別に楽しい思い出が頭にある日には、さらに輝かしくなつていた。マルト叔母はそれらのことをみな感知した。彼女の眼をのがれる事柄はあまりなかつた。兄の家で見とられる多くの事柄に、彼女は気を悪くしたり悲しんだりした。しかし様子には少しも現わさなかつた。現わしたつてなんの役にたとう？ 元來彼女は兄を愛していたし、一家の他の人々と同じように、兄の知力と成功とを自慢にしていた。一家の人々は、長子の大成功にたいしては自分たちの困窮などはなんでもないことだと思つていた。が彼女は少なくとも自由な批判を失わなかつた。兄と同じく怜悧れいりであり、精神的には兄よりもいっそう鍛錬されいっそう雄々おおしかつたので——（男まさりのフランス婦人の多くは皆そうである）——彼女は兄の心中を明らかに見てとつていた。そして兄から意見を求められると、腹藏なく思うところを述べた。しかし兄はもう

だいぶ前から意見を聞かなくなった。何にも知らないほうが用心深いことだと思ひ——
(なぜなら彼は彼女くらいにはなんでも知っていたから)——あるいは眼を閉じてるほうが用心深いことだと思ひ。で彼女は氣位を高くもって一人遠のいた。だれも彼女の
内生活に氣を向ける者はいなかった。またそれを知らないほうが好都合でもあつた。彼女は一人で暮らし、あまり外へも出ず、友だちもごく少数で、しかも大して親しくもしてい
なかつた。兄の關係方面や自分の才能を利用することは容易だつたらうけれど、そんなこ
とを少しもしなかつた。彼女は以前、パリーの大雜誌の一つに、二、三の論説や歴史的な
文学的な人物評を書いて、簡結な正確な適切な文体によつて、人の注意をひいたことがあ
つた。が彼女はそれきりにしてしまつた。彼女に好意を示してくれ、彼女のほうでも知己
になるのがうれしいような、幾人かのりっぱな人々がいたので、それと氣持よい交際を結
ぶこともできるはずだつた。しかし彼女は向こうから求めてきたのにも応じなかつた。ま
た、自分の好きなりっぱなものが演ぜられてる芝居に席を取っておきながら、出かけて行
かないことさえあつた。面白そうだとわかつてる旅行をもなし得るのに、やはり家にばか
り引きこもつていた。彼女の性格は堅忍主義と神経衰弱との不思議な混和から成つていた。
その神経衰弱も彼女の思想を少しも害してはいなかつた。生活は害されていたが精神はそ

うでなかった。彼女一人だけが知ってる昔の悲しみが心のなかに跡を残していた。そしてさらに深いところに、さらに人知れず——彼女自身からも知られずに——運命の痕跡こんせきが、すでに彼女を啄ついばみ始めてる内部の病苦が、存していた。——けれども、ランジェー夫妻の眼には彼女の澄みきった眼つきしか映らなかつたし、その眼つきに彼らは時とすると不安を覚えた。

ジャックリー又は、呑のん気きな楽しいとき——初めはいつもたいていそうだったが、そのときには、叔母おばへほとんど注意を向けなかつた。けれどある年齢に達すると、身体と魂とのなかに不安な作用がひそかに起こってきて、そのために彼女の一身は、幸いにも長くはつづかないがしかし死ぬような気がする馬鹿げた癡どうもう猛もうな逆上さかあがりのおりおりに、苦悩や嫌悪けんおや恐怖や狂的な悲しみに陥ってしまった——おぼれながら「助けて！」と呼ばわることもしかねる子供のようになってしまった——そのときに、彼女は自分のそばに、こちらへ手を差し出してくれる叔母マルト一人を見出した。ああ他の人たちはいかに遠くにいたことだろう！ 父も母も他人と同じで、その懇篤な利己心だけしかもたず、自分自身に満足しきっていて、人形に等しい十四歳の彼女の小さな胸の悶もたえなどは、考えてくれようともしなかつた。でも叔母だけはその悶もたえを察あわしてくれて、憐あわれみの情を寄せてくれた。叔母はな

んとも言いはしなかった。ただ微笑ほほえんでいた。テーブル越しに、ジャックリーヌと温情の眼つきをかわした。ジャックリーヌは叔母から理解されてるのを感じて、そのそばへ身を寄せた。マルトは彼女の頭に手を置いて、口をつぐんだまま撫なでてくれた。

娘は信頼の念を起こした。胸がいつぱいになるときには、大きな友だちたる叔母をたずねていった。いつやっけて行っても思つたとおりに、いつも変わらぬ寛大な眼に出会い、その眼の落ち着きを多少心に注ぎ込まれるのだった。彼女は空想の恋心地をほとんど話さなかつた。恥ずかしい気がした。ほんとうのものではないと自分でも感じていた。しかしつそう真実な、ただ一つの真実な、ぼんやりした深い不安を話した。

「叔母おばさま、」と彼女はときおり溜ため息をついた、「私ほんとに幸福になりたいわ。」
「まあかわいそうに！」とマルトは微笑ほほえみながら言った。

ジャックリーヌは叔母の膝ひざに頭をもたせ、自分を撫でてくれてるその手に接吻せつぶんした。
「私幸福になれましょうかしら。ねえ、叔母さま、幸福になれましょうかしら？」

「私にはわかりませんね。でもそれはいくらかお前さんしだいですよ……。幸福になろうと思えば、人はいつでも幸福になれます。」
ジャックリーヌは信じかねた。

「叔母さまは幸福でいらして？」

マルトは愁^{うれ}わしげな微笑をもらした。

「ええ。」

「嘘^{うそ}？　ほんとう？　幸福でいらして？」

「お前さんはそう思いませんか。」

「思ってますわ。でも……。」

ジャックリーヌは言いやめた。

「なあに？」

「私は幸福になりたいんですけれど、叔母^{おば}さまのような幸福にはなりたくありませんの。」

「まあかわいそうに！　私もそう望んでいますよ。」とマルトは言った。

「いいえ、」とジャックリーヌはきつぱり頭を振りながら言いつづけた、「第一、私は幸福にはなれそうにありませんもの。」

「私だつてそうですよ。幸福になれようとは思っていませんでした。けれど人は世間から教わつて、いろんなことができるようになるものです。」

「いいえ私は、教わりたくありませんわ。」とジャックリーヌは不安げに抗弁した。「思

いどおりの幸福な身になりたいんですの。」

「でもどういうふうにだかは自分にもわからないでしょう。」

「自分の望みははつきりわかっていますわ。」

彼女は多くのことを望んでいた。しかしそれを口に出す段になると、いつも反誦句はんしゅうのように繰り返されるただ一つのことしか見出せなかった。

「第一に人から愛されたいのですわ。」

マルトは黙って編み物をしていた。ちよつとたつてから彼女は言った。

「そしてお前さんのほうで愛していなければ、それがなんの役に立ちましょう?」

ジャックリーヌは狼狽ろうばいして叫んだ。

「いいえ叔母さま、好きな人のことだけを言ってるのよ! 他のものはどうでもいいんですわ。」

「そしてお前さんがだれも愛していないとしたら?」

「まあそんなことが! いつでも、いつでも、愛するものはありますわ。」

マルトは疑わしい様子で頭を振った。

「人はそんなに愛するものではありません。」と彼女は言った。「愛したいと思ってるだ

けです。愛することは、神様のいちばん大きなお恵みです。お前さんもその恵みを授かるように神様をお願いなさい。」

「そしてだれも私を愛してくれませんでしたら？」

「人が愛してくれなくても同じです。お前さんはなおいつそう幸福になるでしょう。」

ジャックリーヌの顔は間延びて、不平げな様子になった。

「私いやですわ。」と彼女は言った。「そんなではちつとも楽しくなさそうですもの。」

マルトはやさしく笑い、ジャックリーヌをながめ、溜息ためいきをつき、それからまた編み物にとりかかった。

「かわいいそうに！」と彼女はまた言った。

「どうして叔母おばさまはいつも、かわいいそうにとおっしゃるの？」とジャックリーヌは不安げに尋ねた。「私かわいいそうなものにはなりたくありませんわ。ほんとに、ほんとに幸福になりたいんですわ。」

「それだから私は、かわいいそうに！と言ってるのです。」

ジャックリーヌは少し口をとがらした。しかしそれは長くつづかなかった。マルトの善良な笑顔に彼女は気が折れた。彼女は怒ったふうをしながらマルトを抱擁した。実際人は

この年ごろでは、将来の、はるかな将来の、悲しい予想から、ひそかに媚びられずにはいられないものである。遠くから見ると、不幸は詩の円光を帯びてくる。もつとも恐ろしく思われるものは、平凡な生活である。

ジャックリーヌは、叔母おばの顔がいつもますます蒼あおざめてゆくのに、少しも気づかなかつた。ただ叔母がますます外出しなくなることは、よく見てとつた。しかし彼女はそれを出で嫌きらいの癖のせいだと見なして、それを笑っていた。訪れてくるとき一、二度、医者が帰つてゆくのに出会つた。彼女は叔母に尋ねた。

「叔母さまは御病気でいらして？」

マルトは答えた。

「なんでもありません。」

しかしもう彼女は、ランジェー家の一週一回の晩餐ばんさんにも来なくなつた。ジャックリーヌは腹をたてて、苦々にがにがしく小言を言いに行つた。

「でもねえ、」とマルトは静かに言つた、「私は少し疲れていますから。」

しかしジャックリーヌは何にも耳に入れようとしなかつた。そんなことが言い訳になるものか！

「一週に二、三時間家に来てくださるのに、そんなにお疲れなさるんでしょうか。叔母さまはもう私を愛してくださらないんでしょう。御自分の家の暖炉すみの隅ばかりを大事にしていらつしやるのでしよう。」

けれど、彼女が家に帰って、小言を言つてやつた由を得意げに話すと、ランジェーは彼女をきびしく戒めた。

「叔母おぼさんに構つてはいけない。気の毒にも重い御病氣であることを、お前は知らないのか。」

ジャックリーヌは顔色を変えた。そして震える声で、叔母がどういう病氣であるかを尋ねた。なかなか教えてもらえなかった。けれどついに、マルトは腸の癌腫がんしゅで死にかつてるのだということを知り得た。もう数か月前からの病氣だった。

ジャックリーヌは恐惶きょうこうの日々を送つた。叔母に会うと多少安心した。仕合わせにもマルトはあまり苦しんではいなかった。やはりいつもの落ち着いた微笑を浮かべていて、それが透き通つた顔の上に、内心の燈火の反映のように見えていた。ジャックリーヌは考へた。

「いえ、そんなことはない。間違いだわ。病氣ならこんなに落ち着いていらつしやるはず

はない……。」

彼女はまた小さな胸に秘めてる話をうち明け始めた。マルトはそれにたいして前よりいっそうの同情を示してくれた。ただときどき、話の最中に、叔母は室から出て行った。苦しんでる様子は少しも見せなかった。発作が過ぎ去って顔だちも平穩に返つてから、またそこに出て来た。彼女は自分の容態に関する話を厭いやがっていた。容態を人に隠ひそそうとしていた。おそらく自分でもあまりそれを考えなくなつたのであろう。彼女は自分を啄つばんでるとわかつてるその病氣を恐れていて、それから考えをそむけていた。彼女の全努力は、最後の数か月の平和な氣持を乱すまいとすることだった。終しゆうえん焉んは人が思つたよりも早かつた。彼女はやがてジャツクリヌのほかはだれにも会わなくなつた。つきには、ジャツクリヌに会う時間もしだいに短くならざるを得なかつた。つきには、いよいよ別れる時が来た。マルトは、数週間以来離れたことのない寢床に横たわつて、ごく静かな慰めの言葉で、その小さな友だちにやさしく別れを告げた。それから、彼女は室に閉じこもつて、死んでいった。

ジャツクリヌは幾月も絶望のうちに過くごした。彼女はその精神的苦悶くもんからマルト一人によつて守られていたのであるが、ちようどその苦悶のもつともひどいときにマルトに死

なれたのだった。彼女はすっかり見捨てられた心地がした。何か自分の支持となる信仰でもあればよかった。そしてその支持も欠けてはいないはずだった。いつも宗教的な務めを行なわせられていた。母もまたそれを几帳面きちようめんに行なっていた。しかしそれが問題だった。母は宗教上の務めを行なっていたが、叔母おばのマルトはそれを行なっていなかった。比較してみざるを得なかった。子供の眼は、大人おとなが看過して多くの虚偽をもとらえるものである。また多くの弱点や矛盾をも見てとるものである。ジャックリーヌが観察したところによると、母親やまたは信仰してると言ってる人々も、信仰のない者と同じように死を恐れていた。いや信仰も十分の支持ではないのだった……。なおその上に、自分自身のいろいろな経験、反発心、嫌悪けんおの念、癪しやくにさわるへまな聴罪師、などがあつた……。彼女はやはり務めを行なつてはいたが、別に信仰あつてするのではなく、ちようど育ちがいいからといって社交界に出てるのと同じだった。宗教も社交界と同じく、彼女には空虚なものに思われた。彼女の唯一の頼りは死んだ叔母の思い出であつて、彼女はそれに包み込まれた。先ごろは幼い利己心のため閑却しがちであり、今日では利己心によつていたずらに呼びかけるその叔母おばにたいして、たいへん濟まない気がした。彼女は叔母の面影を理想化した。そして叔母が残してくれた深い専心的な生活の大きな实例は、彼女をしてますます、不真ふま

面目な虚偽な社交的生活を厭いやにならした。彼女にはその偽善的な点ばかりが眼についた。他のときなら面白く思えたかもしれないその危険な世辞あいきょう愛あいきょう嬌きょうが、今は彼女に反感を催もたらした。彼女は何事も厭いやになる精神過敏の状態にあつた。本心が赤裸せきばくになつていた。これまで呑のん気きに見過みごしてきた種々の事柄にたいして、眼が聞けてきた。そのうちのある事柄からは、血が煮えたつほど心を傷つけられた。

彼女はある日の午後、母親の客間にいた。ランジエー夫人のもとには一人の訪問客があつた——美貌びぼう自慢まの氣障きざな流行画家で、いつもやつて来る常客の一人だつたが、大して親しいわけではなかつた。ジャックリーヌは、自分がいては二人に迷惑めいわくらしい気がした。それだけにまたいつそう座をはずせなかつた。ランジエー夫人は少し弱つていた。多少の偏頭痛のためか、あるいは、近ごろの婦人たちがボンボンのようによくかじつてついに頭がからつぽになる、あの頭痛予防薬のためかで、頭がぼんやりしていた。それで自分の言葉にあまり気をつけていなかつた。会話のなかで、その訪問客をうっかりこう呼んだ。

「ねえあなた……。」

彼女はすぐにもずから気づいた。が彼女も客も別にまごつかなかつた。そしてしかつめらしく話しつづけた。ジャックリーヌは茶の支度をしていたが、びっくりして茶碗ちやわんを取

り落としかけた。自分の後ろで、二人が賢さかしい微笑をかわしてるような気がした。振り向いてみると、二人の眼は目配めくばせをし合っていたが、すぐに素知らぬふうをした。——ジャックリー又はその発見に心転倒した。自由に育てられた年若い彼女は、そういう種類の男女関係を、しばしば耳にしたりまた自分でも笑いながら話したりしたが、今やそうした母親を見出すと、堪えがたい苦しみを覚えた……。自分の母が……。いや、それは他の事と同じにはならない！……彼女はいつもの誇張癖のため、極端から他の極端へ走った。それまでは何一つ疑ったことがなかった。けれどそれ以来は、すべてのことを疑った。母の過去の行ないのいろんなことを、一生懸命に細かく考察してみた。そしてもちろんランジェー夫人の軽けい桃ちようさは、そういう嫌疑けんぎに豊富な材料を与えるものだった。ジャックリー又はそれへさらに尾鱈おひれをつけた。彼女は父のほうへ接近したかった。母より父のほうがいいつも自分に近かったし、その知力にずいぶん魅せられていた。いつそう父を愛したかったし、父を気の毒がりたかった。しかしランジェーは、人から気の毒がられる必要をもたないらしかつた。そして娘のひどく興奮した精神には、ある疑いが、前のよりいつそう恐ろしい疑いが起こった——父は何にも知らないのではないが、何にも知らないほうがかえって便利だと思っていて、自分だけ勝手に行動しさえすれば他のことはどうでもよいとしてるの

だ、という疑いが起こった。

するとジャックリーヌは、もうどうにもならない気がした。彼女は両親を軽蔑しかねた。両親を愛していた。しかしもうこのままの生活をつづけることはできなかつた。シモーヌ・アダンにたいする友誼も、なんの助けともならなかつた。この旧友の弱点を彼女は厳格に批判した。また自分自身をも容赦しなかつた。自分のうちに醜いものや凡庸なものを認めて苦しんだ。そして必死となつてマルトの清浄な思い出にすがりついた。しかしその思い出もしだいに消えていった。日々の波がつきつきにそれを覆いかぶせて、その痕跡を洗い去るようだつた。そうなつたらもう何もかも駄目である。自分も他人と同じように泥濘の中におぼれてしまふだろう……。ああどうあつてもこんな世界から逃げ出したい！ 助けてほしい、助けてほしい！……

かくて彼女は、いらいらした孤独の念と、熱烈な嫌悪の情と、ある神秘的期待とのうちに、日々を過ごしながら、未知の救い主のほうへ両手を差し出してるおりに、ちょうどオリヴィエに出会つたのだつた。

ランジエー夫人は、その冬、もてはやされてきた音楽家のクリストフを、招待しないで

はおかなかつた。クリストフはやって来たが、例によって歓心を得ようとはつとめなかつた。それでもランジェー夫人はやはり彼を面白い人物だと思つた。——流行兎である間は、何をして構わなかつた。いつでも人から面白い男だと思われるのだつた。ただしそれも数か月間のことである。——ジャツクリーヌはそれほど面白いと思う様子を見せなかつた。クリストフがある人々から讚ほめられてるといふことだけでもすでに、彼女をあまり心服させなかつた。そのうえ、彼の粗暴な態度や、強い物の言い方や、快活な様子などは、彼女の氣持を害した。彼女のような精神状態では、生の喜びは卑しいものに思われた。彼女は魂の憂鬱ゆううつな薄明を求めていたし、それを好んでるとみずから思つていた。クリストフのうちにはあまりに白日の光が多すぎた。けれど彼女は彼と話を交えた。そして彼は彼女にオリヴィエの噂うわさをした。彼は自分の身に起こるあるゆる幸福を友にもあずからせたかつたのである。そして彼がオリヴィエのことをいろいろ話すので、ジャツクリーヌは、自分の思想と一致して魂を描き出し、人知れず心を動かされて、オリヴィエをも招待してもらつた。オリヴィエはすぐには承諾しなかつた。そのためにかえつてクリストフとジャツクリーヌとの話の中で、想像のオリヴィエの姿がゆっくりとこしらえ上げられてしまつた。オリヴィエがついに思い切つてやつて来たときには、もとよりその想像の姿どおりだつた。

オリヴィエはやって来たけれど、ほとんど口をきかなかつた。口をききたくなかつたのである。そして、彼の伶俐れいりな眼や微笑や繊細な物腰や、彼を包み彼が放射してゐる落ち着きなどは、ジャックリーヌをひきつけずにはおかなかつた。それとまったく反対なクリストフの様子は、オリヴィエをますます引き立たしていた。ジャックリーヌは心に萌もえだした感情を恐れて、態度には何一つ現わさなかつた。やはりクリストフとばかり話をした。しかしそれもオリヴィエについての話だつた。クリストフは友のことを話すうれしさのあまりに、ジャックリーヌがその話題を喜んでることには気づかなかつた。彼はまた自分のことをも話した。彼女はそれを少しも面白いとは思わなかつたが、好意上耳を貸してやった。それから様子にはそれと見せないで、オリヴィエが出て来る身の上話に話を引きもどすのだつた。

ジャックリーヌのしとやかさは、少しも疑念のない青年にとっては危険だつた。クリストフはなんの考えもなく彼女に熱中した。訪問を繰り返すのがうれしかつた。服装にも注意しだした。そしてよく覚えのある一つの感情がまた、そのにこやかなものう懶さをあらゆる夢想に交えてきた。オリヴィエもまた思慕していた。しかも最初から思慕したのだつた。そして自分が閑却されてると思つて、ひそかに苦しんでいた。クリストフはジャックリーヌ

との会話を楽しげに語ってきかして、彼の苦しみをさらに大きくなした。彼はジャックリーヌに好かれようとは思ひもよらなかつた。彼はクリストフのそばに暮らしてきたので、以前よりはいくらか楽天的になつていたけれど、やはり自分を信ずる念が乏しかつた。あまりに実直な眼で自分をながめていた。自分がいつか愛されようとは思ひ得なかつた。——いったい人が愛されるのは、魔術的な寛容な恋愛の価値のためではなくて、自分の価値のためであるとしたならば、たれかほんとうに愛されるに値する者があるうぞ？

ある晩、彼はランジエー家へ招待されていたが、またジャックリーヌの冷淡な様子を見るのがあまりにつらいような気がして、疲れてるといふのを口実にして、クリストフに一人で行くつてくれと言つた。クリストフは何にも察しないで、喜んで出かけていった。率直な利己心からして、ジャックリーヌを独占するの喜びばかりを考えていた。けれどそれを長く楽しむわけにゆかなかつた。オリヴィエが来ないことを聞くと、ジャックリーヌはすぐに、不機嫌ふきげんないらだつた悲しいがっかりした様子になつた。もう少しも人の氣に入りたい望みも覚えなかつた。クリストフの言葉に耳を傾けもせず、いい加減な返辞ばかりした。そして彼女が氣のない欠伸あくびを噛かみ殺してるとさまを見ると、彼は屈辱を感じた。彼女は泣きたくなつていた。ふいに夜会の半ばで出て行つた。そしてもう姿を見せなかつた。

クリストフは狼狽ろうばいして帰っていった。途中で彼は、その突然の変わり方を考察してみた。ほんとうのことが少しわかりかけた。家にもどってみると、オリヴィエは彼を待っていて、平気を装った様子で、夜会の消息を尋ねた。クリストフはつまらない目に会ったことを話した。そして話してゆくに従って、オリヴィエの顔が輝いてくるのを見てとった。

「疲れはどうしたんだい？」と彼は言った。「なぜ寝なかったのか。」

「なに、よくなつたよ。」とオリヴィエは言った。「もうちつとも疲れてやしない。」

「そうだ、君は、」とクリストフは、ひやかすように言った、「ほんとは行かなくてよかったよ。」

彼はやさしくまた意地悪そうにオリヴィエの顔をながめ、自分の室にはいつて行き、そして一人きりになると、声を押えて、涙が出るほど、笑いだした。

「あのお転婆娘てんばなが！」と彼は考えた、「俺おれを馬鹿にしやがって！ 彼奴あいつまでが、俺だまを騙だましやがった。二人こつそり芝居をうってたんだな。」

それ以来彼は、ジャックリーヌに関する私情をすっかり心からもぎ取ってしまった。そして善良な牝めんどり鶏どりが専心に卵かえを孵すように、二人の若い恋人の物語を育ててやった。二人が共に胸にしまつてゐるその秘密を知つてゐる様子もしなければ、二人の間の仲介をもなさない

いで、ひそかに二人を助けてやった。

彼は、オリヴィエがジャックリーヌとともに暮らして、幸福であり得るかどうかを見るために、ジャックリーヌの性格を研究するのが自分の義務だと、真面目な考えをした。そしてやり方がへまだったので、趣味や徳操などについておかしな問いをかけては、ジャックリーヌをうるさがらせてばかりいた。

「ほんとに馬鹿な人だ！ どうするつもりかしら。」とジャックリーヌは、腹だちまぎれに考えて、背中を向けた。

そしてオリヴィエは、ジャックリーヌがもうクリストフに構わないのを見て、晴れやかな心地がした。クリストフは、オリヴィエが幸福なのを見て、晴れやかな心地がした。彼の喜びはむしろ、オリヴィエの喜びよりもずっと大袈裟おおげさに現われていた。そしてジャックリーヌは、自分よりもいつそうはつきりと二人の愛をクリストフが見てとってようとは思いがけなかったので、右のことがさっぱり腑ふに落ちないで、クリストフをたまらない男だと思つた心こんな卑しい煩わしい友にオリヴィエがどうして心酔してるか理解できなかつた。人のいいクリストフは彼女の心を察して、彼女を怒らせることに意地悪い愉快さを覺えた。それから彼は仕事を口実にして身を退き、ランジェー家の招待を断わつて、ジャッ

クリーヌとオリヴィエとを二人きりにしておいた。

それでも彼は、将来にたいする不安を覚えないうではなかった。これから成り立とうとする結婚について、自分が大なる責任を負つてると思つた。そしてみずから心を痛めた。なぜなら彼は、ジャックリーヌの性質をかなり正しく見てとつていたし、多くのことを恐れていた。第一には彼女の富、教育、環境、そしてことに彼女の弱さ。彼は昔自分が親しくしていたコレットを想い起こした。もちろん、ジャックリーヌのほうがいっそう真実で直ちよくせつ

截せつで熱烈であつた。小さな彼女の一身のうちには、勇ましい生活にたいする憧どうけい憬が、ほとんど勇壮とも言える願望が、宿つているのだつた。

「しかしそれだけでは望みどおりだとは言えない。」とクリストフは、好きなデイドウロの元氣な冗談を思い出して考えた。「丈夫な腰をもつていなけりやいけなない。」

彼はオリヴィエに危険を知らせたかつた。けれども、オリヴィエが眼に喜びをたたえてジャックリーヌのところからもどつてくるのを見ると、もう話すだけの勇氣がなかつた。彼は考えた。

「かわいそうに……二人は幸福なのだ。彼らの幸福を乱さないことにしよう。」

オリヴィエにたいする愛情のあまり、彼はしだいにオリヴィエの信じきつてゐる心にかぶ

れてきた。彼の心は安まっていった。そしてついには、ジャックリーヌはオリヴィエが考
 えてるとおりの女であり、また彼女自身で希望していると通りの女であると、信ずるようにな
 った。彼女は誠意に満ちてるのだった。彼女がオリヴィエを愛するのは、自分や自分の
 社会と異なった点を彼がもってるからだだった。異なるといふ訳は、彼は貧しかったし、
 自分の道徳観念に一徹だったし、人中に出て拙劣だった。彼にたいする彼女の愛はいかに
 も純粹で傾倒的だったので、彼女は彼と同じように貧しくなりたかつたし、時としてはほ
 とんど……そうだ、ほとんど醜くさえもなりたかつた。そして、ただ自分だけとして愛さ
 れることを、自分の心が飽満しかつ渴望している愛のために愛されることを、なおいつそ
 う確かめたかつた……。ああ、ある日などは、彼がそばにいるゆえに、彼女は色蒼あおざめる
 心地がし両手が震えた。そして自分の激情をわざとあざけってみ、他の事柄に心を向けて
 るふうを装い、ほとんど彼のほうをもながめないふりをした。皮肉な口のきき方をした。
 しかし突然それがつづけられなくなった。自分の居室に逃げ込んだ。そして扉とびらをすつかり
 閉め切り、窓掛をおろして、じつとすわったまま、両膝ひざをきつと寄せ、両肱ひじを引つ込めて
 腹に押しあて、腕を胸に組みながら、心の動悸どうきを押えた。そのままじつと思いを潜めて、
 堅くなり息を凝らした。ちよつと動いても幸福が逃げてゆきそうで、身動きもできなかつ

た。そして彼女は無言のうちに自分の身体に恋を抱きしめた。

今ではもうクリストフは、オリヴィエに成功させようと夢中になっていた。母親みたいに彼の世話をやき、その身装みなりに注意してやり、服のつけ方をいろいろ教えようとしたり、襟飾えりりを——（どうしてだか）結んでやりませんでした。オリヴィエは辛抱して、なされるままにしておいた。クリストフのそばを離れて階段で、その襟飾りを結び直せば済むことだった。彼は微笑ほほえんでいた。しかし友の深い愛情には心を動かされた。そのうえ彼は、恋のために臆おくびよう病びょうになつていて、自分に確信がなかったから、進んでクリストフへ助言を求めた。ジャッククリーヌを訪問したときの模様を話した。クリストフも彼と同じように感動していた。時とすると夜半に幾時間もかかって、友の恋路を平らにする方法を考えめぐらした。

パリ近郊の、イール・アダンの森のほとりのちよつとした土地に、ランジエー家の別邸があった。この別邸の広庭のなかで、オリヴィエとジャッククリーヌとは、彼らの一生に關する話を交えたのだった。

クリストフも友について行った。しかし彼は家の中にハーモニウムを見つけて、それ

を演奏しながら、恋人同志を平和に散歩さしておいた。——実を言えば二人はそれを望んでいなかった。二人きりになるのを恐れていた。ジャックリーヌは黙っていて、多少敵意を見せていた。すでにこの前の訪問のときオリヴィエは、彼女の様子の変わったこと、にわか of 冷淡な素振り、よそよそしい酷いきつほとんど反抗的なある眼つきを、感じたのだった。そしてぞつとさせられていた。彼はあえて彼女に訳を尋ねかねた。愛する者から残酷な言葉を受けはすまいかと、あまりに恐れていた。それでクリストフが遠のくを見てぎくりとした。クリストフがそばにいてくれさえしたら、自分に落ちかかろうとしてる打撃を受けずにすみそうだった。

ジャックリーヌはやはりオリヴィエを愛してるのだった。前よりはずっと愛していた。そのためにかえって敵意を含んでる様子になっていた。先ごろ彼女がもてあそんでいた恋愛は、あんなに呼び求めていた恋愛は、今や彼女の前にあった。それが深淵しんえんのように足下に開けてくるのを見て、彼女は恐れて飛びしぎった。もう訳がわからなかった。みずから怪しんだ。

「なぜかしら、なぜかしら？ どうしたというのだろう？」

そこで彼女はオリヴィエをじつとながめた。オリヴィエはその眼つきに苦しめられた。

彼女は考えた。

「この人はだれかしら？」

彼女にはわからなかった。

「どうして私はこの人を愛してるのかしら？」

彼女にはわからなかった。

「私はこの人を愛してるのかしら？」

それもわからなかった……。彼女にはいつきわからなかった。それでも自分が熱中していることだけはわかっていた。恋にとらわれてるのだった。恋のうちに身を滅ぼしかかっていた。意志も独立も自我も未来の夢も、ことごとくこの怪物の中にのみ込まれて、自分のすべてを滅ぼしかかっていた。そして憤然と全身を引きしめていた。彼女は時とするとオリヴィエにたいして、ほとんど憎しみに近い感情を覚えた。

二人は庭のはずれの野菜畑まで行った。幕のように立ち並んだ大木がそこを芝地から隔てていた。二人は小径こみちのまん中を小刻みに歩いていった。径の両側には、赤黄あかきい房ふきをつけたすぐりの草むらや苺いちじくの苗床が並んでいて、その香かおりが空中に満ちていた。ちようど六月のことだったが、たびたびの雷雨に冷え冷えとした気候だった。空はどんより曇って、日

の光が半ばかげつていた。低い雲が風に運ばれ、ひとかたま塊りとなつて重々しく動いていた。その遠くの激しい風は、少しも地上に達していなかった。木の葉一枚揺るがなかった。大きな憂鬱ゆううつさが事物を包み込み、二人の心を包み込んだ。そして庭の奥から、眼に見えない別邸の半ば開いてる窓から、ヨハン・セバスチアン・バッハの変ホ短調の遁走曲とんそうを奏してゐるハーモニウムの響きが聞こえてきた。二人は蒼あおくなり無言のまま、そこにある井の縁石に相並んで腰をおろした。オリヴィエはジャックリーヌの頬ほおに涙が流れてるのを見た。

「泣いていますね。」と彼は唇くちびるを震わしてつぶやいた。

そして彼も涙が流れた。

彼は彼女の手をとつた。彼女は金髪の頭を彼の肩にもたせた。もう逆らおうとしなかった。うち負けてしまった。そしてそれは彼女にとって、どんなにか慰安だったろう!……二人は低く泣きながら、天蓋てんがいのような重々しい雲の移りゆく下で、音楽に耳を傾けた。音もなく流れるその雲は、樹木の梢こずえをかすめるかと思われた。二人はこれまで苦しんだことどもを——またはおそらく、これから苦しむことどもを——考えていた。ある場合には、人の運命のまわりに織り込まれてる憂愁がことごとく、音楽のために浮き出されることも

ある！……

しばらくして、ジャックリーヌは眼を拭ぬぐつてオリヴィエをながめた。そしてふいに二人は抱擁し合った。ああ得も言えぬ幸福！ 敬けいけん虔けんな幸福！ 切ないほど甘く深い幸福！……

：

ジャックリーヌは尋ねた。

「お姉ねえさんはあなたに似ていらしたの？」

オリヴィエはぎくりとした。彼は言った。

「どうして姉のことを言うんですか。あなたは知ってたのですか。」

彼女は言った。

「クリストフさんから聞きましたの……。あなたはたいへんお苦しみなすつたのでしよう？」

オリヴィエは頭をたれた。あまりに感動していて返辞ができなかった。

「私もたいへん苦しんだことがありますの。」と彼女は言った。

彼女は自分の味方だったなつかしい故人マルトのことを話した。どんなにか泣いたことを、死ぬほど泣いたことを、胸いっぱいになって話した。



「あなた私を助けてくださいね。」と彼女は哀願する声で言った。「私を助けて、生きさせて、いい者になして、いくらかあの方のようになさしてくださいね。あのかわいそうなマルト叔母^{おば}さんを、あなたも愛してくださいますわね？」

「私たちは亡^なくなった二人の人を愛しましょう、その二人はたがい^なに愛し合ってるでしょうから。」

「ああお二人とも生きていらしたら！」

「生きていますよ。」

二人はたがい^なにひしと寄り添っていた。胸の動悸^{どうき}が感ぜられた。細かな雨が少し降りつづけていた。

ジャックリーヌは身を震わした。

「帰りましょう。」と彼女は言った。

木陰はほとんどまっ暗だった。オリヴィエはジャックリーヌの濡^ぬれた髪に接吻^{せつぶん}した。

彼女は彼のほうに顔をあげた。そして彼は初めて、恋に燃^{くちびる}えてる唇を、若い娘の小皺^{こじわ}のある熱い唇を、自分の唇の上と感じた。二人は気を失わんばかりになった。

家のすぐ近くで、二人はまた立ち止まった。

「私たちはこれまでほんとに一人ぼっちでした！」と彼は言った。

彼はすでにクリストフのことを忘れていた。

二人はクリストフのことを思い出した。音楽はもうやんでいた。二人は中にはいった。クリストフはハーモニウムの上にひじ腕をつき、両手に頭をかかえて、同じく過去のいろいろなことを夢想していた。とびら扉の開く音を聞いて彼は、その夢想からさ覚めて、まじめ真面目なやさしいほほえ微笑みに輝いてる親切な顔を、二人に見せた。彼は二人の眼の中に、どういふことがあったかを読み取り、二人の手を握りしめ、そして言った。

「そこにすわりたまえ。何かひいてあげよう。」

二人は腰をおろした。そして彼は、自分の心にあるすべてのことを、二人にたいするすべての愛情を、ピアノでひいた。それが済むと、三人とも黙ったままじつとしていた。やがて、彼は立ち上がって二人をながめた。彼はいかにも善良な様子で、二人よりずっと年上でしつかりしてる様子だった。ジャックリーヌは初めて、彼がどういふ人物であるかを知った。彼は二人を両腕に抱きしめて、そしてジャックリーヌに言った。

「あなたはオリヴィエをほんとに愛してくれますね？ 二人ともよく愛し合うでしょうね？」

二人はしみじみと感謝の念を覚えた。しかしそのあとですぐに、彼は話をそらし、笑い出し、窓のところへ行き、庭へ飛び出した。

その日以後彼はオリヴィエに向かって、ジャックリーヌの両親へ結婚の申し込みをするように勧めた。オリヴィエは断わられそうなのにびくびくして、申し込みをなしかねた。クリストフはまた、何か地位を捜せと彼を促した。ランジェー夫妻から承諾を得たと仮定しても、彼がみずからパンを得るだけの身分になつていなければ、ジャックリーヌの財産をもらうわけにいかなかった。オリヴィエも同じ考えだった。けれどもただ、金のある結婚にたいするクリストフの不当なやや滑稽こっけいな疑懼ぎくには、同感できなかつた。富は魂を滅ぼすという考えは、クリストフの頭に深く根をおろしていた。あの世のことに気をもんでる富な女に向かつて、ある賢明な乞食こじきが言つたつぎの警句を、彼は好んで繰り返したかった。

「なんですつて、奥さん、あなたは幾百万も（訳者注 幾百万の財産——幾百万の年齢）もつてるのに、なおおまけに、不滅な魂をもちたいのですか。」

「女を信ずるな。」と彼は半ば冗談に半ば真面目まじめにオリヴィエへ言った。「女を信ずるな。」

ことに金持ちの女を信ずるなよ。女は芸術を愛してるかもしれないが、しかし芸術家を窒息させるものだ。そして金持ちの女は芸術をも芸術家をも奏するものだ。富は一つの病気である。女はその病気に男よりいつそうもろい。金持ちはすべて不健全な者だ。……君は笑うのか。僕の言うことを馬鹿にするのか。なあに、金持ちに人生がわかつてるものか。苛酷かしくな現実に密接な交渉をもつてるものか。悲惨の荒々しい息吹いぶきを、かせぎ出すパンや掘り返す土地の匂においを、自分の顔に感じてるものか。人間や物事を、理解し得てるものか、眼にだけでも見てるものか。……昔僕は小さいとき、大公爵の馬車に乗って、一、二度散歩に連れてゆかれたことがあった。僕が草の一片をも知りつくしてる牧場の中を、僕が一人で駆け回ってたいへん好んでる森の間を、馬車は通っていった。ところが馬車の上からは何にも見えなかった。そのなつかしい景色も、僕を連れ出してくれてる馬鹿者どもと同じように、しゃちこぼった勿もったい体ぶつた様子に変わってしまった。そのとき牧場と僕の心との間には、それら四角張った魂の奴やつらが介在してるばかりではなかった。足の下のその四、五枚の板、自然の上ののつかって動いてるその台、それだけでもうたくさんだった。大地を自分の母だと感ずるためには、この世の光に顔を出す赤ん坊のように、大地の腹の中に足を踏み入れていなければいけない。人間を大地に結びつけ、大地の児こらをたが

いに結びつける糸を、富は断ち切ってしまうのだ。そうやってなんで芸術家になれるものか。芸術家は大地の声なのだ。金持ちは大芸術家にはなれないものだ。かくも運命の恵み薄い金持ちの身分で芸術家になるには、非常な天才がなければいけない。もし芸術家になり得たとしても、なお温室の果実にすぎない。偉大なゲーテといえども、いかに努力しても甲斐がない。魂の四肢は萎縮している、主要な機能は富に滅ぼされてなくなっている。君はゲーテほどの活力ももたないから、富のために蚕食されてしまうだろう。少なくともゲーテが避けていた金持ちの女からは、君はさらに蚕食されてしまうだろう。男子だけが天の災いにたいして反抗し得る。男子のうちには、生来の野性があり、人を大地に結びつける激しい仕合わせな本能の層がある。しかし女にはすっかり毒が回っていて、その毒を他人へも伝える。女は富の悪臭を喜ぶものだ。財産をもつていながらなお心が健全である女は、天才をもつて百方長者と同様に、一種の奇跡と言ってもいい……。それにまた、僕は怪物を好まない。生きるために必要な分け前より以上のものをもつてる者は、一つの怪物である——他人をかじつてる人間の癌腫である。」

オリヴィエは笑っていた。

「だって、ジャッククリーヌが貧乏でないからといって、僕はいまさら愛しやめることもで

きないし、また僕にたいする愛のために、無理に貧乏にならせることもできないからね。」
 「それじゃ、彼女を救うことができないとしても、せめて自分自身を救いたまえ。そしてそれはまた、彼女を救うもつともいいやり方なのだ。自分の純潔を保ちたまえ。働きたまえ。」

オリヴィエはクリストフからそういう懸念を伝えられるに及ばなかった。彼はクリストフよりもなおいつそう、反応しやすい魂をそなえていた。といつて金にたいするクリストフの奇矯きぎょうな説を、真面目まじめに受け取ったわけではない。彼自身昔は富裕であつたし、富を忌みきらつてはしなかつたし、ジャックリーヌのきれいな顔には富がふさわしいと思つていた。けれども、自分の恋愛に利害の念が交じつると人に思われることは、堪え得られなかつた。彼はふたたび大学の職を求めた。けれど当分のうちは、地方の中学のつまらぬ地位以上のものは得られそうになかつた。それはジャックリーヌへの結婚の贈り物としては、あまりに見すばらしかつた。彼はそのことをおぼろげに彼女に話した。ジャックリーヌは初め、彼の道理を認めかねた。それはクリストフから吹き込まれた誇大な自尊心のゆえだとし、そういう自尊心を滑稽こっけいなものだと思つた。愛するときには、愛する者の財産をも貧乏をも同じ心で受け入れるのが、自然なことではないだろうか。そして、愛する者が

非常に喜んで与えようとしてる、その恩恵を拒むのは、けちくさい感情ではないだろうか……。それでも、彼女はオリヴィエの意図に賛成した。それが厳肅な楽しくないものであるために、かえって彼女の心を決した。精神的に勇壮な行ないをしたいというかねての願望を、ちやうど満足さる機会であるように思えた。叔母おばを失ったために惹起じゃつきされ恋愛のために激化されてる、周囲の世界にたいする傲慢ごうまんな反抗心のために、彼女はついに自分の性質のうちでこの不思議な熱情と矛盾するものはことごとく、否定してしまっていた。ごく純潔で困窮で幸福に輝いてる生活の理想へ向かつて、自分の一身を弓のように緊張させていた……。あらゆる障害も、将来の凡々たる境遇も、すべてが彼女にとっては喜びだった。ああそれはどんなにかりつばな美しいことであろう！……

ランジェー夫人は、自分のことばかりにあまり気をとられていて、周囲に起こってることには大して注意を払っていなかった。このごろでは自分の健康のことばかり考えていた。始終いろんな病気を想像して気をもみ、あちこちの医者にかかっていた。どの医者も偶々に彼女にとつては救い主だった。それも二週間ばかりのことで、やがて他の医者番となるのだった。彼女は何か月も家を離れて、ごく費用のかかる療養院へはいり、そこでばかしの療法を敬虔けいけんに守っていた。娘や夫のことをも忘れてしまっていた。

ランジエー氏は夫人ほど無頓着むとんじやくではなくて、娘の情事に気づき始めた。父の嫉妬心しつとから感づいたのだった。彼はジャックリーヌにたいして、世の多くの父親が娘にたいしていだいていながら自認したがない、あの謎なぞのような愛情をもっていたし、自分の血から成つてる者のうちに、自分であつてしかも女である者のうちに、再生するという、あの神秘的な肉感的なほとんど神聖な好奇心をもっていた。人の心のそういう機密のうちには、知らないほうがむしろ健全である多くの影と光とが存している。ランジエー氏はこれまで、小さな青年らを娘が悩殺なうころしてるのを見て、面白がつていた。そういうふうあだに婀娜あだっぽい空想的なしかも聡明そうめいな——（彼自身と同じような）——娘を、彼は好んでいた。しかしながら、事件がいつそう真剣になるの恐れがあるのを見ると、気をもみだした。そして彼はまずジャックリーヌの前でオリヴィエを冷笑し、つぎには、かなり辛辣しんらつにオリヴィエを悪評した。ジャックリーヌは初めそれを笑つて、そして言った。

「そんなに悪くおっしゃるものではありませんわ、お父さま。今に私があの人と結婚したがるようになったら、お父さまはお困りなさるでしょう。」

ランジエー氏は大きな叫び声をたてた。彼女を狂人だとした。がそれこそ彼女をまったく狂人にならせる仕方だった。けつしてオリヴィエとは結婚させないと彼は宣言した。彼

女はオリヴィエと結婚すると宣言した。覆いは裂けた。彼は彼女から無視されることに気づいた。父親としての利己心から非常に憤慨した。もうオリヴィエにもクリストフにも二度と家へ足を入れさせないと、断然言い放った。ジャックリーヌは激昂した。そしてある朝、オリヴィエはだれか来たので扉を開いてみると、令嬢が顔色を変え決心の様子で飛び込んで来て言った。

「私を引き取ってください。両親は承知しません。でも私はあなたが望みです。私をどうかしてください。」

オリヴィエは狼狽したが、しかし感動させられて、反対を唱えようとしなかった、幸いにもクリストフがそばにいた。普通なら彼がいちばん無法だった。がそのとき彼は二人を諭した。あとでどんな醜聞が起こるか、二人はどんな苦しい目に会うか、それを説き聞かした。ジャックリーヌは怒って唇を噛みしめながら言った。

「そうになったら、死ぬばかりですわ。」

その言葉はオリヴィエを恐れさせるどころか、かえって決心の臍を固めさせることとなった。クリストフは一方ならぬ骨折りをして、二人の狂人に少し辛抱させることにした。絶望的な手段をとる前に、他の手段を講じてみる必要があった。ジャックリーヌは家に帰

らなければいけなかった。そして、彼がこれからランジエー氏に会いに行つて、二人のためには弁護してみることにした。

奇態な弁護人だつた。彼が一言いい出すや否や、ランジエー氏は外に追い出そうとした。けれどつぎには、事態の滑稽こっけいさに心ひかれて、それを面白がった。そしてしだいに、相手の真剣さやまっ正直さや確信に、のまれていった。けれどもなお取り合おうとしないで、皮肉な言を放つてやつた。クリストフはそれが聞こえないふうをした。しかしさらに鋭い矢が放たれると、言葉を途切らして、無言のうちに反抗した。そしてまた言いつづけた。あるときには、テーブルを拳固げんこでたたいて言った。

「私があなを訪問して来たのは、私にとつてはあまり愉快なことでないと思つていただきます。あなたのある種の言葉を取り上げないためには、私はどんなにか我慢してゐるんです。しかし私はあなたにお話しするの義務を帯びてゐると思つています。そしてお話ししてゐるのです。私が自分自身を忘れてゐると同じに、あなたもこの私を忘れてくださつて、私の申すことをよく考えて下さい。」

ランジエー氏は耳を傾けた。そして自殺の意図を聞くと、肩をそびやかして笑う様子をした。しかし彼は心を動かされた。彼は物わかりがよかつたから、そういう嚇おどかしを冗談

と見なしはしなかった。若い娘は恋に駆られると狂気沙汰ざたになることを、考慮に入れなければならぬと知っていた。昔、彼の情婦の一人で、笑い好きな気の弱い娘があつて、その大袈裟おおげさな言葉をとうてい実行し得はずまいと彼が思つてゐるうちに、彼の眼の前でピストルを一発みずから自分の身に放つた。彼女は即死しはしなかった。がその光景は常に彼の眼にありありと浮かんだ……。こういう狂気な娘どもはどんなことをしでかすかわかつたものではない。彼は胸にどきりとした……。

「死にたけりや、勝手に死ぬがいいさ。気の毒の至りだ。馬鹿者め！」とは言え、いろいろ手段をめぐらし、承諾を装つて時間を延ばし、穏やかにジャックリーヌをオリヴィエから引き離すことも、彼にはできるはずだった。しかしそうするには、手にあまるほどの心にもない労力を費やさなければならなかった。そのうえ彼は気が弱かつた。ジャックリーヌへ「いけない」と激しく言つたというだけで、今ではもう、「よろしい」と言つてやりたい氣になつていた。要するに、人生のことはだれにもわかるものではない。娘のほうがおそらく道理まじめかもしれなかつた。肝要なことは愛し合うということである。オリヴィエはしごく真面目な青年で、おそらく才能があるのかもしれないということを、ランジェー氏は知らないでもなかつた……。彼は承諾を与えた。

結婚の前夜、二人の友は夜ふけまでいっしょに起きていた。なつかしい時期の最後の時間を少しも無駄むだにしたくなかった。——がそれはすでにもう過去であった。あたかも、汽車の出発前の待つ間が長引くとき、停車場のフラット・ホームの上でかわす、あの悲しい別れの言葉に等しかった。あくまでも居残り、見かわし、言葉を交えようとする。しかし心はもうそこにはない。友はすでに出発してしまつてるのだ……。クリストフは話をしようとしてめた。けれど、オリヴィエのうわの空の眼つきを見ると、途中で言葉を切つて、微笑を浮かべながら言つた。

「君の心はもう遠くに行つてるんだね。」

オリヴィエは当惑して弁解した。友と最後の親しい時を過ぎすぎいに、心を他処よそにしてたことを見て、みずから悲しくなつた。しかしクリストフは彼の手を握りしめた。

「さあ遠慮するなよ。僕もうれしいのだ。夢想到にふけるがいいよ。」

二人は窓ぎわにじつと相並んでひしをつき、暗い庭をながめていた。ややあつて、クリストフはオリヴィエに言つた。

「君は僕から逃げようとしてるんだらう。これから僕の手を脱すると思つてるんだらう。」

そして今ジャックリーヌのことを考えてるんだね。だが僕は君をとっつかまえてみせるよ。僕もジャックリーヌのことを考えてるんだ。」

「なあに、」とオリヴィエは言った、「僕は君のことを考えてたんだ、しかも……。」
彼は言いやめた。

クリストフは笑いながら、その文句を終わりまで言ってみせた。

「……しかも、それでたいへん悲しい心地になつてたのだ……。」

クリストフは結婚式のために、りっぱな、ほとんど優美なとも言えるほどの身装みなりをした。宗教上の式はなかった。オリヴィエは宗教に無関心だったし、ジャックリーヌは宗教に反感をもつたので、共にそれを望まないのだった。クリストフは区役所の式のために交シソフ響曲オニの一節を書いておいた。けれど法律上の結婚式がいかなるものであるかを知ると、最後の間ぎわにそれを引つ込めてしまった。彼はそういう儀式を滑稽こっけいだと思つたのだ。それらの儀式を信ずるには、信仰と自由とをともに失つていなければいけない。真のカトリック信者があえて自由思想家になる場合には、それは戸籍吏を牧師たらしむるためではない。神と自由意識との間には、国家という宗教を入れる余地は存しない。国家は

ただ人を登録するだけであつて、結合させるものではない。

オリヴィエとジャックリーヌとの結婚は、クリストフへその決心を後悔させるほどのものではなかつた。オリヴィエは、区長が新夫婦や富裕な一家や勲章を帯びてる列席者らに、重々しく世辞を振りまいてるのを、よそよそしい皮肉な様子で聞いていた。ジャックリーヌのほうは聞いてもいなかつた。彼女の様子をうかがつてるシモーヌ・アダンに、こつそり舌を出してみせていた。結婚することなんかは「自分にとつてはまったくなんでもない、」とシモーヌに誓つておいたのであつて、まさにその誓いどおりにやつていた。結婚してるのは自分だともほとんど思つていなかつた。結婚ということが考えるとおかしかつた。他の人々は列席者らを目標に置いていた。列席者らはじろじる様子をぬすみ見ていた。ランジェー氏はもつたいぶつていた。娘にたいする愛情はいかにも眞実ではあつたけれど、彼がおもに氣を使つてゐることは、通知をもらした人がありはすまいかと、一座の人々を見調べることだつた。ただクリストフだけが感動してゐた。彼一人が、両親であり結婚者であり区長であつた。彼のほうを見向きもしないオリヴィエを、じつと見守つてやつてゐた。その晩、若夫婦はイタリーへ出発した。クリストフとランジェー氏は停車場まで送つていった。見ると二人は、残り惜しさのない快活なふうで、今か今かと出発を待ちわびてる

気持を隠さなかった。オリヴィエは青春の年ごろのような様子だったし、ジャックリーヌは小娘のような様子だった……。ああかか出る出発の、やさしい憂愁さよ！ 父は自分の娘が、他人によつて、そしてなんのためにか……。そして永久に自分のもとから遠くへ、連れ去られるのを見ては、うら悲しく思うのである。しかし彼らは、よろこ歡ばしい解放の感情をしか覚えない。もはや人生にはなんらの障害もない。もはや何物も彼らを引き止めない。あたかも彼らは最高峰に達してゐるがようである。今や死ぬこともできるし、すべてが自分の手中にあるし、何も恐るべきものはない……。その後になつて、人はそれが一つの宿場にすぎなかつたことに気がつく。道はまたつづいて、山のまわりを回る。そして第二の宿場に達する者はごく少数である……。

汽車は夜の中へ二人を運び去つた。クリストフとランジェー氏とはいっしょに帰つていった。クリストフは意地悪げに言つた。

「これでもう私たちは一人者になりました。」

ランジェー氏は笑いだした。二人は別れのあいさつ挨拶をかわして、それぞれ自分の家へ向かつた。二人とも切なかつた。しかしそれは悲しみと安慰との混ざり合つた感情だった。クリストフは自分の室に一人ぼつちで考えた。

「俺おれのよき半分が幸福でいるのだ。」

オリヴィエの室は少しも様子が変わっていないかった。彼が旅から帰ってきて新しく住居を構えるまでは、その道具や記念品をクリストフのところに残しておくことが、二人の間の約束だった。彼はなおそこにいるかのようだった。クリストフはアントアネットの肖像をながめ、それをテーブルの上に置き、それへ向かって言った。

「ねえ、あなたも満足ですか。」

彼はしばしば——しばしばすぎるほど——オリヴィエへ手紙を書いた。オリヴィエからはあまり手紙が来なかった。来た手紙も素気そつけないものであつて、しかもしだいに気乗りのしないものとなつていった。彼はそれに力を落としたが、しかし当然のことだと思ひ直した。そして二人の友情の未来については心配していなかった。

彼は孤独にまひりはしなかった。それどころか、自分の趣味に相当するだけの孤独を得られなかった。彼はすでにグラン・ジュールナルの保護を苦しみ始めていた。アルセーヌ・ガマーシユは、自分が発見するだけの労をとってやった光榮にたいしては、一つの所有権を有してると信じがちだった。ちょうどルイ十四世が自分の玉座のまわりにモリエール

ヤル・ブランやリユーリなどを集めていたように、彼もそれらの光榮が自分の光榮に結合するを当然だと思つていた。クリストフは、そのエジルへの賛歌の作者のほうはまだしも、自分のグラン・ジュールナルの保護者に比ぶれば、芸術にたいしてさほど専横な邪魔者でもないと考えた。なぜなら、この新聞記者はルイ帝王と同じく芸術が少しもわかつていなくせに、やはり同様に固定した芸術觀をいだいていた。自分の好まないものには存在することを許さなかつた。それをいけない有害なものだときめてしまい、公衆の利益のためにそれを滅ぼしていた。いったい、教養のない悪く開けたそれらの実務家らが、金銭と新聞とによつて、ただに政治界のみでなく精神界をも支配せんとして、首輪や餌食えじきとともに小屋を提供し、もしくははその拒絶に會つて、自分の同勢となしてゐる多数の馬鹿者どもをけしかけるのは、奇怪な恐るべき光景なのである。——クリストフは勝手に馴じゆんよう養されるような人間ではなかつた。馬鹿な奴が自分に向かつて、音楽上なすべきこととなすべからざることと言つてきかせようとするのは、きわめて不都合なことだと思つた。そして、芸術は政治よりも多くの準備を要すると、彼に論さこしてやつた。それからまた、その新聞のおもな社員の一人がこしらえてゐる、社主の推薦づきのつまらない筋書きを、音楽にしてくれと申し込まれたが、彼はそれを無遠慮な言葉で断わつてしまった。それは、彼とガマー

シユとの関係のうちに、最初の冷たいものを投げ込んだ。

クリストフはそんなことを意に介しなかった。彼は無名の域から脱すると、またすぐに無名の域にもどりがつていた。「他人のうちに人を滅ぼすあの白日の光にさらされ」てる自分自身を、彼は見出したのだった。あまりに多くの人々が彼に干渉していた。彼はゲーテの言葉を考えてみた。

作家が一つの名作によって自分を認めさせるときには、公衆は第二の名作を作ることを彼に妨げようとすると……。才能ある者も考え込んでいるうちには、世間の喧騒けんそうのなかに心ならずも引き込まれる。なぜかなれば、世間の人々は各自に、その才能の一片を自分のものになし得ると考えてるからである。

クリストフは扉とびらを閉ざした。そして自分の家のなかで、数人の旧友と接近していった。彼は多少閑却していたアルノー夫妻の家庭にまた出入りした。一日の一部を一人きりで暮らしていたアルノー夫人は、他人の悲しみを思つてやるだけの時間をもっていた。オリヴェイエが出発したのでクリストフのところさがさぞ寂しくなつたらうと考えていた。そして内

気なのを押えて彼を夕食に招いた。あえてする気があつたら、ときどき家の中を見に行つて上げようと申し出たかもしれない。しかし彼女には勇気がなかつた。そしてもちろんそのほうがよかつた。なぜなら、クリストフは人に世話をやかれることが嫌いだつたら。でも彼は夕食の招待を承諾した。そして晩にはきまつてアルノー夫妻のところへ行く習慣がついた。

彼が出入りしてみると、その小さな家庭は相変わらず平和で、前よりはいつそう灰色になつた寂しい同じ情愛の空気に包まれていた。アルノーは精神的銷沈しやうちんの時期にさしかかつていた。それは、教師の生活——けつして止まりもせず進みもせず同じ場所とどで回転する車のように、前日と同じ日が毎日繰り返されてゆく勤勞の生活、その生活から磨滅まめつされた結果であつた。善良な彼は忍耐強かつたにもかかわらず、落胆の危機を通つていた。世間のある種の不正な事柄を悲しんでみたり、自分の献身的努力も無駄であると思つたりした。アルノー夫人はそれを親切な言葉で元氣づけていた。彼女は相変わらず心安らかであるらしかつた。しかし以前より窶やうれていた。クリストフは彼の前で、こんなに物のわかつた細君をもつてるのは仕合わせだとアルノーに言つた。

「そうです、」とアルノーは言つた、「かわいい妻です。何事にも心を乱しません。妻も

仕合わせだし僕も仕合わせです。もし妻がこんな生活を苦にしてたら、僕はもう没落して
いたでしょう。」

アルノー夫人は顔を赤めて黙っていた。それから落ち着いた声で他のことを話した。――
クリストフの訪問は、いつも二人のためになっていた。二人に光明を与えていた。そして
彼のほうでもまた、それらのりっぱな心に接して自分の心を温めるのがうれしかった。

なおも一人、女の友が、彼のところへやって来た。と言うよりむしろ、彼のほうから会
いに行つた。彼女は彼と知り合いになりたがつてはいたが、訪問してくるだけの努力は払
わなかつた。二十五歳の音楽家で、音楽学校でピアノの一等賞をもらったことがあつた。
セシル・フルーリーという名だつた。背が低くて、かなり肥満していた。濃い眉、濡みが
ちな眼つきをした大きな美しい眼、家鴨の嘴のように先端がやや赤味を帯びてそり返つて
る太い低い鼻、人のよさそうなやさしげな厚い唇、元気な頑丈なふつくりしてる顔、
高くはないが広い額、髪は首の後ろに房々とした束髪に結えてあつた。丈夫な腕をしてい
た。手はいかにもピアノひきらしく大きくて、親指が聞き指先が角張っていた。その身体
全体からは、重々しい活気と田舎者めいた健康との印象を人に与えた。母といつしよに

暮らしていて、たいへん母を大事にしていた。母は人のいい女で、少しも音楽に興味をもたなかったが、音楽の話をしばしば聞いたので自分もその話をし、音楽の主都に起こってすることはなんでも知っていた。娘は平凡な生活をしていて、毎日音楽の稽古けいこを授け、また時とすると音楽会を催したが、だれからも注意されなかった。彼女はいつもおそくなって、徒歩か乗合馬車かで帰って来、すっかり疲れはててはいたが、機嫌きげんはよかった。そして、いろんなことをしゃべりながら、よく笑いながら、一文にもならないのに歌をうたいながら、元気に音階を組み立てたり、帽子を繕つくろったりした。

彼女は生活のために害されてはいなかった。自分の努力で得たわずかな安樂の価を知っていた——ちよつとした樂しみの喜びを、自分の地位や才能がごく少しずつ向上してゆく喜びを、よく知っていた。前月よりは五フランばかり多く収入があつただけでも、数週間努力していたシヨパンの一節をうまく演奏し得ただけでも、彼女はうれしがっていた。彼女の勉強は過度でなかったから、ちようど彼女の能力に適合して、相当な摂生法のように彼女を満足させていた。演奏し歌い稽古を授けることは、尋常に規則的に活動力を満足させたという快い感じを彼女に得させ、また同時に、ほどよい慰安と穏やかな成功とを得させた。彼女は丈夫な食欲をもち、よく食べ、よく眠り、かつて病気にかかったことが

なかつた。

まっすぐな分別ある謙讓なまったく平衡のとれた精神をもつてゐる彼女は、何事をも苦しなかつた。なぜなら、今までのことや今後のことは気にかけないで、ただ現在にばかり生きてゐるからだつた。そして、身体は丈夫であるし、生活は比較的革命の変動を受けないでいたので、彼女はたいていいつも幸福だつた。喜んでピアノを勉強するとともに、また世帯を整え、家事のことを話し、あるいは何にもしなかつた。彼女は生活の道を心得ていた。それもその日暮らしの生活ではなくて——（彼女は儉約で用心深かつた）——その時ぎりの生活だつた。彼女はいかなる理想にも心を煩わされていなかつた。もし彼女に理想があると云い得るならば、その理想は市井的なものであつて、彼女のあらゆる行動と思想のうち静かに伸び広がつていた。それは、どんなことでも自分のなしてゐることを穏やかに愛すという一事だつた。彼女は日曜日には教会堂へ行つた。しかし宗教的感情は、彼女の生活のうちほとんどなんらの地位をも占めていなかつた。彼女は信仰もしくは天才をもつてゐるクリストフのような熱情家らに感嘆してゐた。しかし彼らをうらやみはしなかつた。彼らのような不安や天才などをもつてゐたとて、それを彼女はどうすることができようか？

それではどうして彼らの音楽を彼女は感じ得ていたのか？ それは彼女自身でも説明しかねたに違いない。しかし彼女が知ったことは、自分が彼らの音楽を感じてるという事実だった。他の熟練家らよりも彼女のまさつてる点は、その肉体上および精神上的の頑健がんけんな平衡であった。私的熱情のない彼女の生の豊満のうちに、他人の熱情は花を咲かすべき肥沃ひよくな土地を見出していた。彼女はそれから少しも乱されなかった。芸術家を嘔かみつくしたそれらの恐ろしい熱情を、彼女はその活力を少しも失わせないで演出していたが、その害毒を身に受けることはけつしてなかった。ただ力と後の快い疲労とを感ずるばかりだった。演奏を終えると、汗まみれになってぐったりしていた。それでも静かに微笑を浮かべて、そしてうれしがっていた。

クリストフはある晩彼女の演奏を聴きいて、その演奏振りに驚かされた。音楽会が終わって握手をしに行った。彼女はそれを感謝した。その音楽会には聴衆が少なかつたし、また彼女は賛辞にたいして鈍感になつてもいなかつた。元来彼女は、音楽上のいずれかの党派に加わるだけの利口さももたなかつたし、崇拜者の群れをあとに従えるだけの策術ももたなかつたし、また、あるいは技巧上に多少の誇張を施すことによつて、あるいは定評ある各作を勝手気ままに演出することによつて、あるいは、ヨハン・セバスチアン・バッハや

ベートーヴェンなどという大家ばかりをほしいままに演奏することによって、とくに人目をひこうともしなかったし、また自分の演奏するものについてなんらの理論をもいだかず、ただ感ずるままを率直に出演して満足していた——それゆえに、だれも彼女へ注意を払わなかった。批評家らは彼女を知っていなかった。彼女がりっぱに演奏しててことを、批評家らはだれからも聞かせられなかったし、またそれを自分で認めることもできなかったのである。

クリストフはその後しばしばセシルに会った。この丈夫な落ち着いた娘は、謎なぞのように彼をひきつけた。彼女は気丈で淡々としていた。彼は彼女があまり世に知られていないことを憤慨し、グラン・ジュールナルの友人らの力をかりて世に吹ふい聴ちようさせようと、彼女に言い出した。しかし彼女は、人に讃ほめられるのはうれしくはあるが、そのための運動はしないでほしいと願った。競争したり苦心したり他人の嫉妬しつと心を招いたりすることを、彼女は欲しなかった。平和のまままでいたかった。人の口にのぼらなくとも、それがかえって結構だった。彼女には羨望せんぼうの念がなかった。他の熟練家らの技能に接するとまっ先に恍惚こうこつとなった。また野心も欲望もなかった。あまりに精神上の怠なまけ者だった。何か直接のはつきりした事に取りかかっているときには、まったく何にもしていなかった。夢想さ

えしていなかった。夜寝床に入つてさえそうだった。眠っているか、さもなければ何にも考
えていなかった。老嬢で終わりはすまいかと恐れてる世の娘たちの生活を毒する、結婚に
ついてのあの病的な妄想をも、彼女はもつていなかった。いい夫をもちたくはないかと
聞かれると、彼女は言った。

「まあ！ 定期収入の五万フランとでもなぜおつしやらないんですか。人のもつてるもの
は取り上げてやるに限ります。向こうから差し出さるればなお結構ですわ。さもなければ、
無しで済ますだけのことです。お菓子がないからと言って、よいパンをよくしないとするわ
けにはゆきません。まして長い間堅いパンばかり食べてきましたおりにほねえ！」

「それにまた、」と母は言った、「毎日パンが食べられないような人もたくさんあります
よ。」

セシルが男を信じないのにはいろいろ理由があつた。数年前に死んだ父親は、気の弱い
怠惰者^{なまけもの}だつた。妻や家族の者たちにたいへん迷惑をかけたのだつた。セシルにはまた一
人の兄があつた。それが悪いほうへそれてしまつていた。どうなつてるかだれにもよくわ
からなかつた。ごくまれにやつて来ては金の無心をした。皆は彼を恐^{こわ}がり、恥ずかしいと
思い、いつどんな噂^{うわさ}を聞かかわからないとびくびくしていた。それでもなお彼を愛してい

た。クリストフは一度彼に出会った。そのときクリストフはセシルのところに行った。呼鈴を鳴らす者があった。母親が扉とびらを聞けに行つた。隣の室で激しい声の会話が起つた。セシルは心配そうな様子をしていたが、こんどは自分も出て行って、クリストフを一人置きざりにした。言い争いがつづいて、聞き知らぬ声は威嚇的になつていった。クリストフは仲裁してやらなければならぬと思つた。そして扉を聞いた。こちらに背を向けてる多少無格好な若い男の姿が、ちらと見えただけだつた。とつさにセシルはクリストフのほうへやつて来て、元の室へもどつてくれと頼んだ。彼女も彼といっしょにもどつて来た。二人は黙つて腰をおろした。隣の室では、その客がなおしばらく怒鳴つていたが、やがて扉がたりと音さして出て行つた。するとセシルは溜ためいき息をついてクリストフに言つた。

「あれは……私の兄です。」

クリストフは了解した。

「ああ……私にも覚えがあります……。」と彼は言つた。「私にもそんな兄弟が一人あるんです……。」

セシルはやさしい同情を寄せて、彼の手をとつた。

「あなたも？」

「ええ。」と彼は言った。「あんなのは家庭の喜びですね。」

セシルは笑った。そして二人は話を交えた。がまったく、家庭の喜びは少しも彼女の心を喜ばせなかったし、結婚の考えは少しも彼女の心をひかなかった。男というものはあまり価値のあるものではなかった。彼女は独立の生活のほうはずっとよいと考えていた。現に母親も、独立生活の自由を長い間待ち望んできたのだった。セシルもその自由を失いたくなかった。彼女が楽しみにして胸に描いてる唯一の夢想は、いつか、あとになって、それもいつのことだかわからないが、田舎で暮らすということだった。しかし彼女は、その生活の詳細を想像するだけの労もとらなかつた。そんな不確かな事柄に思いをさせるのは大儀だった。それよりは眠るほうがよかつた——もしくは仕事をやるほうがよかつた……。彼女はその空中楼阁が実現するまでは、夏の間パリーの近郊に小さな家を借りて、それを母と二人きりで占領していた。汽車で二十分ほどの所だった。家は停車場からかなり遠くて、田んぼと言われている荒蕪地のまん中に孤立していた。セシルはしばしば夜ふけにもどつて来た。しかし少しも恐くなかつた。危険が起ころうとは思っていなかった。ピストルを一つもつていたが、いつも家に置き忘れていた。そのうえ、ろくにその使い方も知らなかつた。

クリストフはその訪問中、彼女に演奏させた。楽曲にたいする彼女の洞察力どうさつを見るところにうれしかった。一言いってやったばかりで彼女がその表現すべき感情にびたりとはまるべきには、ことにうれしかった。彼は彼女がみごとな声をもつてすることに気づいていた。彼女はそれをみずから少しも知らなかった。彼は強しいて彼女に練習をさせた。ドイツの古いリード歌曲や自分の音楽などを歌わせた。彼女はそれに興味を見出して、彼はもとより自分でも驚くほどの進歩をした。彼女は非常に豊かな天分をもっていた。音楽の火の粉は不思議にも、芸術的感情の欠けてるこのパリー小市民の娘の上に落ちていた。このフィロメール——（そう彼は彼女を名づけていた）——は、時とすると音楽の話をすることもあったが、それはいつも実際のな方面についてであつて、けつして感情的な方面についてではなかった。彼女は歌やピアノの技術についてしか興味をもっていないらしくかった。二人はいっしょにいて音楽を奏していないときには、たいてい家事や料理や家庭生活など、もつとも通俗な話ばかりした。そしてクリストフは、普通の女相手にはそういう会話を一分も辛抱できなかつたはずなのに、このフィロメールを相手にするといかにも当然らしく話し合つていた。

かくて二人は差し向かいになつて晩を過ごした。落ち着いたほとんど冷やかな愛情で真ま

面目に愛し合っていた。ある晩彼は夕飯の御馳走ごちそうになりに来て、いつもよりおそくまで話し込んでると、激しい雷雨が起こった。終列車に乗るため出発しかけたときには、雨と風とが猛りたげたっていた。彼女は彼に言った。

「出かけるのはおよしなさいよ。明朝帰ることになさいよ。」

彼はその小さな客間の一時こしらえの寢床についた。薄い仕切りがセシルの寢室を隔てるきりだった。扉も閉められていなかった。寢床の中の彼のところまで、向こうの寢台の音や若い女の静かな息の音が聞こえてきた。そして五分もたつと彼女はもう眠っていた。彼もほどなく眠ってしまった。濁った思いの影さえ二人の心をかすめはしなかった。

またそのころ彼には、他の未知の友が幾人かできた。彼の作品を読んでひきつけられた人たちだった。その多くはパリから遠くに住み、または人を避けた生活をしていたので、彼に出会えるわけがなかった。成功というものはたとい粗末な成功にせよ、いくらかよいものである。新聞の馬鹿げた記事の仲介でもなければけっして手の届きそうにない、遠く離れた多くの善良な人々に、芸術家を知らしてくるのである。クリストフはそういう人たちの数名と交渉をつけた。あるいは、孤立した若い人々で、困難な生活をし、達せられ

るかどうか自分でもわからないある理想を、一身をあげて翹望ぎょうぼうしていた。そしてクリストフの親愛な魂を、むさぼるように吸い込んでいた。あるいは、地方のみすぼらしい人々で、クリストフの歌曲集を読んでから、シユルツ老人のように彼へ手紙を送って、彼と結びついた気になっていた。あるいは、貧しい芸術家たち——とりわけ一人の作曲家は熱心だった——で、ただに成功へばかりではなく、自己を表現することへも到達することができなかつたので、自分の思想がクリストフによつて表白されてるのを、非常にうれしがつていた。そのうちでもおそらくもつともなつかしみのある人々は、名前を明かさずに、より多く自由に書けるようにして、自分を助けてくれた兄とも言えるクリストフへ、心からの信賴の念を率直に訴えてきた。クリストフは、それらのやさしい魂の人たちを愛し得たらさぞうれしうだろうと思えるのに、いつまでも直接知り合いになれそうもないと考えるとき、胸がいっぱいになるのを覚えた。そして、彼らがクリストフの歌曲集に接吻せつぶんするように、彼もそれら未知の人々の手紙のあるものに接吻をした。どちらでもそれぞれ考えていた。

「親愛なるページよ、ほんとにお前は私に喜びを与えてくれる！」

かくて彼の周囲には、世界のいつもの律動リズムに従つて、天才の小家庭ができ上がった。そ

の家庭は天才から養われまた天才を養い、しだいに大きくなってゆき、ついには、天才を中心とする大きな集団的魂を——諸天体の和ハーモニー声ニにその親愛な合唱を交えながら空間を回転する、光り輝く一世界、精神上の一遊星、とも言うべきものを、こしらえ出すものである。

クリストフとその眼に見えない友人らとの間に、神秘的な連れんけい繋けいが織り出されてくるに従って、彼の芸術観に革命が起こってきた。彼の芸術観はいつそう広いいつそう人間的なものとなつていった。彼はもはや、単なる独自であり自分一人のための言葉である音楽を欲しなかつたし、専門家ばかりを相手のむずかしい組み立てはなおさら欲しなかつた。彼は音楽が一般の人々と交渉することを欲した。他人に結びつく芸術こそ、真に生きたる芸術である。ヨハン・セバスチアン・バッハは孤立せるもつとも苦しいおりにも、芸術のうちに表白してゐる宗教的信念によつて他人と結合していた。ヘンデルやモーツァルトは、自然の勢いによつて、自分のためではなく公衆のために書いていた。ベートーヴェンでさえも、群衆を相手にせざるを得なかつた。それは仕合わせなことである。人類はときどき天才に向かつて言つてやるがよい。

「汝なんじの芸術のうちには、俺おれのためのものは何があるか。もし何もないとすれば、消え失うせ

てしまえ！」

そういう拘束に会って天才は第一に利するところがある。もちろん、自己をしか表現しない大芸術家もいる。しかしもつとも偉大なのは、万人のために鼓動する心をもった人々である、生きたる神を面と向かつて見ようと欲する者は、自分の思想の空虚な蒼空あおぞらのうちにはなしに、人間にたいする愛のうちに、それを捜し求むべきである。

当時の芸術家らは、そういう愛から遠く離れていた。彼らが物を書く対象は、自惚うぬぼれが強く無政府主義的で社会生活から根こぎにされたいいわゆる優秀者どもであり、自分以外の人間の熱情を分有しないことを光栄と心得、またはそれをもてあそんで、いわゆる優秀者どもであつた。他人に似ないために人生から絶縁することは、なるほどりっぱな光栄かもしれない。いつそのこと死んでしまったがいいだろう！ しかしわれわれは、生者のほうへおもむき、大地の乳房ちゅうぶさを、わが民族のうちのもつとも神聖なものを、家庭と土地とにたいする愛を、吸おうではないか。もつとも自由なる時代にあつて、イタリー文芸復興の年若な主将ラファエロは、チベール彼岸のマドンナのうちに母性を光栄あらしめていた。しかるに今日たれかわれわれに、一つの椅子に凭よれるマドンナを音楽で与えてくれる者があるか。生活のあらゆる時間のために音楽を与えてくれる者があるか。君たちは何ももつ

ていない、フランスにおいて何ももっていない。自分の民衆に歌を与えんと欲するとき、君たちはドイツの過去の大家らの音楽を剽竊ひょうせつしなければならぬではないか。君たちの芸術は根底より頂上まで、すべてをこしらえるかこしらえ直すかしなければならぬのだ……。

クリストフは、当時地方の町に居を定めてるオリヴィエと通信していた。先ごろのあの豊富な合作を手紙でやりつづけようとつとめていた。昔のドイツの古い歌曲リートの実質となつてゐるもののような、日々の思想や行為に関連する美しい詩的な原文を、彼はオリヴィエから得たがつていた。聖書の短い断片やインドの詩、宗教的なあるいは道徳的な叙情小曲、自然のちよつとした画幅、恋愛的なあるいは家庭的な情緒など、単純健全な心の人たちのための朝や夕や夜の詩を求めていた。一つの歌曲リートには四行から六行くらいの詩句で十分である。もつとも単純な表現でよろしい。巧妙な展覧せいちも精緻な和声ハーモニーもいらぬ。君たち耽美家たんびの熟達せる技能が何になるう？ 君たちは僕の生を愛してほしい。僕を助けて僕の生を愛させてほしい。フランスの日常を、僕の非凡な時や平凡な時を、僕のために書いてくれたまえ。そして、もつとも明快な旋律的楽句を求めようではないか。現代の多くの音楽家の音楽に見るような、一階級だけの方言にすぎないその芸術的な言葉を、極端に避け

ようではないか。「芸術家」としてではなく、人間として話すだけの勇氣をもたなければいけない。僕たちの父祖がなしたところを見たまえ。万人の用いる音楽的形式への復帰から、十八世紀末の古典派の芸術は生まれてきたのだ。グルックや交響曲シンフォニーの創造者たちや歌曲リートの大家たちなどの旋律的楽句は、ヨハン・セバスチアン・バッハやラモーなどの精緻なあるいは巧妙な楽句に比べると、時として平凡な市井的なものと思われることがある。けれどそういう地質こそ、偉大なる古典派らの味わいや広い名声を作り出したのだ。もつとも単純な音楽形式から、歌曲リートから、歌ジック・芝居シュピールから、彼らは出発したのだ。それら日常生活の小さな花が、モーツアルトやウエーバーなどの連中の幼年時代にしみ込んだのだ。

——君たちも同様にしたまえ。すべての人のための歌を書きたまえ。そうした上で、交響曲シンフオニーを築き上げるがいい。一足飛びにやったって何になろう？ピラミッドは頂から作り始めるものではない。君たちの現今の交響曲シンフォニーは、胴体のない頭ばかりである。おう才人たちよ、一身を具現したまえ。民衆と親和する音楽家らの気長い世代が必要なのだ。一つの音楽芸術は一日にして建設されるものではない。

クリストフは、そういう理論を音楽に通用するばかりでは満足しなかった。彼はオリヴィエに向かつて、文学にそれを適用せよと勧めた。

「現代の作家らは、」と彼は言った、「稀有なる人事や、もしくは、活動的な健全な人々の大社会の周辺にある、異常な一団の中にしかない人物をばかり、描写しようと骨折っている。そういうふうには彼らはみずから人生の外に出ているので、彼らを打ち捨てて人々のいる所に行きたまえ。日々に見られる人々へ、日々に見られる生活を示したまえ。その生活こそ、海よりもより深くより広いのだ。われわれのうちのもっとも微賤な者といえども、内に無限なるものになつてゐるのだ。人間たるの単純さをもつてゐるあらゆる者のうちに、恋人のうちに、友のうちに、分婉ぶんべんの日の輝かしい光栄を苦痛で購あがなう女のうちに、人知れず身を犠牲にしてだれからも知られていない者のうちに、無限なるものがある。甲より乙へ乙より甲へと流れる、生命の波がある……。それら単純な人々の一人の単純な生活を書きたまえ。世界の第一日以来、みな同じようでもしかも異なつており、みな同じ母の息子むすこである、相ついで来る日々の、平穩な叙事詩を書きたまえ。それを単純に書きたまえ。現代の芸術家らの力を疲憊ひはいさしてゐる、繊細な技巧などに気をもまないようにしたまえ。君は万人に話しかけるのだ。万人の言葉を用いたまえ。言葉には高尚も下等もないのだ。言うべきことを正確に言つてゐるか言つてゐないかがあるばかりだ。君が作るあらゆるものに君の全部をこめたまえ。自分の考へてゐることを考え、自分の感じてゐることを感じたまえ。

君の心の律動が君の書くものを奪い取るようにしたまえ。文体とは魂にほかならないのだ。
 」。――

オリヴィエはクリストフの説を承認した。しかし多少皮肉な答えをした。

「そういう作品はなるほどりっぱなものではあろう。しかしそれは、それを読み分け得る人々のもとまでは達しないだろう。途中で批評界のために窒息させられるかもしれない。」

「それこそフランスのつまらない市井的な考えだ。」とクリストフは答え返した。「自分の書物について批評界がどう考えるか、そんなことを気に病むのか！……君、批評家というものは、勝利か敗北かを書き止めるために存在するばかりなんだ。ただ勝利者になりたまえ……。僕は批評家などはなしで済ませる。君も批評家なしに済ませる道を学びたまえ……。――」

しかしオリヴィエは、なおその他のものがなくてもやってゆける道を覚えていた。芸術もクリストフもなく構わなかった。そのころ彼はもうジャックリーヌのことしか考えていなかった。

彼らの恋愛の利己主義は、彼らのまわりに空虚をこしらえ出していた。そして浅慮にも、将来の源泉をすべて焼きつくしていた。

交じり合つた二人の者がたがいに相手を吸い取ろうとばかり考えてる、初めの間の陶醉……。身体と魂とのあらゆる部分で、彼らは触れ合い、味わい合い、たがいにはいり込もうとする。彼らは二人だけで、法則のない一つの世界をなし、恋に駆られた一つの渾沌界をなしている。そこでは混同し合つた各要素が、たがいに見分けることをまだ知らず、たがいに争つてむさぼり食う。二人はたがいに相手のうちにあるすべてのものを飲み合つた相手もまた自分自身なのである。世界も今は何になるう？ なごやかな逸楽の夢に眠つてゐる古のアンドロジューヌのように、彼らの眼は世界に向かつて閉じている。世界はすべて二人のうちにあるのである。

一様な夢の織り物をこしらえ出す昼と夜、美わしい白雲が、眩惑せる人の眼にただ輝ける跡をのみ残して空を過つてゆくように、流れ去る時間、春の懶さで人を包む、なま温かい息吹き、肉体の金色の熱、日に照らされた愛の葡萄棚、清浄な無羞恥、狂おしい抱擁、溜息や笑い、楽しい涙、おうそれら幸福の埃よ、汝から何が残るか？ 汝は人の

心にほとんど思い出の跡をもとどめない。なぜなら、汝がありし時には時間が存在して
なかつたのだから。

まつたく同じような日々……。静かな曙……。眠りの淵から、からみ合つた二つの身体
が同時に浮かび出る。息を交えて微笑める顔が、いつしよに眼を開き、たがいに見合わし
たがいに接吻し合う……。朝の時刻の若々しい爽かさ、燃ゆる身体の熱を鎮める新鮮な
空気……。夜の快樂がその奥に響きをたててる、つきせぬ日々の快い夢心地……。夏の午
後、畑の中で、天鷲絨のごとき牧場の上で、長い白楊樹のさらさらと鳴る下で、うつと
りとふける夢想……。腕と手とを組み合わせ、輝ける空の下を、愛の臥床へ連れだつても
どり来るおりの、美しい夕の夢想。風は灌木の枝をそよがしている。湖水のように澄
み渡つた空には、銀色の月の仄白い微光が漂っている。星が一つ流れて消える——心へ伝
わるかすかなおののき——音もなく滅びる一つの世界。街道には二人のそばを、足を早め
た無言の人影がまれに通り過ぎる。町の鐘は翌日の祭りを告げて鳴る。二人はちよつと歩
みを止める。彼女は彼に身を寄せる。二人は言葉もなくたたずむ……。ああ、この瞬間の
ように、人生がこのままじつとしているならば！……彼女は溜息をもらして言う。

「なぜ私はこんなにあなたが恋しいのでしょうか？……」

彼らはイタリーへ数週間旅をした後、オリヴィエが教師に任命されたフランス西部の町に、身を落ち着けたのだった。彼らはほとんどだれにも会わなかった。何事にも興味を覚えなかつた。やむを得ず訪問する場合には、その厭いやな冷淡さが無遠慮に現われたので、人々は氣持を害したりあるいは苦笑をもらしたりした。どんな言葉も二人の上をすべり落ちてその心まで達しなかつた。二人は若夫婦特有の横柄なしかつめらしさをそなえていて、人に向かつてこう言うかのようにだつた。

「君たちには、何にもわからないのだ……。」

ジャックリーヌのやや不機嫌ふきげんそうな専心的なきれいな顔の上に、またオリヴィエの樂しげなぼんやりしてる眼の中に、つぎの思いが読み取られるのだつた。

「僕らがいかに君たちをうるさがってるか、少しは察してくれてもよきそうなものだ……。いつになったら僕らは二人きりになれることかしら？」

彼らは人中にいるときでさえ、無遠慮に二人きりの心持を様子に示した。他人との會話をそちのけにして二人の眼つきが話を交えてるのが、傍かたわらから見てとられた。彼らはたがい顔ほほえをながめなくとも、たがいに見てとることができた。そして彼らは微笑ほほえんでいた。

二人とも同時に同じことを考えてるとわかっていたのである。社交的な多少の束縛を脱して、ほんとに二人きりになるとときには、喜びの叫びを発して、子供らしい馬鹿げたことをしつくした。あたかも七、八歳の子供のようだった。ばかばかしい口のきき方をした。おかしい愛称で呼び合った。彼女は彼のことを、オリイヴ、オリヴェー、オリファン、ファンニー、マミー、ミーム、ミノー、キノー、カウニッツ、コジーマ、コブール、パノー、ナコー、ポネット、ナケー、カノー、などと呼んだ。そして自分は小娘のようなふうをした。しかし彼女は彼にたいして、母親や姉妹や妻や恋人や情婦など、あらゆる愛情を一つにした者でありたがっていた。

彼女は彼の楽しみを分かちもつだけでは満足しなかった。かねて考えていたとおり、彼の仕事にもいっしょに加わった。それもまた一つの遊びであった。初めのうち彼女は、仕事を珍しがってる細君に通有な、興味深い熱心さを示した。図書館へ行って書き写してやることだの、面白くもない書物を翻訳することなど、きわめてつまらない仕事にも、楽しみを見出してるかのようだった。それは彼女の生活の予定の一部分だった。ごく純潔なごく真面目な生活、高尚な思想と共同の勉強とにささげつくした生活、それを彼女は営むつもりだった。そして、恋愛が二人を輝かしてる間はそれも結構だった。なぜなら彼女は、

彼のことばかり考えていて、自分が何をしてるかは考えていなかったから。もつとも奇態なことには、そういうふうにして彼女がなすことはことごとくうまくいった。他のときだつたら理解しがたいような抽象的な書物を読んでも、彼女の精神はなんらの努力もなしに働いた。彼女の一身は恋愛のために地上からもち上げられてるかのようだった。彼女はそれを自分では気づかなかつた。屋根の上を歩く夢遊病者のように、自分の真面目な楽しい夢を、傍目もふらずに平然と追っかけていた……。

やがて彼女は、その屋根に気づき始めた。それでも少しも不安を覚えなかつた。でも屋根の上で何をしていたかを見ずから怪しんで、家の中にはいった。すると仕事が厭になつた。仕事のために愛が邪魔されると思い込んだ。もちろんそれは彼女の愛がすでに弱つてきたからのことである。しかしそんな様子は少しも見えなかつた。彼らはもう一瞬間も離れてることができなかつた。世間との交渉を断ち、家の扉を閉ざし、いかなる招待をも承諾しなかつた。他人の愛情にも、自分らの仕事にも、たがいの愛から気をそらさせるすべてのことに、嫉妬の念を覚えた。クリストフとの通信も間が遠くなつた。ジャックリーヌはクリストフを好んでいなくなつた。彼女にとって彼は一つの敵であつて、彼女があずかり知らぬオリヴィエの過去の一部を代表していた。そして彼がオリヴィエの生活のうちに

場所を占むれば占むるほど、ますます彼女は本能的にオリヴィエの生活を彼から奪い取るうとした。自分のためにする下心からはなかったが、ひそかにオリヴィエを友から引き放そうとした。クリストフの態度や顔つきや手紙の書き方や芸術上の抱負などを冷笑した。それにはなんらの悪意もまた策略さえもなかった。善良な性質からそんなことをするのだった。オリヴィエは彼女の批評を面白がった。そこに少しも悪意を認めなかった。そして自分はやはり同じようにクリストフを愛してると思っていた。しかし彼が愛してるのはもうクリストフの一身をだけだった。それは友情においては些々たることにすぎない。彼はしだいにクリストフを理解しなくなってきたことや、二人を結びつけていたクリストフの思想や勇壮な理想主義に興味を失ってきたことには、みずから気がつかなかった……。恋愛は若い心にとつてはあまりに強い楽しみである。他のいかなる信仰が恋愛と両立し得るだろうか？ 愛する者の身体とその神聖な肉から摘み取られる魂とだけが、知識の全部であり信仰の全部である。他人が大事にしてるものも、また自分が昔大事にしていたものも、いかに憐れみの微笑でなめられることであろう！ 力強い人生とその苛辣な努力とについて、もはや眼にはいるものは、不滅らしく思える一時の花ばかりである……。恋愛はオリヴィエを奪い取っていた。初めのうちは彼の幸福もなお、優雅な詩になって現われる

だけの力をもっていた。がやがて彼には、それさえもつまらぬことのように思えてきた。恋愛からそれだけの時間を取り去ることにすぎなかった。そしてジャックリーヌも彼と同じく一生懸命になって、他のあらゆる生存の理由を破壊せんとし、愛の葛かざらを支持し生かしている生の樹木を枯らさんとしていた。かくて彼らは二人とも幸福のうちに身を滅ぼしていった。

悲しくも、人はたちまちにして幸福に馴なれ親しむ。利己的な幸福が生なの唯一の目的となるときには、生はただちに目的なきものとなる。幸福は一つの習慣となり、一つの中毒となって、人はもはやそれがなくては済まされなくなる。しかもそれがなくても済ませることが必要なのだ……。幸福は世界の律動リズムの一瞬間であり、生の振子が往来する両極の一つである。その振子を止めんとするには、それを破壊しなければならぬだろう……。

二人は「感受性を狂暴ならしむる安逸けんたいの倦たい」を知った。楽しい時期は、歩みをゆるめ、勢い衰え、水なき花のようにしおれていった。空はやはり同様に青かったが、もはや朝の軽やかな空気はなかった。すべては小揺るぎもせず、自然は黙っていた。彼らは願っていたとおり二人きりだった。——そして二人の心は切なかった。

言い知れぬ空虚の感じが、楽しくなくもない漠然たる倦怠が、彼らに姿を見せてきた。彼らはそれがなんであるかを知らなかった。ただなんとなく不安だった。彼らは病的なほど感じやすくなつた。沈黙をじつと聞き澄ましてる彼らの神経は、人生の些細な不意の出来事にぶつかつても、木の葉のようにうち震えた。ジャックリーヌは理由もなしに涙を流した。涙の原因は愛であると信じたかつたけれども、もうそればかりではなかつた。結婚前の熱烈な苦しい年月を経て後、目的を達して——達してそして通り越して——突然あらゆる努力をやめ、あらゆる新しい行ないが——そしておそらくあらゆる過去の行ないが——にわかに無用に帰したので、彼女は自分でも訳のわからない惑乱に陥つて、圧倒されてしまつたのだつた。彼女はそうだとは認めないで、神経の疲れのせいだとして、一笑に付し去ろうと思つた。しかしその冷笑は涙と同様に不安なものだつた。彼女は健気にもまた仕事にかかろうと努めた。けれど手をつけるや否や、そんなばかげた仕事に以前どうして興味をもち得たか、もうわからなくなつた。厭になつて仕事を放り出した。彼女は社交的關係にふたたびはいろいろと努めた。しかしそれも同じくできなかつた。一定の性癖がついていたので、この世では余儀ない平凡な人々や言葉に接する習慣を失つていた。彼女はそれらを笑うべきものだと思つた。そういう不幸な経験から、まさしく恋愛ばかりがりつば

なものだと信じたがつて、二人きりの孤独な生活にまたはいり込んだ。そして実際しばらくの間は、彼女は以前にもまして愛に駆られてるように見えた。しかしそれは、そうありたいと願つてゐるからであつた。

オリヴィエは彼女ほど熱情的でなくしかもやさしみの情はいつそう多かつたので、それらの不安を感じることは少なかつた。自分では、漠然とした間かんげつ歇的なおののきを感じるばかりだつた。そのうえ、日々の仕事や好ましくない職業などの煩いのために、彼の愛はある程度まで維持されていた。しかし、彼は繊細な感受性をそなえていたし、愛する者の心のなかに起こるすべての変動は彼の心にも伝わつていたので、ジャックリーヌが隠してゐる不安の情は彼にも感染してきた。

ある日の午後、彼らは田舎いなかを散歩した。前からすでに楽しかつた。すべてが微笑ほほえんでいた。しかし散歩に出るや否や、陰鬱いんうつな懶い悲しみが彼らの上に落ちかぶさつてきた。冷えきつたような心地がした。口をきくことができなかつた。それでも強しいて話をした。しかし口に出す一語一語は、空虚を響かせるばかりだつた。彼らはあたかも自動人形のように、何にも見も感じもしないで散歩を終えた。切ない気持で帰つてきた。黄昏たそがれのころだつた。部屋の中はがらんとしていて暗くて寒かつた。彼らは自分たちの姿が見えないよう

にすぐには燈火もつけなかった。ジャックリーヌは自分の室に入って、帽子や外套がითუもぬがないで、黙つて窓ぎわにすわつた。オリヴィエも隣の室でテーブルによりかかつていた。間の扉とびらは開いていた。彼らはたがいの息の音が聞こえるほど近かつた。そして薄暗がりのなかで二人とも、無言のまま苦い涙にがを流した。口に手をあてて泣き声を聞かれまいとした。ついにオリヴィエは苦しくなつて言つた。

「ジャックリーヌ……。」

ジャックリーヌは涙をのみ込んで言つた。

「なあに？」

「こちらへ来ないかい？」

「行きますわ。」

彼女は外出着をぬいで眼を洗いに行つた。彼は燈火をつけた。やがて彼女は室にもどつてきた。二人は顔を見合わせなかつた。たがいに泣いたことを知っていた。そして慰め合うこともできなかつた。泣いた理由がわかつていたから。

彼らはもはや心の悶もだえをたがいに隠し得ない時期となつた。そしてその原因を自認した

くなかったので、他の原因を捜し求めた。それは見出すに困難でなかった。彼らは地方生活の退屈さに罪を着せた。それは彼らにとって一つの慰藉いしやだった。ランジェー氏は娘から様子を知らせられたが、彼女がその勇ゆうきよう 侠いさやうな気持に疲れ始めたことを大して驚きはしなかった。彼は政治上の知友關係を利用して、婿をパリーへ転任さしてもらった。

その吉報が到着したとき、ジャックリーヌは喜びに躍おどり上がって、過ぎ去った幸福をみな取りもどした。今や別れ去る場合になると、その厭いやな土地も彼らにはなつかしく思えた。彼らはそこに多くの愛の思い出を振りまいていた。終わりの日々はその跡を捜し回ることに費やした。そういう一種の巡礼からやさしい憂愁が立ちのぼってきた。その穏やかな一望の風物は幸福な二人を見たのだった。ある内心の声が彼らにささやいていた。

「お前はお前が残してゆくものを知っている。これから見出そうとするものを知っているか？」

ジャックリーヌは出発の前日涙を流した。オリヴィエはその訳を尋ねた。彼女は言いがらなかつた。彼らは言葉の響こわきが恐いおりにはいつもしていたとおりに、一枚の紙を取ってたがいに書き合つた。

「私の親愛なオリヴィエ……。」

「僕の親愛なジャックリーヌ……。」

「立ち去るのは切ない気がします。」

「どこから立ち去るのが？」

「私たちが愛し合った土地から。」

「どこへ向かつて？」

「私たちが年老いる所へ。」

「僕たちが二人で暮らす所へ。」

「けれどもうあんなに愛し合えはしませんもの。」

「なおいつそう愛し合うのだ。」

「どうだかわかりませんわ。」

「僕にはわかつている。」

「私もそう願っていたいわ。」

そこで彼らは紙の下のほうに二つの輪を書いて、抱擁し合う意味を表わした。それから、彼女は涙を拭き、笑顔をした。そして、丸襷襟まるひだえりのような立ち襟の白い短外套がいでうと縁なし帽子とを彼に着せかけて、アンリー三世の小姓こしやうみたいに仕立てた。

パリーで彼らは、以前別れた人々と再会した。けれどももう皆様子が違っていた。クリストフもオリヴィエが到着した報に接して、大喜びで駆けつけていった。オリヴィエも彼と会うのが同様にうれしかった。しかし初め一目見たときから、彼らは意外な窮屈さを感じた。二人ともそれを押しつけようとしたが、だめだった。オリヴィエはたいへん優しくつたけれど、彼のうちには何か変わったものがあつた。クリストフはそれを感じた。結婚した友はいかにつとめても、もはや昔どおりの友ではない。男の魂にはもうかならず女の魂が交じっている。クリストフはオリヴィエのうちの至るところ、眼つきのとらえがたい輝きのうちに、見覚えのない唇くちびるの軽い皺しわのうちに、声や思想の新しい抑揚のうちに、女の魂を嗅かぎ取つた。オリヴィエはそれにも気づいていなかった。しかし彼は、別れたときとはたいへん違つてるクリストフを見て驚いた。クリストフが変わつたのだとまでは考えなかつた。自分のほうが変わったのだと認めた。けれどそれは、年齢から来る尋常な進化であると思われた。そしてクリストフのうちに同様の進歩が見えないのに驚いた。クリストフがいつまでも同じ思想のうちにとどまつてるのが、不満でたまらなかつた。それらの思想は、以前は彼にも尊いものだったが、今はもう幼稚な流行遅れのもののような気

がした。というのは、彼が知らないまに彼のうちにはいり込んだも一つの他の魂の流儀に、それがかなっていかなかったからである。そういう感じは、ジャックリーヌが話に加わるときいつそうはつきりしてきた。するとオリヴィエとクリストフとの眼の間に、皮肉の帷とぼりはさまってきた。それでも彼らはたがいに自分の感銘を隠そうと努めた。クリストフはやって来るのをやめなかった。ジャックリーヌは意地悪い刺とげとげ々々した小さな矢を、なんの気なしに彼へ投げつけた。彼はそれを勝手にさしておいた。しかし自分の家に帰ると悲しくなった。

パリーで過ごした初めの幾月かは、ジャックリーヌにとって、したがってまたオリヴィエにとつても、かなり幸福な時だった。初め彼女は、住居のことに気を奪われた。二人はパツシーの古い通りに、ちよつとした庭に面した小ぎれいな部屋へやを見出していた。家具や張り紙を選択することが数週間の仕事だった。ジャックリーヌはそのために、非常な精力おおげさと大袈裟な熱情をさえも費やした。あたかも彼女の永遠の幸福が、壁紙の色合いや古戸棚とだなの横顔にでも基づいてるかのようだった。つぎに彼女は、父や母や友人らとふたたび交わりだした。彼女は恋愛の間彼らをすっかり忘れていたので、それはまったく再発見と同様だった。彼女の魂がオリヴィエの魂に交じっていたとしても、オリヴィエの魂も多少彼女

の魂に交じっていて、彼女は新しい眼で旧知の人々を見たので、ますますその感じが深かった。彼女には彼らがりっぱな者に思われた。と言ってそのために、初めのうちはオリヴェイエの価値が減じはしなかった。両者はたがいに価値づけ合っていた。夫の精神的沈潜や詩的な薄ら明かりは、ジャックリーヌをして、享楽や光輝や他人の好感などをのみ求めるそれら社交界の人々のうちに、より多くの愉悅を見出さしめた。また、自分が属していただけによく知ってる社交界の魅惑的なきし危険な欠点は、彼女をして、夫の心の堅実性を高く評価せしめた。彼女はそういう比較を面白く思い、自分の選択を正当視するために長くそれをつづけた。——あまり長くつづけるうちには、どうして自分が今を選択したのかももうわからなくなる瞬間さえあった。仕合わせにもその瞬間は長つづきしなかった。彼女はそれをみずからとがめたので、そのあとではオリヴェイエにたいしてこの上もなくやさしかった。がそうすることによって、彼女はまた比較を始めだした。それが習慣となってしまうと、もう面白みは覚えなくなった。そして比較はいっそう辛辣しんらつになった。相反した二つの世界は、たがいに補い合うどころか戦いを始めた。パリーの友人らのうちに自分が現在味わってるいろんな長所を、のみならずまた短所の多少をも、どうしてオリヴェイエがもっていないのだろうか、彼女は考えてみた。彼女はそのことを彼に言いはしな

った。しかしオリヴィエは、自分を用捨なく観察してる妻の眼つきを感じた。彼は不安と心痛とを覚えさせられた。

けれども彼はなお、恋愛から与えられた優越権をジャックリーヌにたいして失ってはいなかった。そしてこの若い夫婦は、やさしい勤勉な親愛の生活をかなり長くつづけてゆけるはずだった。ところがあある事情のため、生活の物質的条件が一変をきたして、その脆い^{もろ}平衡を破ってしまった。

そこにてわれらは大敵ブルートーを見出せり……。

ランジェー夫人の姉妹の一人が死亡した。それは富裕な工業家の寡婦であつて、子供がなかった。でその財産はすべてランジェー家に渡つた。ジャックリーヌの財産もそのためにたいへん増加した。その相続財産がやつて来たとき、オリヴィエは金銭に関するクリストフの言葉を思い出して、こう言つた。

「そんなものはないでもないじやないか。かえつて禍^{わざわい}になるかもしれない。」
ジャックリーヌは嘲笑^{あざわら}つた。

「馬鹿なことをおっしやるわね。」と彼女は言った。「禍になるなんてことがあるものですか。第一私たちの生活だって、そのためにちつとも変わりはいらないでしょう。」

実際二人の生活は表面上少しも変わらなかつた。まだ財産が足りないというジャックリーヌの嘆声がいばらくして聞かれたほど、同じような生活だつた。しかしそれこそ、何か変わったものがある明らかな証拠だつた。彼らの収入が二倍三倍したのは事実であるが、何に使つたかわからないまにそれがみななくなつていつた。以前どうして暮らしてゆけたかが怪しまれるほどだつた。金はみないろんな新しい費用のために吸い取られて消えていつた。それらの費用もすぐに習慣的となり欠くべからざるものとなつた。ジャックリーヌは一流の仕立屋と近づきになつていつた。子供のときから知つてる日雇いの出入りの仕立屋とは、手を切つてしまつていつた。つまらないものでできてはいるがそれでもなおきれいなあの廉価な小さい帽子をかぶつてた時代——非のうちどころのないほど優美なものではないが、しかし彼女の容姿を反映して輝き、彼女自身の一部とも言ふべき、あれらの服をつけていつた時代、それはどこへいつてしまつたのであろう？ 彼女の身のまわりに光被していつた親和な落ち着いた魅力は、日に日に消えていつた。彼女の詩趣は融とけ去つていつた。彼女は通俗な女となつてしまつた。

彼らは住居を変えた。あれほどの苦心と喜びとで定めた住居は、もう狭く醜いものと思われた。すっかり魂がこもって輝き渡り、窓にはなつかしい一本の木がその細長い姿を揺すつてる、あのささやかな小さな室々を捨てて、自分たちが好みもせず好むこともできず退屈でたまらない、広い安楽な間取りのいい部屋に移った。馴染み深い古い品物の代わりに、親しみのない道具や壁紙を取り付けた。もはやどこにも思い出をこめる場所がなかった。共同生活の初めのころのことは、すっかり頭から追い払われた……。過去の恋愛に二人を結び付ける絆が断たれるのは、いっしょになつて二人にとっては大なる不幸である。その過去の面影は、初めの情愛のあとに必然起こってくる落胆や敵視にたいして、二人を保護してくれるものなのである……。容易に金が使えるためにジャックリー又は、パリーや旅行中で——（金持ちとなつた今では二人はしばしば旅していた）——富裕無用な人々の階級に接近した。そして彼らと交際してうちに、他の人々にたいして、働いてる人々にたいして、一種の軽侮の念を起こさせられた。彼女は驚くべき順応力によつて、それらの廃頹した無駄な魂とすぐ同化した。それができなかつた。するとただちに憤然といきりたつて、家庭の務めと中庸の財産とをもつて人は幸福であり得る——幸福であり得なければならぬ——という思想を、「市井的な卑しいもの」だと見なした。

恋愛のうちに惜し気もなく自己を投げ出した過去のことを、会得することさえできなくなつた。

オリヴィエは戦えるほど強くはなかつた。彼自身もまた変わつていた。教師の職を捨てて、もう何にも義務的な仕事をもたなかつた。ただ文筆を執つてゐるばかりだつた。生活の平衡はそのために変わつてきた。これまで彼は、芸術にすっかり没頭できないのを苦しんでいた。ところが今や芸術に身を委ねてしまうと、雲霧のなかに迷い込んだ心地がした。

職責を分銅ぶんどうとせず強い実生活を支持としない芸術、おのが肉体のなかに日々の務めの針を感じない芸術、パンを得る必要のない芸術は、そのもつともよき力と現実性とを失うものである。それはもはや贅ぜいたく沢の花にすぎない。それはもはや人間の苦しみの神聖な果実

——（もつとも偉大なる芸術家のうちに存するところのもの）——ではない……。オリヴ

イエは「なんのためになるか……」という懶惰らんださを感じた。もう何物も彼を促すものがなかつた。彼はそのペンを夢想にふけらせ、あちらこちらへ彷徨ほうこうし、道に迷つてしまった。おのが生の道筋を気長に孜々ししとして掘つている同類の人々とも、接触することがなくなつた。勝手は悪いがそれでも面白くもない異なつた世界へ、陥つてしまった。気の弱い柔和な好奇ものずきな彼は、優雅は欠けていないが堅固さが欠けてゐるその世界を、楽しげに観察

してみた。そしてしだいにその色に染められてることにはみずから気づかなかつた。彼の信念はもう以前ほど確固たるものではなかつた。

その変化は、彼においてはジャツクリーヌにおけるほど急速ではなかつた。女は一挙に全然変わり得るといふ恐るべき天性をもっている。一身のうちに瞬間に起こるそれらの死滅や更生は、その一身を愛する人々をして駭然^{がいぜん}たらしむるものがある。けれども、意志の制御を受けない生気に満ちた者にとつては、明日はもはや今日と同じでないことも、自然の事柄であるに違いない。それは流るる水である。愛する者はその流れに従つてゆくか、あるいはみずから河となつてそれをおのが流れの中に取り入れるか、いずれかの道しかない。そしていずれの場合においても変化を免れない。それは危険な試練である。人は恋愛に服従したあとでなければ、恋愛をほんとうには知り得ない。共同生活の初年に当たつては、恋愛の調和はいかにも微妙なものであつて、二人のいずれか一方に些細^{ささい}な変調をきたすだけで、往々全体を破壊することがある。まして財産や環境の突然の変化は、いかに大なる影響を及ぼすかわからない。それに抵抗するためには、きわめて強く——もしくはきわめて無頓着^{むとんじゃく}で——あらなければならぬ。

ジャツクリーヌとオリヴィエとは、無頓着でもなく強くもなかつた。彼らは二人とも今

までと違った光のなかで顔を見合わした。そして相手の顔が見知らぬものとなったような気がした。その悲しい発見をしたときに、彼らは愛の憐れみ^{あわ}からしてたがいに自分の心を隠し合つた。彼らはまだやはり愛し合つていたのである。オリヴィエは仕事という隠れ家をもつていた。規則的に勉強すると平静な気持になることができた。ジャックリーヌには何にもなかった。何にもしてはいなかった。いつまでも寢床にぐずついたり化粧にかかったりして、幾時間も半ば裸のままじつと腰をおろしてぼんやりしていた。そして鈍い悲しみが一滴ずつ冷たい霧のようにたまつてきた。彼女は愛という一念から気をそらすことができなかった。……愛！　それが自我の寄与である場合には、人事のうちでもつとも崇高なものとなる。それが幸福の追求である場合には、もつとも愚かなもつとも ^{まんちやく}瞞着的なものとなる……。ジャックリーヌは愛以外に生の目的を考えることができなかった。善意をいだいてるときには、他人に、他人の悲惨に心を寄せようと試みた。けれどそれはうまくいかなかった。他人の苦しみにたいするどうにも厭^{いや}でしかたなかった。それを見ることも考えることも彼女の神経には堪えがたかった。彼女は自分の良心を安めるために、慈善に似寄つたことを二、三度行なつてみた。その結果はつまらないものだった。

「ねえごらんなさい。」と彼女はクリストフに言った。「善^よいことをしようと思うと、か

えつて悪いことをしてるものです。差し控えてるほうがましですわ。私には善いことをする天性がありません。」

クリストフは彼女の顔を見守った。そして偶然出会って知った女どものある一人のことを考えた。それは墮落女工であつて、利己的で不品行で真の愛情などはもつことができないのだったが、しかし苦しんでる者を見ると、それが一日の知人であろうと未知の人であろうと、かならずその人にたいして母親めいた心持を起こすのだつた。もつとも厭な世話をも辞さなかつた。もつとも多くの献身的な行ないを求める人々にたいしては、不思議な喜びの情をさえも覚えた。彼女は自分でもそれがどうしてだかよく知らなかつた。おそらくは、おぼろな隠れた理想的な力の用途を、そこに見出してたのであろう。彼女の魂は生活の他の場合には萎縮いしゆくしきつていたが、そういうまれなおりにだけは大きく呼吸していた。他人の苦しみを少し和らげてやると、彼女はある安樂を感じた、そのときの彼女の喜びは、ほとんど不相応なものであつた。——利己的であるその女の温情は、そしてまた、元来親切であるジャツクリーヌの利己心は、共に美德でも悪徳でもなかつた。それが二人にとつては撰生法だったのである。ただ女工のほうがいっそう健康であつた。

ジャツクリーヌは苦悩のことを考えるとまいってしまった。肉体上の苦しみよりは死の

ほうが好ましいほどだった。美貌びぼうや青春など、自分の喜びの源の一つを失うくらいなら、むしろ死ぬほうが望ましいほどだった。所有すべき権利があると思ってるすべての幸福を所有しないこと——（彼女は幸福を信じていて、幸福は彼女においては、全的な荒唐無稽むげいな信仰であり、宗教的な信仰であった）——他人が自分よりも多くの幸福を所有するということ、それは彼女にはもつとも恐ろしい不正のように思われた。幸福は彼女にとつてただに信仰であるばかりでなく、また美德でもあった。不幸であることは一つの疾病しつぱいとさえ思われた。彼女の全生活はしだいにそういう原則に従って方向を定めてきた。生娘の彼女が怖おそ々おそとした貞節さで身にまどつていた理想主義の覆面から、彼女の眞の性質がのぞき出してきた。過去の理想主義にたいする反動によつて彼女は、きつぱりした生なまなま々なまなましい眼つきで万事をながめた。するとあらゆる事柄はもはや、世人の意見と生活の便宜べんぎとに一致する点においてしか価値をもたなかつた。そうなると彼女は、母と同じ精神状態に陥つた。彼女は教会へも行き、無関心な几帳面きちょうめんさで宗教上の務めを行なつた。それがほんとうに眞実なものであるかどうかは気にしなかつた。彼女には他にもつと實際的な悩みがあった。そして皮肉な憐憫れんびんの情で、自分の子供のおりの秘密な反抗心のことを思いやつた。——とは言え、現在の彼女の実利的な精神も、昔の彼女の理想主義と同じく、現実的なも

のではなかった。彼女はみずから強^しいているのだった。彼女は天使でも動物でもなかった。倦怠^{けんたい}を感じてる憐^{あわ}れな女にすぎなかった。

彼女は飽き飽きしていた……。自分が愛されていないということをも、オリヴィエを我慢できないということをも、一種の口実としてみずから考え得られなかっただけに、なおさら飽き飽きしていた。彼女には自分の生活が、封鎖され壁で囲まれ未来をふさがれてるように思われた。彼女は絶えず更新する新たな幸福にあこがれていた。それは子供らしい夢想であつて、幸福にたいする彼女の凡庸な能力にふさわしいものではなかった。幸福であるべきあらゆる理由をもちながら、やはり悶^{もた}えてばかりいる、多くの婦人が、多くの夫婦が、世にはあるものだが、彼女もまさにそのとおりでつた。そういう人たちはたいてい、金があり、りっぱな子供があり、りっぱな健康を有し、聡^{そうめい}明であつて美しい事柄を感じることができ、活動し善を行ない自他の生活を豊富ならしむべき、あらゆる方法を具有している。それなのに彼らは、たがいに愛していないとか、ある者を愛しているとか、ある者を愛していないとか言つて、始終愚痴ばかりこぼしている——自分自身のこと、感情上のあるいは肉欲上の関係、幸福にたいする彼らのいわゆる権利、矛盾した利己心、などにたえず頭を向け、やたらに論議ばかり試み、大なる恋愛や大なる苦悶^{くもん}の狂言を演じ、つい

にはその狂言をほんとうに信じてしまう……。

「君たちは少しも同情を受ける資格はない。幸福になるべき方法がそんなにたくさんあるのに、愚痴ばかりこぼすのは不都合なことだ。」と彼らに言つてやるがよい。彼らにはもつたいないその財産や健康やすべてりっぱな天の賜物を、彼らから奪い取つてやるがよい。自分の自由に狼狽ろうばいしてるそれらの自由となり得ない奴隷どもを、ほんとうの悲惨と苦惱くびきとの軛くびきの下につないでやるがよい。もし自分のパンを苦心くもんしてかせがなければならなくなつたら、彼らはそのパンを喜んで食べるであろう。もし苦悶くもんの恐ろしい顔をまともに見たならば、彼らはもはやその厭いやな狂言を演じ得なくなるだろう……。

しかしながら、要するに彼らは苦しんでいる。彼らは病者である。どうして彼らを憐あわれまずにいられよう？——憐あわれなジャックリーヌは、オリヴィエが彼女を引き止めておかないことについて無罪であると同様に、オリヴィエから離れ去ることについては無罪であつた。彼女は自然からこしらえられたままのものだつた。結婚は自然にたいする一つの挑ちよう戦せんであること、人は自然に向かつて一度手袋を投ずるときには、自然がかならずそれに応ずるものだど期待していなければならぬし、挑いどんだ戦せんいを勇敢につづけるの覚悟がなければならぬこと、それを彼女は知らなかつた。彼女は自分が誤つていたことに気づい

た。そのため自分自身に腹がたつた。そしてその見当はずれの念は、自分が愛していたすべてのものにたいする敵意に、自分の信念でもあつたオリヴィエの信念にたいする敵意に、変わつていった。聡明そうめいな女は時によつては男以上に、永久的な事柄にたいする直覚力を有するものである。しかしそれにつかまつて身を落ち着けることは、男よりいつそう困難である。永久的な思想をいなく男は、それを自分の生命で養つてゆく。しかし女はそれで自分の生命を養つてゆく。女はそれを吸い取るのみで、それを育て上げはしない。女の精神や心には、たえず新たな養分を投げ与えなければならぬ。その精神と心とは自分だけではやつてゆけない。そして信と愛とがない場合には、女はかならず破壊を事とする——少なくとも、最上の徳たる平静を天から恵まれていない場合には。

ジャックリーヌは以前、共通な信念の上に築かれた夫婦結合を、いつしよに戦い苦しむ働くの幸福を、深く信じていた。しかしその信念たるや、それが愛の太陽に美うるわしく照らされるときにしか信じられなかつた。太陽が沈んでゆくに従つてそれは、空虚な空の上にそびえてる不毛な陰暗な山のように思われてきた。そして彼女は同じ道をたどり行くには、もうその力がないような心地がした。頂に達したとて何になるものか。山の彼方かなたに何があるものか。なんとというはなはだしい欺瞞ぎまんだつたらう……どうしてオリヴィエがやはりな

お、生命を蚕食するその空想に欺かれてるかを、ジャックリーヌはもう理解することができなかつた。オリヴィエは知力と生活力とを多くもってはいないのだと、彼女は考えた。彼女は自分にとつては呼吸しがたいその大気のなかで、窒息しかけていた。そして自己保存の本能に駆られて、身を守るために攻勢を取つた。彼女はまだオリヴィエを愛してはいたが、自分に敵対する彼の信念をば、粉微塵こなみじんにしてやろうとつとめた。皮肉や逸樂のあらゆる武器を用いた。欲望や細々こまごまとした心労かすらの葛で彼をからめた。彼女は彼を自分の一反映としてしまいたがつていた……自分の反映、その自分自身は、もう何を欲してるのかもみずからわからず、なんであるのかもみずからわからなかつたのである！ 彼女はオリヴィエが少しも成功しないのを恥ずかしい気がした。成功しないのが間違いであるか至当であるか、そんなことはもう彼女には問題でなかつた。落伍者らくごと才能者とを区別するものは結局成功のいかんであると、信ずるようになっていた。オリヴィエはそういう疑惑が自分の上にのしかかるのを感じて、もつともよき力を失つた。それでも彼は他の多くの者と同じく、できるだけは戦つた。男の知的な利己心に対抗して、男の弱点や失意の上に、男が生命の疲弊と自己の卑怯ひきようとを覆い隠す名目おほにしてるその常識の上に、女の利己的な本能が自分の地歩を定めてる、あの不平等な戦いにおいて、多くの人々が、大半は無益に終わ

りながらも、奮闘してきたしまた奮闘しつづけるのである。——しかしとにかく、ジャックリーヌとオリヴィエとは大多数の闘者よりはすぐれていた。それらの多数の人々は、自分の怠惰や虚栄心や愛などから同時に引きずられて、自分の永遠の魂を否定するようになっていたが、オリヴィエはかつて自分の理想に裏切りはしなかった。もし裏切ったら、ジャックリーヌから軽蔑けいべつされたであろう。しかし盲目的にもジャックリーヌは、同時に自分の力でもあるオリヴィエの力を、二人にとつての護衛たるオリヴィエの力を、懸命に破壊しようとしていた。そして本能的な策略によって、その力が立脚してゐる友情を滅ぼさんとしていた。

二人が遺産相続をしてからは、クリストフはその若夫婦のもとでは勝手が悪かった。ジャックリーヌは世俗的軽薄さやや平凡な實際的精神などを気取っていたが、クリストフと話をするときにはことにそれを意地悪くも誇張したので、しだいに思う壺つぼにはまっていた。クリストフはときどき反抗しては、誤解を招くようなひどいことを口にした。けれどそれらのひどい悪口も、友との間には葛藤かつとうを生じなかった。二人の友はたがいに深く愛着していた。オリヴィエはどんなことがあるうともクリストフを犠牲にしたくなかった。しかしそれをジャックリーヌへも強しめることはできなかつた。愛の弱みから彼女へ心配を

かけるに忍びなかった。クリストフは、どんなことが彼の心中に起こってるかを見てとつて、自分で身を退きながら彼の選択を容易にしてやった。このままにしているは、少しもオリヴィエのためを凶つてやることができないうこと、むしろオリヴィエを害するばかりであること、それをよく了解していた。彼は自分のほうから遠ざかるべき口実を設けた。オリヴィエは気が弱いたためにその間違つた理由を受け入れた。しかしクリストフの犠牲の心を推察して、深く自責の念に苦しめられた。

クリストフはオリヴィエを恨みはしなかった。彼の考えによれば、妻は夫の半分であると言うのは誤りではなかった。なぜなら、結婚した男はもはや半分の男子にすぎないから。

彼はオリヴィエなしに自分の生活を立て直そうとした。しかしいかにつとめても、離反は一時のことにすぎないと考えても、その甲斐がなかった。楽家なるにもかかわらずとどき悲しみに沈んだ。彼は孤独の習慣を失っていた。もちろん、オリヴィエが地方に住んでる間は孤独だった。しかしそのときは幻を描くことができた。友は遠くにいるけれどやがて帰って来るだろうと考えていた。しかるに今は、友は帰っているがこの上もなく遠くなっていた。幾年かの間自分の生活を満たしてくれたその情愛が、一挙に失われてしま

った。それはあたかも、活動の最上の理由を失ったがようなものだった。彼はオリヴィエを愛して以来、自分のあらゆる考えにオリヴィエを結びつけるのが習慣となっていたのである。もう仕事も空虚を満たすに足りなかった。彼は自分の仕事に友の面影を交える癖がついていたのである。その友が離れ去った今では、彼はあたかも平衡を失った者のようだった。彼は立ち直るために、他に愛情を捜し求めた。

彼にはアルノー夫人とフィロメールとの愛情があった。しかしそのとき彼は、それら静平な女友だちでは満足できなかった。

それでもこの二人の女は、クリストフの悩みを察しているらしく、ひそかに同情を寄せていた。ある晩クリストフは、アルノー夫人が訪れて来たのを見てたいへん驚いた。そのときまで彼女はかつて彼を訪問しようとしたことがなかったのである。彼女は何か落ち着かない様子だった。クリストフは大して気にも留めずに、それは例の内気のせいだと思つた。彼女は腰をおろしたが何にも言わなかった。クリストフは彼女を気楽にさせるために、いろいろともてなした。二人はオリヴィエのことを話した。室の中にはオリヴィエの記念がいっぱいだった。クリストフは愉快的調子で話して、この間のことを何一つもらさなかった。しかしアルノー夫人はいつしか様子に現わして、気の毒そうに彼をながめて言った。

「あなたがたはもうめつたにお会いなさらないのでしょうか？」

彼は彼女が慰めに来てくれてるのだと考えた。そのためにいらいらしてきた。自分のことに人から干渉されるのを好まなかったからである。彼は答えた。

「そのときの気持ちにしているんです。」

彼女は顔を赤めて言った。

「あら、別段ぶしつけなことを伺うつもりではなかったのですけれど。」

彼は自分の無作法さを後悔した。彼女の手を取って言った。

「ごめんください。私は彼が人から悪く言われやすまいかといつもびくびくしてるんです。かわいそうに、彼も僕同様に苦しんでいます……。まったく僕たちはもう会わないんです。」

「手紙もまいりませんか？」

「来ません。」とクリストフはやや恥ずかしそうに言った。

「ほんとに世の中は悲しいものですわね！」とアルノー夫人はややあつて言った。

クリストフは顔をあげた。

「いいえ、人生が悲しいのではありません。」と彼は言った。「悲しい時があるのです。」

アルノー夫人は悲痛さを押し隠して言った。

「以前は愛し合つたのに、もう愛し合わなくなる。それが何かのためになりましようか。」
 「愛し合つただけでいいんです。」

彼女はなお言った。

「あなたはあの人に自分をささげていらした。そのあなたの献身が、せめて愛する人の役に立っていますればねえ！ けれど、それでもやはりあの方は幸福ではありませんわね。」
 「僕は身をささげたのじやありません。」とクリストフは憤然として言った。「そして僕がもし身をささげるとすれば、それは僕にとってそうするのがうれしいからです。議論の余地はありません。人はなすべきことをなすのです。もしそれをしなかつたら、きつと不幸になるでしょう。献身という言葉くらい馬鹿げたものはありません。心の貧しい坊主どもが、新教的な陰気な萎縮いしゆくした悲哀の考えを、その中に交えてしまったのです。厭いやな献身でなければりっぱな献身ではない、とでもいうように……。馬鹿なことです。もし献身が、一つの悲しみであつて一つの喜びでないとすれば、それをなすには及びません。なすに当たらないことです。人が身をささげるのは、でたらめではなくて、自分のため değildir。身をささげるこのうちにある幸福を、もしあなたが感じないとしたら、勝手になさ

るがいい。あなたは生きてるだけの価値もありません。」

アルノー夫人は、クリストフの顔も見かねて、その言葉だけに耳を傾けていた。それから突然、彼女は立ち上がって言った。

「これでおいとまします。」

そのとき彼は、彼女が何か打ち明け話に来てるのだと考えた。そして言った。

「ああごめんください。僕はあまり勝手でした、自分のことばかりしゃべって。も少しいてくださいませんか。」

彼女は言った。

「いいえ、そうしてもおられません……ありがとうございます……。」

彼女は帰っていった。

二人はそれからしばらく会わなかった。彼女はもう生きてるしるしだに見せなかった。彼のほうでも、彼女のところへ出かけて行かなかった。またフィロメールの家へも行かなかった。彼はその二人をたいへん好きではあった。しかし心悲しくなるような話が出るのを恐れていた。それにまた、彼女らの静平な凡庸な生活やあまりに希薄な空気は、今のところ彼の気に入らなかった。彼は新しい顔をながめたかった。新しい同情に接し、新しい

愛に接して、ふたたび心を取り直さなければならなかった。

彼は気を紛らすために、久しい前から閑却していた芝居へまた行きだした。そのうえ芝居というものは、情熱の抑揚を観察し書き留めんと欲する音楽家にとっては、興味ある一つの学校のように思われた。

と言つても彼はフランスの戯曲にたいして、パリへ来た当初よりも多くの同情をもち得たのではなかった。恋愛的精神生理学の無味乾燥な卑しいいつも同一な題材にたいして、彼はあまり趣味をもたなかつたばかりでなく、フランスの芝居の言葉は、ことにその詩劇において、この上もなく虚偽なもののように彼には思えた。その散文も韻文も、民衆の生きた言葉とは、民衆の精神とは、合致していかなかった。散文は、よいほうでは社会記事的なこしらえられた言葉であり、悪いほうでは通俗小説的なこしらえられた言葉であつた。韻文はゲーテのつぎのような警句を裏書きしていた。

詩は何も言うべきことをもたない人々にとってはよいものである。

フランス劇の詩は、冗長なこね回した散文にすぎなかった。心情から来るなんらの必要もなしに、技巧をこらした形象がやたらにつき重ねられてるため、どの真面目な人物もみな虚偽的な様子になっていた。クリストフは、飾りたてた発声法をもつてる大仰な甘ったるい節回しのイタリー歌劇を重んじなかったが、それらの詩劇をもまた同様に重んじなかった。彼には脚本よりも俳優のほうがはるかに興味深かった。そしてまた、作者のほうも俳優を真似ようとつとめていた。「俳優の欠点にかたどって作中人物の性格をこしらえるだけの注意がないかぎりは、脚本が多少の成功をもつて演ぜられることは望み得られなかった。」デイドウローがそういうことを書いた時代から、事情はほとんど変わってはいなかった。人物に扮する役者のほうがかえって、芸術のモデルとなっていた。成功を博した役者はすぐに、自分の芝居と、阿諛的な仕立屋たる自分の作者と、尺度に合わせた自分の脚本を、もつようになるのだった。

文学界の流行となつてそれらの大きな案山子のうちに、フランソアーズ・ウードンという女優がクリストフの注意をひいた。彼女はようやく一、二年前からパリーでもてはやされてるのだった。彼女もまたもとより、自分の役を脚本に書いてくれる作家らをもつていた。けれども彼女は、自分のためにこしらえられた作品ばかり演じてはいなかった。彼

女のかなり雑多な出し物は、イプセンからサルドウーに及び、ガブリエル・ダヌンチオから子デューマに及び、バーナード・ショーからアンリー・バタイユにまで及んでいた。時とすると大胆にも、古典文学の六脚詩の大道に踏み込んだりシエイクスピアの形象の激流に飛び込んだりした。しかしそういう方面では気楽にいかなかった。彼女はいろんな役を演じてはいたが、実はいつも自分一人だけを演じてるのだった。それが彼女の弱みでありまた強みであった。観客の注意が彼女の一身に向いていないうちは、彼女の演技は少しも成功を博さなかった。観客が彼女に興味をもち出してからは、彼女の演ずるものはすべて素敵だと思われた。実際彼女を見ると、多くはつまらないその脚本を忘れるだけの価値があつた。彼女は脚本を自分の生命で飾っていた。一つの不可知な魂から形づけられるその肉体の謎は、クリストフにとっては、彼女が演じてる脚本以上に人の心を動かすものだった。

彼女はきつぱりした悲壮な美しい横顔をもっていた。古ローマ風の強調された線は少しもなかった。パリー風のジャン・グージョン式な若い男とも女ともつかない、繊細な線ばかりだった。短くはあるが格好のよい鼻。唇の薄いやや苦みばしった美しい口。何か人の心を打つものがあり、内心の苦しみの反映が現われてる、若々しい痩せ形の伶俐な頬。き

かぬ氣らしい頤^{あご}。蒼^{あおしろ}白い顔色。冷静の習慣がついていて、しかもなお透き通っていて、魂が皮膚の下全体に広がっているような顔だちが、世には往々あるものだが、彼女のもその一つだった。髪の毛と眉毛^{まゆげ}とはたいへん細やかだった。眼は変わりやすく、灰色であり琥珀色^{こはく}であり、緑や金など各種の反映を帯びることができ、あたかも猫^{ねこ}の眼のようだった。それからまた彼女は、その性質全体も猫に似寄っていて、外見上うつらうつらして半ば眠っているようでありながら、眼を見聞いて何かを待ち受けており、いつも疑懼^{ぎく}の念をいだいてるらしかったが、時によると急に神経のくつろぎを見せ、しかもある残忍さを隠しもつていた。見かけほど背は高くなく、痩せてるようだがそうでもなく、美しい眉となだらかな腕と長いしなやかな手とをもつていた。着物のつけ方や髪の毛の結び方がじみ好みできちんと整っていて、ある種の女優に見るような放浪的なだらしなさも大袈裟^{おおげさ}なお洒落^{しやれ}も、少しも見えなかった——この点においてもまた猫のようで、下層社会から出て来たにもかかわらず、本能的に貴族風だった。そしてその底には、取り去りがたい粗野が潜んでいた。

彼女はもう少しで三十歳になる年ごろしかつた。クリストフはガマーシユのところまで、彼女の噂^{うわさ}を聞いたことがあった。人々がひどく熱心に讃^ほめたところによると、彼女はきわめて自由な伶俐^{れいり}な大胆な性質で、鉄のように堅い氣力をもち、野心に燃えたち、し

かも粗暴で無鉄砲でがむしやらで猛烈であつて、現在の光榮に到達するまでにはいろんな目に会つてきたが、成功してその腹癒せはらいをしてるのだった。

ある日クリストフは、フィロメールに会いにムードンへ行こうとして、汽車に乗り込んだ。そして車室の扉とびらを開くと、この女優がすでに席取つていた。彼女は何かいらだつて苦しんでいるらしかった。そしてクリストフがはいつて来たのを不快がった。彼のほうに背を向けて、向こう側の窓ガラスからじつと外をながめた。クリストフは彼女の顔だちの変化に驚いて、率直な厚かましい同情を寄せながら、彼女から眼を放さなかつた。彼女はじれだして、恐ろしい眼つきでにらめてやつたが、彼にはいっこう通じなかつた。つぎの停車場で、彼女は降りて他の車室に乗り換えた。そのときになつてようやく——もうおそすぎたが——彼は自分のせいで彼女が逃げ出したのだと考えた。そしてたいへん心苦しかつた。

それから幾日かあとに、彼は同じ線のある停車場で、パリーへもどるために汽車を待ちながら、歩廊プラットホームにあるただ一つのベンチに腰かけていた。すると彼女が出て来て、彼のそばに腰をおろした。彼は立ち上がろうとした。彼女は言った。

「どうぞそのまま。」

二人きりだった。彼は先日彼女に車室を換えさせたことを詫^わびた。自分が邪魔になることがわかっていたら、降りてあげるはずだったと言った。彼女は皮肉な微笑を浮かべてただこう答えた。

「ほんとに、あなたには我慢ができませんでしたよ。しつこく私の顔ばかり見ていらしたんですもの。」

彼は言った。

「失敬しました。見ずにはいられなかつたんです……。苦しそうな御様子だったものですから。」

「それで、どうなんですの？」と彼女は言った。

「僕には辛抱ができません。あなたはおぼれかかった者を見て、手を差し出さずにいられますか。」

「私が？ そんなことをするものですか。」と彼女は言った。「早く片づいてしまうように、水の中に頭を押し込んでやりますわ。」

彼女は悲痛と冗談との交じった調子でそれを言った。そして彼がびっくりした様子でその顔をながめてるので、彼女は笑い出した。

汽車が来た。すっかり込んでいて、ただ最後の車室だけがあいていた。彼女はそれに乗った。駅員がせきたてていた。クリストフは先日のようなことを繰り返したくなかった。で、他の車室を捜そうとした。彼女は彼に言った。

「お乗りなさい。」

彼は乗り込んだ。彼女は言った。

「今日は構いませんわ。」

二人は話をした。クリストフは大真面目おおまじめになって説き示そうとした、他人に冷淡であるのは許すべからざることだとか、人は助け合い慰め合いながら相互にたいへんためになることをなし得るのだとか……。

「慰めですって、」と彼女は言った、「そんなことは私にはどうだってよござんすわ。」
クリストフはなお言い張った。

「そうですね、」と彼女は失敬な微笑を浮かべてなお言った、「慰め役はそれを演ずる者にとつては儲け役ですよ。」

彼にはちよつとその意味がわからなかった。けれどようやく意味がわかって、彼女のこ
とばかりを考えてるのに自分のためにしてるのだと疑われたことを思うと、彼はすぐに憤

然と立ち上がり、扉を開いて、汽車の進行中なのも構わずに出て行こうとした。彼女はやつとのことでそれを引き止めた。彼は怒りながら腰をおろし、扉を閉めた。ちようど汽車はトンネルにさしかかっていた。

「ごらんさないな、」と彼女は言った、「死ぬところじゃありませんか。」

「死んだって構うものですか。」と彼は言った。彼はもう彼女と話したくなかった。

「馬鹿な奴らばかりだ。」と彼は言った。「たがいに苦しめ合ったり苦しんだりしてる。他人を助けようとすれば疑られる。厭になっちゃう。どいつも皆人間じゃない。」

彼女は笑いながら、彼をなだめようとつとめた。手袋をつけてる片手を彼の手にのせた。彼の名前を呼びかけてやさしく口をきいた。

「ほう、あなたは僕を知ってるんですか。」と彼は言った。

「パリーでは人はみんな知り合いではありませんか！ あなただって同じ船の乗合ですわ。でも先刻のように申したのは私が悪うござんしたわ。あなたはいいい方です、よくわかっています。さあ気を和らげてください。もうよござんすよ。仲直りをしましょう。」

二人は握手をかわした。そして親しく話をした。彼女は言った。

「でも私のせいじゃありませんよ。世間の人からいろんな目に会わされたので、そのため

に疑り深くなつたのです。」

「僕もたびたび騙だまされたんです。」とクリストフは言った。「しかし僕はまだやはり人を信用しています。」

「そうでしょう。あなたは生まれつきの馬鹿正直に違いないんですもの。」

彼は笑い出した。

「そうです、僕はいつも一杯食わされてばかりいます。しかし閉口しやしません。丈夫な胃袋をもつてるんです。どんな大きな畜生だって、どんな困窮や悲惨だって、構わずのみ下してやるんです。場合によっては、打ちかかってくる悪漢をものみ下してやります。そしてますます丈夫になるばかりです。」

「あなたは仕合わせよ、」と彼女は言った、「男ですもの。」

「そしてあなたは女ですよ。」

「女なんて大したことじゃありません。」

「いや素敵なことです。」と彼は言った。「それはまた、いいことかもしれませぬ。」

彼女は笑った。

「それが！」と彼女は言った。「けれど世間では、それをどんなふうに取り扱ってるでし

よう？」

「自分で自分の身を守らなければいけません。」

「それなら、親切なんか長つづきはしませんよ。」

「それは人が親切を十分にもつていないからです。」

「おつしやるとおりかもしれないね。そしてまた、あまり苦しんでもいけませんわね。度が過ぎると、魂が干乾びひからびてしまいますのね。」

彼は彼女を気の毒に思いかけた。それから、先刻どんなふうに取り扱われたかを思い出した……。

「あなたはまだ、慰め役は儲もつけ役などと言うつもりですか。」

「いいえ、」と彼女は言った、「もう言いませんわ。あなたが親切で真面目まじめだということは、私にもわかってますもの。お礼申しますわ。ただ何にも言わないでくださいな。あなたにはわからないんです……。ありがとうございます。」

二人はパリーに着いた。たがいに住所も告げず訪たずねて来てほしいとも言わずに、そのま
ま別れた。

それから一、二か月後に、彼女自身クリストフを訪れてきた。

「お目にかかりに来ました。少しあなたとお話したいんですの。あのときお会いしてから、私はときどきあなたのことを考えましたね。」

彼女は席についた。

「ほんのちよつとの間。長くお邪魔はしませんわ。」

彼は彼女に話しかけた。彼女は言った。

「ちよつと待つてくださいな。」

二人は黙った。つぎに彼女は微笑ほほえみながら言った。

「がっかりしてましたの。もうよくなりましたわ。」

彼は尋ねかけようとした。

「いえ、」と彼女は言った、「そんなことはいいんです。」

彼女はあたりを見回し、いろんな品物を見つけ出し批判した。それからルイザの写真を見つけた。

「お母かあさんですか。」と彼女は言った。

「ええ。」

彼女はそれを手に取って、しみじみとながめた。

「いいお婆さんね。あなたは仕合わせですわね。」

「でも、もう亡くなつたんです。」

「そんなことは構いませんわ。とにかくこんなお母さんがあつたんですもの。」

「ではあなたは？」

しかし彼女はちよつと眉をひそめてその話を避けた。自分のことを聞かれるのを好まなかつた。

「いえ、あなたのことを話してください。私にきかしてくださいよ……何か身の上のことを……。」

「そんなことをきいてどうするんです？」

「いいから話してちょうだいよ……。」

彼は話したくなかつた。しかし彼女の問いに答えないわけにはゆかなかつた、聞き方がたいへん上手だつたので。そしてちよつと、心悲しかったある種の事柄、友情の話や別れ去つたオリヴィエの話などを語つてしまった。彼女は憐れみと皮肉とのこもつた微笑を浮かべて、耳を傾けていた。……と突然、彼女は尋ねた。

「何時でしょう？ まあー！ 二時間もいましたのね。……ごめんください……。ほんと

に心が休まりましたわ。」

彼女は言い添えた。

「またお伺いしたいんですの……たびたびでなく……ときどき……。お話を聞くと私のためになりますの。でも私は、お邪魔をしたくありませんわ。お時間をつぶしたくありませんわ……。でほんのしばらくの間、たまにね……。」

「僕のほうから伺いましょう。」とクリストフは言った。

「いえいえ、いらしちやいけません。お宅のほうがいいんですの……。」

しかし、その後彼女は長らくやって来なかった。

ある晩彼は、彼女が重い病気になっいて、もう数週間前から芝居にも出ていないことを、ふと聞きこんだ。来るなど言われていたけれど、それでも訪ねていった。面会は断わられた。けれど名前が通じられると、彼は階段の上で呼びもどされた。彼女は床についていた。快方に向かっていた。肺炎にかかったのだった。かなり様子が変わっていた。けれどやはり、人を近づけない皮肉な様子と鋭い眼つきをしていた。それでもクリストフを見ると、ほんとうにうれしげなふうを示した。彼を寝台の近くにすわらせた。こだわりのないあざけり気味で、自分のことを話して、危うく死ぬところだったと言った。彼はびつ

りした様子を見せた。すると彼女は茶化した。彼は何にも知らせなかつたことを難じた。「お知らせするんですって、あなたに来ていただくために！ そんなことをするものですか。」

「きつとあなたは、僕のことなんかは考えもしなかつたんですね。」

「そのとおりよ。」と彼女はやや悲しげな冷笑を浮かべて言った。「病気のうちはちよつとも考えなかつたんですの。まったく今日が初めてですわ。寂しいことだと思つちや厭いやですよ。私病気のときは、だれのこととも考えないんです。ただ皆さんにお願いすることは、静かにさしといてほしいということだけですの。そして壁と鼻をつき合わして、じつと待つてるんです。一人ぼっちでいたいんです。鼠ねずみのように一人ぼっちで死んじまいたいんですの。」

「けれど一人で苦しむのは辛いつらいことです。」

「私は馴なれつこですわ。長い間不幸な身の上でしたの。だれも助けに来てくれませんでした。」

今ではそれが癖になつてるのでしよう……。それに、そのほうがかえってましですわ。だれがいたって何にもなりはしませんもの。室の中の物音や、煩うるわしい注意や、表面うわべばかり

りの悲嘆や……厭いやですわ。一人ぼっちで死ぬほうがましですわ。」

「あきらめきつてるんですね。」

「あきらめ？ いえ私はそれがどんなことだかも知りませんわ。私ただ齒をくいしばって、自分を苦しめてる病気を憎んでやるんですの。」

彼は、だれも見舞いに来てはくれないのか、だれも世話をしてはくれないのか、と彼女に尋ねた。彼女の答えによると、芝居の仲間、かなり親切な人たちで——馬鹿な人たちで——しかも世話好きで、同情深い人たち（それも上つすべりの）であった。

「でも、まったく私のほうで、あんな人たちに会いたくないんですの。私つむじ曲がりですわね。」

「そこが僕は好きなんです。」と彼は言った。

彼女はなさけなさけそうに彼をながめた。

「あなたまでが！ 他人ひとの口真似くちまねをなさるの？」

彼は言った。

「許してください……ああ、僕もパリー人になっちゃったのか！ 恥ずかしい……。まったく僕は考えなしに言ったんです……。」

彼は夜具の中に顔を隠した。彼女はさつぱりと笑って、彼の頭を軽くたたいた。

「ああその言葉は、パリーの言葉じゃないわ。結構よ。私にはあなたがわかつてるわ。さあ、顔をお見せなさいな。蒲団ふとんの上で泣いちや厭いやですよ。」

「許してくれますか。」

「許してあげるわ。けれどももう繰り返しちゃいけませんよ。」

彼女はなお少し彼と話をし、彼がしてることを尋ね、それから疲れて飽きて、彼を帰らした。

つぎの週に彼はまたやって来る約束だった。しかし彼が家から出かけようとするときに、来てくれるなどの電報を受け取った。彼女は容態が悪かった。——それから翌々日に、彼女は彼を呼んだ。彼はやって行つた。見ると、彼女はよくなりかけていて、半ば身を投げ出して窓ぎわにすわっていた。春先のこと、空には日が照り渡り、木々の若芽が萌もえ出していた。彼女は彼にたいして、これまでよりいっそうやさしく穏やかだった。先日はだれにも会えなかつたのだと言つた。彼をも他の人たちと同様に嫌きらいになりそうだったのである。

「そして今日は？」

「今日は、すっかり若々しく新しくなった感じがしますの。自分の周囲の若々しく新しく思えるものはなんでも——ちようどあなたみたいなのはなんでも、なつかしい感じがしますの。」

「でも僕はもう若々しくも新しくありませんよ。」

「いいえあなたは死ぬまでそうでしょうよ。」

二人は、この前会ったときから後どんなことを話しかを話し、また芝居のことを話した。彼女はもうやがて芝居へ出勤するはずだった。厭いやいや々ながらつながれてる芝居のことについて、彼女も自分の考えを述べてきかした。

彼女はもう彼のほうから来てもらいたがらなかつた。自分のほうから訪たずねてゆくと約束した。しかし彼女は彼の邪魔になりはすまいかと心配していた。彼はいちばん仕事の妨げにならないような時間を知らした。二人は一種の合い言葉を定めた。彼女は一定の仕方とびらで扉をたたくことにした。彼はそのときの気持によつて、扉を開くか開かないかすることにした……。

彼女は彼がいつも会つてくれるのに乗じはしなかつた。しかしあるとき彼女は自分が詩

を朗吟することになつてゐる社交的夜会に行きかけて、最後の間ぎわに厭いやになつた。行かれないと途中で電話をかけた。そしてクリストフのところへ行つてみた。ただ通りがかりにちよつと挨拶あいさつをしてゆくつもりだった。ところがその晩、彼女はふと彼に打ち解けて、子供のときからの身の上話をした。

悲しい幼年時代だった。父は通り合わせの男で、彼女はそれを覚えていなかった。母はフランス北部のある町はずれに、評判の悪い飲食店を開いていた。車力たちが酒を飲みにやつて来て上かみさんといっしょに臥ふせり、上さんをひどい目に会わしていた。そのうちの一人が彼女と結婚した、彼女に少し小金こがねがあつたから。彼は彼女をなぐりつけ、飲み食いばかりしていた。フランソアーズには一人の姉があつて、その飲食店で女中の働きをしていた。仕事に疲れきつていた。亭主ていしゅは上さんに公然と眼の前で、彼女を情婦にしていた。彼女は肺病だった。死んでしまった。フランソアーズは打ち擲ちやくや汚行のなかに育つていった。胆たんじゆう汗あせ質しつのなつかしみのない娘で、熱い荒つぽい小さな魂をもっていた。母や姉が、泣き、苦しみ、あきらめ、墮落し、死んでゆくのを、彼女は見てきた。そして憤然とした意志で、あきらめまいとし、その穢けがらわしい環境からのがれようとした。彼女は反抗者だつ

た。ある種の不正な事柄を見ると、神経の発作を起こした。なぐられると、引つかいたり
 噛みついたりした。あるときなどは、首をくくろうとした。しかしそれはしとげられなか
 った。やり始めるとすぐに、もう厭いやになつてしまい、あまりうまくゆきそうなのが恐ろし
 くなつた。もう息がつけなくなつて、ひきつった手で大急ぎに紐ひもを解いてると、生きたい
 という激しい願いがこみ上げて来た。そして、死によつてのがれることができなかったの
 で——（クリストフは、自分の昔の同様な苦難を思い起こしながら、悲しげな微笑ほほえみを浮
 かべて聞いていた）——彼女は打ち克かつて、自由な富裕な身になつて、自分を虐しいたげてる人
 々を皆足下に踏みつけてやろうと、みずから誓つた。亭主の怒鳴り声や、なぐられてる母
 の喚わめき声や、強迫されてる姉の泣き声などが、隣の室に聞こえてある晩、彼女は自分の
 汚きたない室の中で、右の誓いをたてたのだった。彼女はどんなにか自分を惨みじめに感じたことだ
 ろう！ それでも彼女は、みずからたてた誓いに慰められた。彼女は齒をくいしばつて考
 えた。

「今にみんなをやつつけてやる。」

そういう陰惨な幼年時代のうちにも、ただ一点の光明が存在していた。

ある日、同じ泥濘でいねい中の悪戯いたずら仲間の一人で、芝居小屋の門番の息子むすこが、禁ぜられてい

たのを破つて、彼女を芝居の試演に連れていった。二人は場席の奥の暗い所にはいり込んだ。薄暗い中に輝いてる舞台の神秘さ、役者たちが言つてる魔法的な不可解な事柄、女優の女王めいた様子——實際この女優は伝奇的な通俗悲劇メロドラマの中の女王を演じていた——それらに彼女は心打たれた。感動のあまりぞつと凍えきり、胸がひどく動悸どうきした……。「そうだわ、そうだわ、いつかこんなになつてやらなけりや！……なあに、あの人だつてこんなになつてるから、私にだつて……。」「……その試演が済むと、彼女はどうしても晩の公演が見たかつた。友がそこから出て行くのを止めないで、自分もあとについて出るふうをした。それからまたもどつてきて、芝居小屋の中に隠れた。腰掛の下にうづくまつて、埃ほこりに咽むせ返りながら、三時間もじつとしていた。そして公演が始まりかけ、観客がやつて来たので、彼女は隠れ場所から出ると、災難にもつかまえられてしまつて、人々の嘲笑ちやうしやうのうち、恥はずかしくも追い出され、家に連れもどされ、ひどく打たれた。もし彼女がそのとき、それらの人々を威圧し復讐ふくしゅうするために、未来どんな者になるかを頭に置いていなかったとしたら、おそらくその夜中に死んでたかもしれないなかつた。

彼女の計画は成り立つた。役者たちが泊まつてる劇場付旅館兼珈琲店に、女中として住み込んだ。彼女はほとんど読み書きもできなかつた。そして何にも読んだことがないし、

読むべきものをもつてもいかなかった。彼女は学び知りたいたいと思って、異常な精力で勉強した。客人たちの室にある書物を盗み出した。蠟燭ろうそくを儉約するために、夜は月の光であるいは曙あけぼのの光で読んだ。役者たちはだらしがなかったので、彼女のそういう小さな盗みに気づかなかつた。あるいはただぶつぶつ言うきりだった。それにまた彼女は、読んだあとで書物を返した——と言つても、そのまま返しはしなかった。気に入った部分は裂き取つておいた。その書物を返すときには注意して、寢床の下や家具の下に押し込んで、室からもち出されたのではないと思わせるようにしておいた。また彼女は、扉とびらに耳を押しあてて、台辞せりふを繰り返して役者たちに耳を傾けた。そして一人で廊下の掃除そうじをしながら、彼らの台辞回しを小声で真似まねたり、身振りをしたりした。そういうところを人に見つけられると、あざけられたり悪口言われたりした。彼女はむつとして口をつぐんだ。——そういう教育法は長くつづくはずだったが、彼女はあるとき不謹慎にも、役者の室から台辞せりふの台本を盗み出した。その役者はひどく怒つた。女中よりほかにだれも彼の室にはいった者はなかつた。で彼は彼女の仕業しわざだとした。彼女は厚かましく打ち消した。彼は身体じゆうを調べるとおどかした。彼女は彼の足下に身を投げ出して、いっさいのことを白状し、他の窃盗や書物のページを裂き取つたことなど、あらゆる秘密をみな自白した。彼は恐ろしくののし

った。しかし見かけほど意地悪くはなかった。なぜそんなことをしたかと尋ねた。女優になるつもりだと彼女が答えると、彼はたいへん笑った。何を知ってるかと尋ねてみた。彼女は覚えてることをみな諳誦あんしやうしてみせた。彼はびっくりして言った。

「どうだい、俺おれが教えてやろうか。」

彼女はこの上もなく喜んで、彼の手に接吻せつぶんした。

「ああ私は、」とフランソアーズはクリストフに言った。「その男をどんなにか愛するところでした。」しかし役者はそのあとですぐに言い添えたのだった。

「ただ、お前にもわかつてるだろうが、魚心あれば水心と言ってね……。」

彼女は処女だった。人からいろいろ挑いんどまれても、いつもひどく恥ずかしがってはねつけていた。

その粗野な貞節、愛のない不潔な行為や卑しい肉欲にたいする嫌悪けんお、それらを、彼女は子供のときからもっていた。家の中で周囲に起こる悲しい事柄を見て、つくづく厭気いやげを起こさせられてたからだった。——彼女はそのときもなおそれらを失わないでいた……。あ不幸な彼女、彼女はひどい罰をになつていたのである！ なんとという運命の愚弄ぐろうだったろう！……

「では、」とクリストフは尋ねた、「あなたは承知したのですか。」

「ああ私は、」と彼女は言った。「それをのがれるためには、火の中に飛び込んでも構わないと思っていました。ところがその男は、泥棒として私を捕えさせるとおどかしたのです。私は他にしかたがなかったのです。——そうして私は、芸術の……また人生の、手ほどこきを受けたのでした。」

「ひどい奴だ！」とクリストフは言った。

「ええ、私もその男を憎みました。けれどその後、いろんな人に出会ってみると、もう彼をそんなに悪い人だとは思えなくなりました。少なくとも彼は、約束だけは守ってくれたのです。役者家業について知ってることは——（大したことじゃありませんが）——すっかり私に教えてくれました。私を一座のうちに入れてくれました。初めは皆の召使同様でした。ちよつとした端役はやくもやりました。それからある晩、喜劇の侍女が病気になったとき、私は冒険的にその役を受け持たせられました。それから引きつづいてその役をしました。とても駄目だめで滑稽こっけいで見苦しいとのことでした。そのころ私は醜い女だったそうです。そして長く醜くかったのが、ついにはすぐれた理想的な女だということになったのです……。「女」ですって！……馬鹿な人たちですわ！——芸のほうは、私ののは不正確で乱暴だとの

評判でした。見物からは味わつてもらえず、仲間からは笑われました。それでも追い出されなかったのは、とにかくいろんな用をしてやったからですし、金もかからなかったからです。私は、金がかからないばかりではなく、こちらから払ってたほどです。ああ、進歩をし地位が上るその一足ごとに、私は自分の肉体で代価を払いました。仲間の者や、主事や、座元や、座元の友だちなどが……。」

彼女は口をつぐんだ。色蒼あおざめ、唇くちびるをきつと結び、乾かわいた眼つきをしていた。しかし彼女の魂が血の涙を流してゐることは感ぜられるのだった。一瞬の閃ひらめきのうちに、彼女は、それらの恥ずかしい過去のことを、また自分を支持してくれた激しい征服意志のことを、はつきり思い浮かべた。その征服意志は、堪え忍ばなければならぬ新しい汚行たおことに、ますます激しくなつていった。彼女は死を希ねがいたかつた。しかし恥辱のさなかに斃たおれてしまふのは、あまりに忌まわしいことだった。勝利の前に自殺するも、勝利の後に自殺するも、それは構わない。しかしながら、身を汚してその代償を得ないうちは、けつして……。彼女は黙つていた。クリストフは憤慨して室の中を歩き回つた。この女を苦しめ汚したその奴らを、打ち殺してしまいたかつた。それから彼は、憐あわれみ深く彼女をながめ、彼女のそばにたたずんで、その頭を、顛こめかみ顛かみを両手にはさんで、やさしく抱きかかえて、そし

て言った。

「かわいいそうに！」

彼女は彼を押しつけそうにした。彼は言った。

「僕を恐^{こわ}がってはいけません。僕はあなたをよく愛しています。」

すると、フランソアーズの蒼^{あお}ざめた頬^{ほお}に涙が流れた。彼は彼女のそばにひざまずいて、二滴の涙が落ちかかっている、

いとも美わしき長き手……

の上に唇^{くちびる}をつけた。

それから彼は席についた。彼女は心を取り直していた。そして、また静かに話をつづけた。

ついにある作家が彼女を世に出してくれた。彼はこの一風変わった人物たる彼女のうちに、一つの悪魔を、一つの天才を——そして彼のためにさらにいいことには、「一つの劇的人物、一時代を代表する新しい女」を見出したのだった。もとより彼は、他の多くの

女と関係したあとであつて、彼女にも手をつけた。そして彼女も、他の多くの男に身を任せたと同様に、愛もなく、愛と反対の感情をさえもちながら、彼に身を任せた。しかし彼は彼女を有名にしてくれた。彼女も彼を有名にしてやった。

「そしてもう今では、」とクリストフは言った、「だれもあなたにたいしてなんともすることはできません。あなたの方で他人を勝手に取り扱えるのです。」

「あなたはそう思つていらして？」と彼女は悲しげに言った。

そこで彼女は、運命のも一つの悪戯いたずらを語つてきかした——自分が軽蔑けいべつして行くのではない男に迷い込んだ話を。それはある文学者で、彼女を利用し、彼女のもつとも著しい秘密を奪い取り、それを小説に書き、それから彼女を捨ててしまった。

「私はその男を、」と彼女は言った、「靴の泥くつどろのように軽蔑けいべつしています。そして、そのひどい奴に自分が惚ほれてることだの、ちよつと手招きさえさるれば、すぐ駆けつけて行って自分を辱はづしめるだろうなどということは、考えるだけでもぞつとします。けれど、どうにもしかたがないんです。私の心は、私の精神が望んでるものを少しも好みません。そして心と精神とを、どちらか代わる代わる犠牲にし辱はづしめるようになるのです。私には心があり、身体があります。その二つが喚わめきたてて、自分だけの幸福を求めていきます。私には

それを制するだけの手綱がないんです。私は何にも信じません。私は自由です……自由？
 いえ、心と身体との奴隷です。それがたびたび、たいていいつも、私の厭いやがってることを望むんです。私を連れ去るんです。そして私は恥ずかしい思いをします。けれど、どうにもしかたがないのです……。」

彼女は口をつぐんで、暖炉の灰を火箸ひばしで何気なくかき回した。

「私は読んだことがあります、」と彼女は言った、「役者というものは何にも感じないものだということを。そして実際、私が見かけるといていの役者は皆、自負心じぶこころのつまらない問題にばかり気をもんでる見栄坊なのです。そしてその人たちと私と、どちらがほんとうの役者でないか、私にはわかりません。けれど自分では、私のほうがそうなのだと思っています。ともかく私は、他の人たちに代わって罰を受けています。」

彼女は話をやめた。夜中の三時だった。彼女は立ち上がって帰ろうとした。クリストフは、朝になって帰るほうがよいと言ひ、自分の寝台に横になつたらと勧めた。彼女は、火の消えた暖炉のそばの肱掛椅子ひしかけいすにすわって、ひっそりした中で静かに話しつづけるほうを望んだ。

「明日あしたになつて疲れますよ。」

「私馴なれていますの。でもあなたこそ……。明日のお仕事は？」

「明日は隙ひまです。十一時ごろちよつと稽古けいこをしてやるだけで……。それに僕は丈夫です。」

「だからなおさらよく眠らなければいけないでしょう。」

「そうです。僕はぐつすり眠りますよ。どんな苦しいことがあつても、眠られないということはありません。あまりよく眠るんで、時には癢しやくにさわることさえあります。それだけ時間が無駄になりますからね……。一度睡眠に仕返しをして徹夜してやるのが、うれしくてたまらないんです。」

二人は小声で話をつづけながら、ときどき長く黙り込んだ。そのうちにクリストフは眠った。フランソアーズは微笑ほほえんで、彼が落ちないようにその頭をささえてやった……。窓ぎわにすわつて薄暗い庭をながめながら、ぼんやり夢想にふけた。庭はやがて明るくなった。七時ごろに、彼女は静かにクリストフを起こして、別れの挨拶あいさつを言った。

その月のうちに、彼女はクリストフの不在中にやつて来た。扉とびらは閉め切つてあつた。クリストフは彼女に部屋の鍵かぎを一つ渡して、いつでも好きなきにはいれるようにしてやった。実際彼女は一度ならず、クリストフがいないときにやつて来た。そしてテーブルの上

に、^{すみれ}菫の小さな花束を置いたり、または紙にちよつと、走り書きや素描や漫画を、書き残していった——立ち寄つたしるしに。

そしてある晩、彼女は芝居の帰りに、また楽しい話を繰り返すつもりで、クリストフのところによつて来た。彼は仕事をしていた。二人は話を始めた。しかし二、三言話し出さずや否や、二人はどちらも、この前のようなやさしい気持でいないことを感じた。彼女は帰ろうとした。けれどもうおそかった。クリストフが引き留めたわけではなかった。彼女自身の意志が帰ることを許さなかつた。二人はそのままじつとしていて、欲望が高まつてくるのを感じた。

そしてたがいに身を任せた。

その夜以来、彼女は幾週間も姿を見せなかつた。彼はその夜のために、数か月眠つていた情欲がふたたび燃え出して、彼女と会わずにはいられなかつた。彼女の家へ行くことは断わられていたので、芝居へ行った。後ろのほうの席に身を隠した。愛情と感動とに燃えつつあった。骨の髄^{すい}までもおののいていた。彼女が自分の役に打ち込んでる悲壯な熱意は、彼女といつしよに彼を焼きつくした。彼はついに彼女へ書き送った。

——あなたは私を恨んでるのですか？ お気にさわったのなら許してください。

その謙遜けんそんな言葉に接して、彼女は彼の家へ駆けつけて来、彼の腕に身を投げ出した。「ただ親しい友だちのまままでいたほうがよかったですでしょうけれど。でもそれでもできなかったからには、しかたないことに反抗しても無駄ですわ。もうどうなっても構わないことよ！」

二人は生活をいつしよにした。それでも各自に自分の部屋へやと自由とを取って置いた。クリストフとの几帳面きちょうめんな同棲どうせいに馴なれることは、フランソアーズにはできなかったろう。そのうえ、彼女の境遇もそれに適しなかった。彼女はクリストフのところに来て、昼と夜の一部を彼といつしよに過ごしたが、しかし毎日自分の家へもどってゆき、そこで泊とまつてくることもあった。

芝居のない幾月かの休暇中には、ジフ寄りのパリー郊外に、二人はいつしよに一軒の家を借りた。多少愁うれいの曇りがなくてもなかったが、とにかく幸福な日々を、彼らはそこで過ごした。信頼と勉励との日々。二人の室はきれいで明るくて晴れ晴れとしていて、畑地を見晴らす広い自由な眼界が開けていた。夜は寝台の上から窓越しに、雲の怪しい影が、どんよりした薄明るい空を過ぎるのが見えた。たがいに抱き合ったままうとうとしなが

ら、喜びに酔つた蟋蟀こおるぎの鳴く声や、驟雨しゅううの降りそそぐ音などが聞かれた。秋の大地の息——忍冬にんとうや仙人掌せんじんそうや藤や刈り草の匂におい——が、家の中にまた二人の身体に沁しみみ込んできた。夜の静けさ。添い寝の眠り。沈黙。遠い犬の吠ほえ声。鶏の歌あけぼの。曙あけぼのの光が見えそめる。冷え冷えとした灰色の暁のうちに、遠い鐘楼で御告アンジェリユスの鐘が細い音をたてる。寝床の温ぬくみの中にある二人の身体は、その暁の冷氣に震えて、なお恋しげにひしと寄り添う。外壁に取りついてる葡萄棚ぶどうだなの中には、小鳥のさえざりが起こってくる。クリストフは眼を開いて、息を凝らし、しみじみとした心で、自分のそばにうちながめる、眠つてる女の疲れたなつかしい顔を、恋のためのその蒼白あおしろい色を……。

彼らの愛は利己的な情熱ではなかった。肉体までも加わりたがる深い友情であった。彼らはたがいに邪魔をしなかった。各自に勉強していた。クリストフの天才や温情や精神力などは、フランソアーズには貴重なものだった。また彼女は、ある事柄には自分のほうが年上だという気がして、母親めいた喜びを覚えるのだった。彼女は彼のひくものを少しも理解できないのが残念だった。彼女には音楽はわからなかった。ただまれには、ある荒々しい情緒にとらえられることもあったが、その情緒でさえ、音楽から来たものというより

もむしろ、彼女自身から来たものであり、彼女やその周囲のもの、景色や人々や色彩や音響など、すべてをそのとき浸している情熱から来たものであった。それでも彼女はなお自分にはわからないその神秘的な言葉を通して、クリストフの天才を感じた。それはあたかも、りっぱな俳優が外国語で演じてるのを見るがようなものだった。彼女自身の天才もそれから力づけられた。またクリストフは作曲するときには、彼女のうちに、その恋しい形体の下に、自分の思想を投げ込み自分の情熱を具象化した。そして彼の眼には、それらの思想や情熱が、自分のうちにあつたときよりもさらに美^{うつく}わしく映^{うつ}ずるのだった。弱くて善良でしかも残酷であり、時には天才の閃^{ひら}めきを見せる、かかる女の魂と親和することは、いかに多くのものを彼にもたらしたことであろう！ 彼女は彼に、人生や人間について——女について、多くのことを教えてくれた。彼はまだ女性をよく理解していなかったが、彼女は鈍^どい洞^{どう}察^{さつ}力をもつて女性を批判していた。ことに彼は彼女のおかげで、劇をよりよく理解するようになった。芸術のうちでもっとも完全なもっとも簡潔なもっとも充実したものである、この驚嘆すべき劇芸術の精神の中に、彼女は彼をはいり込ませた。人間の夢想のこの魔術的な道具を、彼女は彼に開き示してやった。ただ自分のためにのみ書くという彼の傾向——（ベートーヴェンの実例にならって、靈感に接するときには呪^{のろ}うべきヴァイ

オリンなどのために書くということ拒んで、あまりに多くの芸術家らの傾向)——それに従つてはいけないということ、彼女は彼に教えてやった。偉大なる劇詩人は、きまきつた舞台のために働いたり、自分の自由になし得る俳優らにかえつて自分の思想を適応したりすることを、少しも恥とはしていない。そうすることによって自分が狭小となるとは思っていない。夢想することはりっぱなことであるとしても、実現することは偉大なことであると、知っているからである。演劇は壁画のごとく一定の場所にある芸術——生きたる芸術である。

そういうふうにフランソアーズが言い現わす思想は、クリストフの思想とよく一致した。クリストフはその当時、他人と交渉ある多衆的芸術の方面へ志していた。フランソアーズの経験は、公衆と俳優との間に縮まれる神秘的共同動作を、彼に感得さしてくれた。フランソアーズはいかにも現実的であつて、幻影をあまりいだいてはしなかつたけれども、それでもなお、相互暗示の力を、群集に俳優を結びつける同感の波を、多数の魂の深い沈黙のなかからその唯一の代弁者の声が起こつてくる働きを、よく見てとつていた。もとより彼女がそういう感情をもつのは、同じ戯曲の同じ場所でも二度とはほとんど起こることのない、きわめてまれな間歇かんけつ的な閃光せんこうによつてであつた。その他の時はいつも、魂の

こもらない職務にすぎないし、知的な冷やかな機械作用にすぎなかった。しかし興味あるのはその例外の時である——深い淵ふちが、無数の人々の共通な魂が、一閃の光によって寸秒の間でらし出されるときである。その共通な魂の力が、一人の俳優のうちに表現されるのである。

そういう共通な魂をこそ、大芸術家は表現すべきであった。大芸術家の理想は、生きる客観主義であるべきだった。みずから自我の衣を脱いで、世界を吹き渡る多衆的熱情の衣をまとう、古いにしえの楽詩人に見るような、生きたる客観主義であるべきだった。フランソアーズは、いつも自分自身を演出していて、私心を脱却することができなかつただけに、ますますそういう要求を強く感じていた。——個人的情緒の乱雑な発揚は、一世紀半ばかり以前から、ある病的な趣きを帯びてきている。しかし精神上の偉大さは、多く感じ多く支配することにある。言葉は簡潔で思想は貞節であることにある。思想を並べたてないことにある。半音にして了解する人々に向かつて、男子に向かつて、幼稚な誇張や女々めめしい激情なしに、一つの眼つきで、一つの深い言葉で、話しかけることにある。近代の音楽は、あまりに自己のことばかりを語って、あらゆる事柄に不謹慎な内密話を交えるので、貞節と趣味とを欠いている。それはあたかも、自分の病気のことばかりを訴えて、その厭いやな笑

うべき病状をこまかく語って飽きない、一種の病人に似ている。フランソアーズは音楽家ではなかつたけれど、音楽が詩を食い荒らす蝨たこのように、詩を害しながら発展してゆくのをさえ、一つの頹たい廢はい的兆候と見なしがちだった。クリストフはそれに反対した。しかしよく考えてみると、彼女の言うところも多少真実ではあるまいかと疑った。ゲーテの詩に基づいて書かれた最初のうちの歌曲は、簡潔で正確だった。やがてシューベルトは、自分の情熱的な感傷をそれに交えた。シューマンは、小娘めいた懶惰うんださをそれに交えた。そしてフリーゴ・ヴォルフに至るまで、大袈裟おおげさな空調子からや、無作法な分析や、魂の片隅かたすみをも暗所に残さないという主張などのほうへ、その運動は進んでいつている。心の神秘の上に掛とぼりかつてた帷とぼりはみな引き裂かれていく。ラトラン聖殿の黒布をまとつた一ソフォクレスによつて簡潔に言われた事柄が、今日では、真裸な姿を見せる猥みだらなメナードどもによつて喚わめきたてられている。

クリストフはそういう芸術を多少恥ずかしく思った。彼自身もそれに感染してる気がした。そして、彼は過去に引き返そうとしないで——（引き返すのは馬鹿げた不自然な願ねがいである）——自己の思想については尊大な慎みを事とし、大なる多衆的芸術にたいする觀念を有していた、過去のある大家らの魂のうちに、浸り込んでいった。彼はヘンデルを讀

み返してみた。ヘンデルはものが民族の涙つぽい敬虔主義を軽蔑して、民衆のための民衆の歌たる、巨大なる聖歌アンセムと叙事詩的な聖譚曲オラトリオとを書いたのであった。しかし現代においては、ヘンデルの時代における聖書バイブルのように、ヨーロッパの各民衆のうちに共通な情操を喚起せしめ得るとき、靈感的主題を見出すことが、至って困難であった。現代のヨーロッパは、もはや一つの共通な書物をもっていなかった。万人のためになるべき、一つの詩も一つの祈祷文キリシヤも一つの信仰録もなかった。それこそ、現代のあらゆる著作家や芸術家や思想家にとつては、堪えがたい恥辱となるべき事柄だった。一人として、万人のために書き万人のために思索する者がいなかった。ただ一人ベートーヴェンのみが、慰藉いしや的な新しい福音書の数ページを残していた。しかしそれを読み得る者は音楽家のみであった。大多数の人は理解できなかつたであろう。またワグナーも、すべての人を結合せしむべき宗教的芸術を、バイロイトの丘の上に築き上げんと試みた。しかし彼の偉大なる魂は、当時の頽廢たいはい的な音楽および思想のあらゆる欠点を帯びすぎていた。その神聖なる丘の上に来た者は、ガリラヤの漁夫たちではなくて、パリサイの徒であった。

クリストフは、いかなるものを作るべきかをよく感じてはいたが、しかし詩人がいなかった。自分一人でやっていって、音楽だけにとどまらなければならなかった。そして音楽

というものは、なんとと言っても、普遍的な言葉ではない。万人の心に音響の矢を射込むためには、言語の弓が必要である。

クリストフは、日常生活から鼓吹された一連の交響曲シンフォニーを書こうと企てた。ことに自己一流の家庭交響曲を脳裡のうりに浮かべた。それはリヒアルト・シュトラウスのそれとは異なったものであった。種々の人物を、作者の意図に従って勝手に主題が表現する、あの因襲的な初歩の手法を用いて、家庭生活を映画的な画幅中に物質化することは、彼の好まないところだった。それは対位法主義の偉い作曲家がやる博識幼稚な遊戯のように思えるのだった……。彼は人物をも行為をも描写しようとは求めなかった。各人からよく知られていて、各人が自分の魂の反響をそこに見出し得るような、種々の情緒をこそ、彼は言い現わしたかった。第一の曲は、恋し合った若い夫妻の落ち着いた淳じゅんぼく朴な幸福を、そのやさしい愛欲や、その未来にたいする信頼などを、表現したものだ。第二の曲は、子供の死に關する悲歌エレジーだった。けれど彼は、苦悩の表現における写実的な努力を、嫌悪けんおして避けていた。個性的な面影はなくなっていた。そこにあるものはただ、大なる悲惨——万人がになつておりもしくはになうかもしれない一つの不幸に面した、汝の、われの、あらゆる人の、悲惨であった。そういう悲嘆に圧倒された魂は、痛ましい努力をもつてしだいに起たち

上がって、自分の苦しみを供物として神へささげていた。第二の曲に引きつづいて第三の曲では、その魂がふたたび勇ましく自分の道を進んでいた。この曲は自由気ままなフーガで成っていて、その大胆な構想と執拗な律動とは、ついに主人公の一身をつかみ取って、奮闘と涙の中で、不撓不屈な信仰に満ちてる力強い行進へ導いていた。最後の曲は、人生の夕を描いたものだった。最初の主題がそこにふたたび現われて、その感動すべき信頼と老いることなき情愛とをまだもつてはいたが、しかしいつそう成熟しやや傷ついたものとなっていて、苦悩の影から浮かび出で、光明をいただき、あたかも豊かな花園のように、無限の生にたいする敬虔なる愛の賛歌の声を、天のほうへ高めていた。

クリストフはまた、昔の書物の中に、万人の心に話しかくる、単純にして人間的な大なる主題を捜した。彼はそのうちの二つ、ヨセフとニオベトを選んだ。しかし彼はそこで、詩と音楽との結合という危険な問題にぶつかかった。彼はフランスアーズと話し合ってから、昔コリーヌとともに立案した計画へふたたびもどっていった。それは歌う歌劇と語る演劇との中間を占むる音楽的戯曲の一形式——自由な言葉と自由な音楽とを結合した芸術——現代の芸術家がほとんど思いついていないものであって、ワグナー派の伝統にしみ込んだ旧慣墨守の批評家らが、否定してかかっているものであった。それは新しい作品だった。ベ

ート・ヴェンやウエーバーやシューマンやビゼーなどは、天才をもって挿楽劇メロドラマを實際にこしらえてはいるけれど、その足跡をたどるのが、主眼ではない。なんらかの音楽の上になんらかの語られる声を張りつけて、顫トレモロ音を伴わせながら無理やりに、粗野な公衆へ粗野な効果を与えるのが、主眼ではない。音楽的な声がそれに配せられる楽器と結合して、その流暢りゆうちような各節に音楽の夢想と愁訴との反響を慎み深く混和して、新しい一種類を創り出すのが主眼である。かかる形式を適用することができるのは、一定の範囲内にとどまる主題にたいしてばかりであり、人の魂がその詩的な香りかおを発散させんと、しみじみ沈潜している瞬間にたいしてばかりである。これほど慎重で貴族的であらなければならぬ。芸術は、他に存しない。それゆえに、芸術家らの言説に反して成り上がり者の深い凡俗性の匂においがしてゐる時代においては、この芸術が花を咲かせる機会をあまりもたないことは、自然の理である。

こういふ芸術にたいしては、おそらくクリストフは、他の芸術家たちと同様に不適任であるかもしれない。彼の長所そのものが、彼の平民的な力が、ここでは一つの障害となつていた。彼はただこの芸術を頭に浮かべたばかりであり、フランソアーズの助力で多少の草案を作り得たにすぎなかつた。

彼はかくて、^{バイブル}聖書の数ページをほとんど原文どおりに取ってきてそれを音楽に移した。——たとえばヨセフのあの不滅な一場面であつて、そこでヨセフは、兄弟たちに自分の身の上を明かし、そして、多くの困難の後にもはや感動と愛情とに堪えきれなくなつて、老トルストイやその他多くの者に涙を流さしたような、つぎの言葉を低くささやくのである。

われはもはやみずから忍ぶことあたわず……。聞けよ、われはヨセフなり。わが父はなお生きながらえおるや。われは^{なんじ}汝らの弟、姿失せたりし汝らの弟なり……。われはヨセフなり……。

この美しい自由な共同生活は、長くつづくことができなかつた。二人はいつしよに力強い豊満の瞬間を味わつたが、しかし二人はあまりに異なつていた。そして二人とも同じく激しい気質だつたから、しばしば衝突をきたした。その衝突は少しも卑しい性質を帯びなかつた。なぜなら、クリストフはフランソアーズを尊敬していたから。そして、時には残忍となり得るフランソアーズも、自分にたいして親切な人たちには親切であつた。どんなことがあつてもそういう人たちに悪いことをしたくなかつた。それに元来二人はどちらも、

快活な素質をもっていた。彼女は自分自身をあざけった。それでもやはり彼女は悩んでいた。昔の情熱にまだとらえられていた。まだあのくだらない男を愛して、その男のことをやはり考えていた。そしてそういう恥ずかしい状態に堪え得なかつたし、ことにクリストフからそれを察せられることに堪え得なかつた。

クリストフは、彼女が幾日も憂鬱ゆううつに沈み込んで黙つてたまらなそうにしてるのを見て、彼女が幸福でないことを不思議がった。彼女は目的を達してはいないか、人から賞賛され媚こびられる大芸術家となつていたではないか……。

「そうよ、」と彼女は言った、「商人のような魂をもつて事務的に芝居を演ずる、多くの名高い女優たちと私も同じ心だつたら、いいかもしれないわ。あの人たちは、よい地位や市民的な金のある結婚などを「実現」して、りっぱな勲章など——目当ての地——にたどりつくと、それで満足している。けれど私の望みはもっと大きいよ。人は馬鹿でないかぎり、成功は不成功以上にむなしなものだとは思えないでしょうか。あなたはそれを御存じのはずよ。」

「知ってる。」とクリストフは言った。「ああ僕は子供のときには、光栄をこんなものだとは想像していなかつた。どんなにか光栄を熱望したことだろう。それがどんなに光り輝

いたものかと思えたことだろうか？ 何かある宗教的なもののように、僕は遠くからあこがれていた……。でもそんなことはどうでもいい。とにかく成功のうちには一つの尊い徳がある。すなわち善をなすことができるようにしてくれるのだ。」

「どういふ善なの？ なるほど勝者とはなるけれど、それがなんの役にたつでしょう？ 何にも変わりはないわ。芝居も音楽会も、何もかも元どおりだわ。新しい流行が他の流行のあとを継いだというまでのことよ。皆は成功者を理解しやしない。理解するにしても駆け足でだわ。そしてもう他のことを考えてるでしょう……。あなただって、他の芸術家たちを理解していて？ がとにかく、あなたは理解されてやしないことよ。あなたがいちばん愛してる人たちでさえ、どれほどあなたから遠く離れてることでしょう！ あなたはトルストイのことを覚えていて？……」

クリストフはトルストイに手紙を書いたことがあった。トルストイの書物に感激したのだった。その民衆のための物語の一つを音楽に移したいと思って許可を求め、自分の歌曲集を送ってやった。ゲートルはシューベルトやベルリオーズからその傑作を送られても返事を出さなかったが、トルストイも同様、クリストフへ返事をくれなかった。彼はクリストフの音楽を演奏さしてみた。そして癪しゃくにさわった。何にもわからなかった。彼はベーター

ヴェンを敗徳漢だとしシエイクスピアを香具師かぐしだとしていて、その代わりに、気取ったつまらない作家を喜び、丁ちよんまげ 髻まげ 王を感じさせるクラヴサンの音楽などを喜んでいたので。

そして小間使の告白をキリスト教的な書物だと思っていたのだ……。

「偉大な人々はわれわれを必要としてはいないのだ。」とクリストフは言った。「それより他の人々のことを考えなければいけない。」

「だれのことを？……人生を包み隠す影となってる、あの凡俗な公衆のことをなの？ あんな人たちのために演じたり書いたりし、あんな人たちのために一生を棒にふるなんて！ まあなんといいやなことでしょう！」

「なあに、」とクリストフは言った、「彼らにたいしては僕も君と同じ考えだ。それでも別につまらない思いはしない。彼らは君が言うほど悪いものではない。」

「あなたはまったく楽観的ね。パングロス先生だわ。」

「彼らだって僕と同じく人間なんだ。どうして僕を理解しないということがあろう？——そして、たとい彼らが僕を理解してくれなくても、それで僕は絶望するものか。あれら無数の人々のうちには、僕と心を共にするような人が、常に一、二人はいるだろう。それで僕には十分だ。外界の空気を呼吸するには一つの軒窓で十分だ……。あの無邪気な観客た

ちのことを、若者たちのことを、誠実な年老いた魂たちのことを、考えてもみたまえ。彼らは君が示してやる悲壮な美に接すると、自分の凡庸な日々を超越するじやないか。また子供のおりの君自身を思い起こしてみたまえ。かつて人が自分になしてくれた幸福と善とを他人に——たとい一人にでも——なしてやるのは、いいことではないか。」

「あなたはそういう人がほんとに一人でもいると思っていて？ 私はもう疑わないでおれなくなったのよ……。それに、私たちを愛してくれる者のうちでいちばんよい人たちでさえ、どういうふうに私たちを愛してくれてるでしょうか。どういうふうに私たちを見てくれているでしょうか。いけない見方をしてはしないでしょうか。人を辱めるはずかしような賞賛の仕方をしてるわ。どんな大根役者が演ずるのを見ても、やはり同じようにうれしがってるわ。軽蔑けいべつすべき馬鹿者と同様に私たちを取り扱ってるわ。あの連中の眼には、成功しさえすればだれでも同じものに見えるのよ。」

「それでも、皆のうちでもっとも偉大な人々こそ、もっとも偉大な人として、後世に残るものだ。」

「それは距離のせいよ。山は遠くなるほどなお高く見えるものよ。そういう人たちの偉さはよくわかるけれど、それだけ遠く離れてるわけだわ……。それにまた、彼らこそもっと

も偉い人たちだとだれが言えるでしょう？　その他のもう死んでしまってる人たちについては、あなたは何を知っています？」

「そんなことはどうでもいい！」とクリストフは言った。「僕がどんなものであるかを、だれも感じてくれなくても、僕はやはり僕だけのものだ。僕は自分の音楽をもっている、それを愛している、それを信じている。その音楽こそすべてのものよりいっそう真実なのだ。」

「あなたはまだ、自分の芸術のなかでは自由で、なんでも勝手なことができるわ。けれども私は何ができるでしょう？　人からあてがわれたことを演じなければならぬし、それを厭いやになるほど繰り返し返さなければならぬのよ。アメリカの役者たちは、リップやロベール・マケールを何千回となく演じ、二十五年間もつまらない役をくり返してるそうですが、私たちはフランスでは、まだそれほどの馬鹿げた状態にはなっていない。けれどその途中にあることは確かだわ。芝居みじって惨めなものよ。観客が持ち堪えることのできる天才と言えば、ごく少量の天才ばかり、髭ひげをそり爪つめをきり毛をぬき香水をふりまいた流行型の天才ばかり……。『流行型の天才』だつて、笑わせるじゃないの……。ほんとに力の無駄むだ使いだわ。ムーネのような人がどんな取り扱いを受けたか、みてごらんさい。生涯しょうがいの間

何を演じさせられたでしょう？　生き甲斐のある役と言ったら、オイディプスやポリュエウクトスなどきりだわ。その他はほんとにつまらないものばかり。しかも彼にとつては、偉大な光榮な事柄でたくさんすべきことがあったのを考えてごらんなさい……。フランス以外だつて同じことだわ。デューゼのような人がどんな取り扱いを受けたでしょう？　どんなことに生涯を費やしたでしょう？　ほんとに無駄な役ばかりしたんじゃないやなくて？　「君たちのほんとうの役は、」とクリストフは言った、「力強い芸術品を世の中に押しつけることだ。」

「いくら骨折つても駄目なことよ。骨折るだけの価値もないわ。そういう力強い作品も一度舞台にかかると、その偉大な詩を失つて、虚偽なものになってしまうのよ。観客の息がそれをしなびさしてしまうのよ。息苦しい都会の臭い巢の中にいる観客は、広い大気や自然や健全な詩というものが、どんなものだかももう知つてやしない。あの人たちに必要なのは、私たちの顔みたいに塗りたてた詩ばかりよ。——ああ、そのうえ……。そのうえ、なお、成功したとしても……。それだけでは生活が満たされやしないわ、私の生活が満たされやしないわ……。」

「君はまだやはり彼のことを考えてるんだね。」

「だれのこと？」

「わかつてるじゃないか。あの男のことさ。」

「そうよ。」

「だが、たとい君がその男を手に入れたとしても、またその男が君を愛してくれたとしても、実際のところ、君はまだ幸福にはなれないだろうし、苦しみの種をいくらも見つけるだろうよ。」

「まったくよ……。いったい私はどうしたんでしよう？……ねえ、私はあまり戦って、あまり自分を苦しめて、もう落ち着きを取りもどすことができず、自分のうちに不安をもつてるのね、何か熱病を……。」

「そんなものは、困難をなめない前にも君のうちにあったはずだ。」

「そうかもしれないわ……。そう、小さな娘の時分からもう……。私はそれに苦しめられてたのよ。」

「いったい何を君は望んでるの。」

「わからないわ。自分にできる以上のことをでしょう。」

「僕にもそんな覚えがある。」とクリストフは言った。「青春のころはそうだった。」

「でもあなたは、もう一人前の男になっていてよ。私はいつまでたっても若者に違いないわ。不完全な者だわ。」

「だれだつて完全な者はないさ。自分の力の範囲を知つてそれを愛することが、すなわち幸福というものだ。」

「私にはもうできなくてよ。その範囲から出てしまつたんだもの。私は生活に痛められ疲らされ駄目にされてるのよ。それでも、皆の連中のようではなくて、普通の健全な美しい女になることもできたかもしれないと、そんな気がするのよ。」

「君は今でもまだなることができる。僕にはそういう君の姿がよく眼に見える。」

「ではどんなふうにあなたの眼に映つてるか、それを言つてちょうだいね。」

彼は、自然ななだらかな発展をとげて愛し愛される幸福な身になれる条件のもとにおける、彼女の姿を、いろいろ話してきかした。彼女はそれを聞くのが楽しかった。しかし聞いたあとで、彼女は言つた。

「いいえ、もう今じゃ駄目よ。」

「そんなら、」と彼は言つた、「あの老ヘンデルが盲目になつたおりのように、みずからこう言うがいい。」

(あるものはみなよろし)

そして彼はピアノのところへ行つて、それを彼女に歌つてきかした。彼女はそのとんだ楽天家を抱擁した。彼は彼女のためになつていた。しかし彼女は彼の害になつていた。少なくとも彼女は、彼の害になるのを恐れていた。彼女は絶望の発作に襲われることがあつて、それを彼に隠し得なかつた。愛のために彼女は気が弱くなつていた。夜、二人相並んで床についてるとき、彼女が無言のうちに苦悶くもんをのみ下してるとき、彼はそれを察するのであつた。そして、すぐそばにいながらしかも遠い彼女に向かつて、その圧倒してくる重荷を自分にも共に荷になわしてくれと願つた。すると彼女は逆らい得ないで、彼の腕の中で泣きながら、自分の苦しみを打ち明けた。そのあとで彼は幾時間も、親切に穏やかに彼女を慰めた。しかしその絶えざる不安は、長い間には彼女を打ち負かさずにはいなかつた。自分の焦慮がついには彼へも感染しはすまいかと、彼女は恐れおののいていた。彼女は彼を深く愛していたので、自分のために彼が苦しむという考えに堪えられなかつた。彼女はアメリカへの契約を申し込まれていた。むりに立ち去るためにそれを承諾した。恥ずかしい

気持でいる彼と別れた。彼と同じくらいに恥ずかしかつた。ああ、たがいに幸福にし合うことができないとは！

「ねえあなた、」と彼女は悲しげにやさしげに微笑ほほえみながら言った、「私たちはほんとうに間抜け者ではなくって？　こないいい仕合わせは、こんな友情は、もう二度と見つからないでしょう。けれどしかたがないわ、どうにもしかたがないわ。私たちはあんまり馬鹿ですわ！……」

二人はきまり悪げにまた悲しげに顔を見合わせた。泣くまいとして笑った。たがいに抱擁し合った。そして眼に涙を浮かべながら別れた。別れるときくらい深く愛し合ったことはなかった。

そして彼女が立ち去った後、彼はふたたび芸術へ立ちもどった、自分の古い伴侶ほんりよのもとへ……。おう、星をちりばめた空の平和よ！……

それからしばらくしてのことだったが、クリストフはジャックリーヌから一通の手紙を受け取った。彼女から手紙をもらったのはそれが三度目にすぎなかった。ところがその手



紙の調子は、いつもの彼女の調子とはすっかり変わっていた。もう長く会わないでいる遺憾さを述べて、彼を愛してる二人の友を悲しませるつもりでないのなら来ていただきたいと、やさしく彼を招いていた。クリストフはたいへん喜んだ。けれど別に不思議がりではなかった。自分にたいするジャツクリーヌの不正な気持は長くつづくものではないと、彼は考えていたのだった。老祖父の嘲ちやうろう弄ろう的な言葉をいつも好んでみずから繰り返していた。

——おそかれ早かれ、女には善良な時がやってくるものだ。気長くその時を待っていさえすればよい。

で彼はオリヴィエの家へ出かけていった。そして喜んで迎えられた。ジャツクリーヌは彼にたいしてたいへん注意深い態度を見せた。生来の皮肉の調子を避けて、クリストフの気にさわりそうなことは言わないように用心し、彼の仕事に同情を示し、真面目まじめな話題について賢い口をきいた。クリストフは彼女が一変したのだと思った。しかし彼女は彼の気に入らなためのみ一変したのだった。彼女はクリストフと世に流行はやってる女優との情事を耳にしていた。その話はパリーじゅうの噂うわさの種となっていた。そしてクリストフは、まったく新しい光に包まれてるように彼女には思われた。彼女は彼にたいする好奇心にとら

われた。彼に会つてみると、以前よりはずっと多く同情がもてた。彼の欠点さえも面白く思えないではなかった。クリストフが天才をもつてることや、人から愛されるだけの価値があることなどを、彼女は気づいた。

若夫婦の状態は少しもよくなつていなかった。悪くなつてきえいた。ジャックリーヌは退屈しぬいていた……。女はなんとこの孤独なものであらう！ 子供以外には何も女を支持するものはない。そして子供でさえも、女を常に支持するには足りない。単に女性であるというばかりではなくほんとうに女であつて、豊かな魂とめんどろな生活をもつてゐる場合には、女は非常に多くの務めを帯びるようになってきてゐるもので、人に助けられなければ、その務めをなしとげることができないのである……。男は女よりはるかに孤独ではない。一人きりのときでさえさうである。その独語は寂寞せきぼくを満たすに足りる。また結婚して孤独の場合には、なおよくそれに甘んじ得られる。なぜなら、それに気づくことが少なく、いつも独語ばかりしているから。そして、寂寞の中で自若としてみずから語りつづけるその声の響きは、彼のそばにいる女にとっては、愛に勢いづけられていない言葉はすべて死語と感ずる女にとっては、沈黙をますます恐ろしいものとなし、寂寞をますます堪えがたいものとなすのであるが、彼はそれを夢にも知らない。彼はそれを見てとらない。彼は女

のように自分の生活全部を担保として、愛の上に賭けたのではない。彼の生活は他のほうで満たされている……。しかるに、女の生活やその広大な願望は、何が満たしてくれるであらうか。人類が引きつづいてる四十世紀の間、一時の愛と母性というただ二つの偶像に燔祭はんさいとしてささげられて、いたずらに燃えつくして、その熱烈ほうじょう豊饒な力をもつて無数の女を、何が満たしてくれるであらうか？　そして右の二つの偶像さえ、実は崇高な欺瞞ぎまんであつて、しかも女のうちの多くの者には拒まれており、その他の女の生活を充実させるのも数年間のことにすぎない。

ジャッククリューヌは絶望していた。刃やいばのように自分を突き通す恐怖を、ときどき感ずることがあつた。彼女は考えた。

「なんのために私は生きてるのだろうか？　なんのために生まれてきたのだろうか？」

そして彼女の心は悶えもた苦しんだ。

「ああ私はもう死ぬのだ、もう死ぬのだ！」

その考えが彼女につきまとい、夜中にまで追っかけてきた。彼女は自分がこう言つてる夢をみた。

——一八八九年だ。

——いや、一九〇九年だ。——とだれかが答えた。

彼女は自分が思つてたよりも二十年も年上なのにながかりした。

「もうおしまいだ。それなのに私はほんとうに生きたこともなかった。この二十年間を私はどうしたのだろうか？ 自分の生涯しょうがいを私はどうしたのだろうか？」

彼女は自分が四人の娘となつてゐる夢をみた。四人とも同じ室に別々の寝台に寝ていた。四人とも同じ身長であり同じ顔だった。けれども、一人は八歳で、一人は十五歳で、一人は二十歳で、一人は三十歳だった。伝染病が流行していた。三人はもう死んでいた。四番目の者は鏡を見ていた。恐怖に襲われていた。鏡の中の姿は、鼻が細り顔だちがやつれていた……彼女も死にかかつてゐるのだった。——もうそれでおしまいになるのだ……。

——自分の生涯を私はどうしたのだろうか……

彼女は涙を浮かべながら眼を覚さました。けれど悪夢は夜が明けても消えなかつた。悪夢は事実だった。彼女はその生涯しょうがいをどうしたのだろうか？ だれがそれを奪い取つたのだろうか？……彼女はオリヴィエを恨みだした。オリヴィエこそは罪なき共犯者——（罪がないとて、害が同じならどうにもならない）——彼女を圧倒する盲目な掟おきての共犯者である。彼女はそのあとで、彼を恨んだことをみずからとがめた。なぜなら彼女は善良だった

から。しかし彼女はあまりに苦しんでいた。そして、彼女に結びついて彼女を害してる男、みずからも苦しんではいるものの、やはり彼女の生を窒息さしてるその男、それを彼女は復讐ふくしゅうのためにさらに苦しませずにはいられなかった。その後彼女はますますがっかりしぬいて、自分で自分が厭いやになった。もし自分自身を救い出す方法が見出せなかつたら、なおいつそう悪いことをするようになるかもしれない気がした。彼女は自身を救い出す方法を、周囲に手探りで捜し求めた。あたかもおぼれる者のようになんにもすがりついた。多少とも自分の物であり自分の作品であり自分の存在でありさえすれば、その何物かに、なんらかの作品に、なんらかの存在に、心を寄せようと試みた。知的な仕事をまた始めようと努め、外国語を学び、論説や短編小説を書き始め、絵画や作曲を始めた……。でもすべて駄目だった。最初の日からもう落胆した。あまりにむずかしかった。それに、「書物や芸術的作品なんかがあるだろうか？ 私がほんとうにそれを好きかどうかともわからないし、それがほんとうに存在してるかどうかともわからない……。」「——ある日などは、彼女は元気に話をし、オリヴィエといっしょに笑い、二人で話してる事柄に興味を覚えてるらしい様子をし、みずから気を紛らそうとした……。がそれも駄目だった、にわかに不安が襲ってきた心がぞつと冷えきって、涙も出さず息もつけずに、たまたまなくなつて身を隠した。——

彼女はオリヴィエにたいする自分の計画を一部なしとげた。オリヴィエは懐疑的になり社交的になった。けれどそれも彼女には別にありがたくなかった。彼女は彼を自分と同じく弱者だと思った。ほとんど毎晩二人は外出した。彼女は自分の苦しい倦怠けんたいを、パリーのあらゆる客間にもち運んでいた。彼女のいつも武装してる微笑の皮肉さの下にそれを見てとる者は、だれもいなかった。彼女は自分を愛してくれて深淵しんえんの上にささえ止めてくれる者を、捜し求めていた……。けれど駄目、駄目、駄目だった。彼女の絶望的な呼び声に答えてくれるものは、何もなかった。ただ沈黙ばかり……。

彼女は少しもクリストフを愛してはいなかった。彼の粗暴な態度や、気にさわるほどの淡泊さや、ことにその無関心さなどを、我慢できなかった。彼を少しも好きにはなれなかった。けれど、少なくとも彼は強者で——死を超越した岩石であることを、彼女は感じた。そして、その岩にすがりつきたく、波の上に頭をつき出してるその游泳者に取りつきたく、もしくは自分といっしょにそれをおぼらしてしまいたかった。

それにまた、夫をその友人らから分離させただけでは足りなかった。友人らを夫から奪い取らなければいけなかった。女はもつとも正直な者でも、時とすると一種の本能に駆られて、自分の力の及ぶ限りを試みんとし、さらにそれ以上のことをやってみるものである。

そういう力の濫用のうちでは、彼女らの弱さは一種の強みとなる。そして女が利己的で傲慢^{うまん}であるおりには、夫からその友人らの友情を奪い取ることに、よからぬ楽しみを見出す。その仕事は訳なくやれる。少しの秋波を送るだけで足りる。男は実直であろうとなかろうと、投げられた餌^{えさ}を噛むだけの弱さをもたない者はほとんどない。いかに親しい誠実な友でも、相手を欺くことを、実行ではよく避け得るかもしれないが、頭の中ではたいていいつもなし得るものである。そして相手がそれに気づくと、二人の友情はそれで終わる。彼らはもう前と同じ眼でたがいに見はしない。——そういう危険な遊びをやる女のほうは、たいていそれきりのこととして、より以上を求めはしない。彼女は離反した二人を勝手に取り扱うだけである。

クリストフはジャツクリヌのやさしい態度を見てとった。しかしそれを少しも驚きはしなかった。彼はだれかに愛情をいだいているときには、やはり向こうからもなんらの下心なしに愛されるのが自然であると、率直に思いがちだった。彼は若夫人の歓待に喜んで応じた。彼女を愉快に思った。彼女を相手に心から楽しんだ。そして彼は彼女をひどく好意的に判断したので、オリヴィエが幸福になり得ないとすれば、それはオリヴィエの間抜けなせいだと、考えざるを得ないほどだった。

彼は二人に従って数日間の自動車旅行をした。そしてランジエー家がブルゴンニュにもつていた別荘の客となった。それは昔一家の者が住んでいた古い家で、記念のために取っておかれたけれど、ほとんどだれも行く者がなかった。葡萄畑や林の中に孤立していた。内部は破損していて、窓もよく合わさっていなかった。黴^{かび}や、熟した果実や、涼しい影や、日に暖まった樹脂^{やに}多い木立、などの匂^{にお}いがしていた。クリストフは、数日間引きつづいてジャックリーヌといつしよに暮らすうちに、しみじみとしたやさしい感情からしだいにとらえられた。彼はそれにたいして少しも不安をいだかなかつた。彼女の姿を見、その声を聞き、その麗わしい身体に触れ、その口から出る息を吸って、彼は潔白なしかし無形的ではない一つの快さを覚えた。オリヴィエはやや気にかかりながらも黙っていた。彼は少しも疑念をいだきはしなかつた。しかしある漠^{ぼくぜん}然たる不安に苦しめられた。そうだと自認するのも恥ずかしかつた。みずから自分を罰するために、しばしば二人だけをいつしよにさしておいた。ジャックリーヌはその心中を読みとつて、心を動かされた。彼にこう言うてやりたかつた。

「ねえあなた、心配なさらなくてもいいわ。私はまだあなたをいちばん愛してるのよ。」
しかし彼女はそれを口に出さなかつた。そして三人とも事の成り行きに任していた。ク

リストフは何にも気づいていなかった。ジャックリーヌは自分が何を望んでるかばかり知らないで、それを明らかにすることは偶然の手に任じていた。ただオリヴィエだけは、ある先見と予感とをもつてはいたが、自尊心と愛とを汚したくないので、そのことを考えないようにはしていた。けれど、意志が黙るときには本能が口をきく。魂の不在中には身体が勝手な道を進む。

ある晩、夕食のあと、いかにも美しい夜だと思われたので——月のない星の輝いた夜だった——彼らは庭を散歩したくなつた。オリヴィエとクリストフとは家から出た。ジャックリーヌは肩掛を取りに自分の室へ上がった。それからもう降りて来なかつた。クリストフはいつに変わらぬ女の緩漫さを悪口言いながら、彼女を捜しにまた家の中へ引き返した。——（しばらく前から彼は自分で気にもかけずに夫らしい役目をしていた。）——彼は彼女がやって来る足音を聞いた。彼がいる室は雨戸が閉まっていた。何にも見えなかつた。「さあ、いらつしやいよ、気長奥さん。」とクリストフは快活に叫んだ。「あんまり鏡を見てると、鏡が磨^へりますよ。」

彼女は返辞をしなかつた。立ち止まっていた。クリストフは彼女が室の中にいるような気がした。しかし彼女は身動きもしなかつた。

「どこにいるんです？」と彼は言った。

彼女は答えなかった。クリストフも口をつぐんだ。彼は暗い中を手探りで進んでいった。ふとある心配が彼をとらえた。彼は動悸どうつきしながら立ち止まった。すぐそばにジャックリーヌの軽い息づかいが聞こえた。彼はなお一歩進んで、ふたたび立ち止まった。彼女はすぐそばにいた。彼はそれを知っていた。しかしもう進むことができなかった。数秒の沈黙。と突然、二つの手が彼の手をとらえて、彼を引き寄せた。口と口と合わさった。彼は彼女を抱きしめた。一言もなく、じつとしていた。——二人の口はたがいにもぎ離された。ジャックリーヌは室から出て行った。クリストフはおののきながらあとに従った。彼の足は震えていた。彼はちよつと壁によりかかって、血潮の激動が静まるのを待った。やがて彼は二人のところへ行つた。ジャックリーヌはオリヴィエと平気で話していた。二人は彼の数歩先に歩いていった。クリストフは押しつぶされた心地であとから従った。オリヴィエは立ち止まって彼を待った。クリストフも立ち止まった。オリヴィエは彼を親しく呼びかけた。クリストフは返辞をしなかった。オリヴィエは友の気質を知っていたし、ときどき気まぐれな沈黙の中に堅く閉じこもることがあるのを知っていたので、強しいて呼ぼうとはしない。ジャックリーヌと歩きつづけた。そしてクリストフはやはり機械的に、十歩ばか

りあとから犬のように二人について行った。二人が立ち止まると彼も立ち止まった。二人が歩き出すと彼も歩き出した。そうして彼らは庭を一回りして、また家に入った。クリストフは自分の室に上がって行って、閉じこもった。燈火もつけなかった。寝もしなかった、考えてもいなかった。夜中ごろになって、腕と頭とをテーブルにもたせてすわったまま、うとうとした。一時間もたつと眼が覚めた。彼は蠟燭ろうそくに火をつけ、書類や品物をあわただしくかき集め、かぼんの支度をし、それから寝台の上に身を投げ出し、夜明けまで眠った。夜が明けると、荷物をもつて降りてゆき、立ち去ってしまった。人々はその朝じゆう彼を待った。一日じゆう彼を捜し回った。ジャックリーヌは、冷淡の下に憤怒ふんぬのおのきを隠しながら、馬鹿にした皮肉さで、なくなつた器物はないかと調べるようなふうをした。ようやく翌日の晩になって、オリヴィエはクリストフの手紙を受け取った。

親しき友よ、僕が狂人のように立ち去つたのを恨まないでくれたまえ。僕はまったく狂人だ。それは君も知つてることだ。しかししかたがない。僕は僕以外のものになり得ないのだ。君の親切な待遇を感謝する。ほんとうにうれしかった。しかし君、僕は他人といつしよの生活に適してゐる人間ではない。生活にさえ適してゐる人間かどうか、

怪しいくらいだ。片隅かたすみに引きこもっていて、人々を愛する——遠くから愛するのが、僕には適当なのだ。そのほうが用心深いやり方だ。人々をあまり近くで見ると、僕は人間嫌ぎらいいになる。しかも僕は人間嫌いにはなりたくないのだ。僕は人間を愛したい、君たちをみんな愛したい。ああ僕はどんなにか、君たちみんなに善をなしたいことだろう！ 君たちを——君を、幸福ならしめることが僕にできるなら！ おう僕はどんなにか喜んで、僕のもち得るすべての幸福をもその代わりに投げ出すだろう！……しかしそれは僕の力に及ばない。人はただ他人に道を示すことができるばかりだ。他人に代わってその道を歩いてやることはできないのだ。人は各自にみずから自分を救うべきである。君自身を救いたまえ。君たち自身を救いたまえ！ 僕は深く君を愛している。

クリストフ

ジャンナン夫人へよろしく。

「ジャンナン夫人」は、唇くちびるをきつと結び、軽侮の微笑を浮かべながら、その手紙を読んだ。そして冷やかに言った。

「ではあの人の忠告にお従いなさいな。あなた自身をお救いなさい。」

しかし、オリヴィエが手を差し出して手紙を取りもどそうとすると、ジャックリーヌはいきなりそれをもみつぶして、下に投げ捨てた。そして大粒の涙が両の眼からほとぼしつた。オリヴィエは彼女の手をとつた。

「どうしたんだい？」と彼はびつくりして尋ねた。

「構わないでください！」と彼女は憤然として叫んだ。

彼女はそこを出て行った。扉とびらの敷居の上で彼女は叫んだ。

「得手勝手な人たちだわ！」

クリストフはついに、グラン・ジュールナル新聞の保護者たちを、敵となしてしまった。それは前から容易にわかつてることだった。クリストフは、ゲーテが称揚した「無感謝」という徳を、天から授かっていた。ゲーテは皮肉にこう書いている。

感謝の様子を示すのをきらう者は、きわめてまれである。ただ、もつとも憐あわれな階級から出て来て、恩恵者の下劣さにたいていいつも毒されてる助力を、一步ごとに受けなければならなかったような、著名な人々のみが、この嫌悪けんおの情を表わすものであ

る。

クリストフは、世話をされたのにたいして、こちらで身を卑くしたりまた自由を捨てたり——その二つは彼にとつては同一事だった——しなければならぬとは、考えていなかった。彼は恩恵をそんな高利で貸しつけはしないで、ただで与えていた。ところが彼に恩をさせた者たちのほうでは、少し違つた意見をもつていた。債務者にはそれだけの義務があるという至つて高い道徳観念をもつていた。それで、この新聞の主権になるある広告的祝賀のために、ばかばかしい祝賀音楽を書くことを、クリストフが断わると、彼らは気持ちを悪くした。彼にその行為の無作法さを思い知らしてやつた。彼はそれを撃退した。それからしばらくたつて、彼の主張だとその新聞が書きたててる事柄について、彼は猛烈に誤りを指摘したので、ついに彼らは激昂してしまつた。

そこで、彼にたいする戦いが始められた。彼らはあらゆる武器を用いた。そのうえにまた、屁理屈の武器蔵から古い戦道具まで取り出した。それはあらゆる創造者にたいして無力な者どもが順々に使用していったもので、けつして人を殺したことはなかったが、一般の馬鹿者どもにはかならず効果ある影響を及ぼすのだった。すなわち彼らは彼を剽窃

者だと誣しいた。彼の作品や無名な音楽家らの作品の中から、勝手な部分を選び取ってきていい加減に変装させた。そして彼は他人のインスピレーション 靈 感 を盗んだのだと証明した。彼は若い芸術家らを窒息させたのだと中傷した。ところが、吠ほえるのを職務としての奴ら、背の高い人の肩によじ登って「俺おれはお前より高いぞ」と叫ぶ、それら小人の批評家ども、それだけが彼の相手ならまだよかった。しかしそうはゆかなかった。才能ある人々もたがい攻撃し合うものである。各人が仲間の者らにとつては我慢できない人物となるものである。それでもなお、人の言うごとく、各人が平和に仕事し得るくらいには十分世界は広いし、また各人はすでに自分の才能のうちにかなり手剛てしおい敵をもつてゐるものである。

クリストフを嫉視しっししてゐる芸術家らがドイツにいた。彼らには必要に応じていろんな武器を作り出しては、それを彼の敵へ供給した。フランスにもそういう奴らがいた。音楽記者のうちの国家主義者らは——その多くは外国人だったが——民族の相違を彼の頭に投げつけて侮辱した。クリストフの成功ははるかに大となつていたし、また流行まで手伝つていたので、彼はその誇張的表現によつて、中立の人々をさえ——ましてその他の人々をなおさら、憤慨ふんがいさしてゐるはずだと、彼らは考えたのだ。実際クリストフは今では、音楽会の聴衆のうちに、上流社会の人々や青年雑誌の執筆者らの間に、熱心な味方をもつていた。

その人々は、クリストフが何を作ろうとも夢中に喜んで、彼以前に音楽は存しなかったと好んで宣言していた。ある者らは彼の作品を説明して、哲学的意図をそこに見出して、彼はそれを聞いてあきれ返った。またある者らは音楽上の革命をそこに認め、伝統にたいする攻撃を認めていた。が彼は伝統を尊敬してのだった。しかし抗言しても無益だった。何を書いているのか彼は自分で知らないのだと、彼らは彼に証明しかねなかった。彼らは彼を賞賛しながら自分自身を賞賛していた。そういうふうだったから、クリストフにたいする戦いは、彼と同業者たる作曲家連中の間に強い同感を得た。彼らは彼に罪もない右のよくな「空騒ぎ」を憤慨していた。そうでなくとも彼らは彼の音楽を好まなかった。思想に満ち満ちていて、創造的幻想の表面上の混乱さに従って、多少拙劣にその思想を使用している者にたいし、自分では思想をもっていないが、学び知った形式に従ってたやすく思想を表現する者がいなく、自然の憤りを、多くの者はクリストフにたいしていただいていた。書く術すべを知らないという非難が、それらの写字生どもによって幾度となく彼に発せられた。彼らにとつては、文体というものは、食堂の処法のうちに、思想が投げ入れられる料理の鑄型のうちに、存してるのであった。クリストフのもっともよい味方たちは、彼を理解しようとは努めなかった。彼から与えられる善のために単純に彼を愛していたので、彼を理

解する唯一の人々となっていた。ところがそういう人たちは、世に名を知られていない聴衆にすぎなくて、問題にたいする発言権をもっていなかった。クリストフに代わって勇敢に答弁し得る唯一の者——オリヴィエは、当時彼から離れていて、彼を忘れてるかのようだった。それでクリストフは、敵と賞賛者との手中にあつた。その賞賛者どもも、争つて彼に害ばかり与えていた。クリストフは厭いやになつて、少しも答え返さなかつた。大新聞を足場として彼に下されてる判決文、無知と自身の無事とから来る傲ごうまん慢まんさをもつて芸術を指導せんとする、僭せんえつ越えつな批評家どもの判決文、それを彼は読んでも、ただ肩をそびやかしながら言つた。

「俺おれを裁さぐがいい。俺も貴様を裁いてやる。百年たつてから顔を合わせようじゃないか！」
しかし当分のうちは、悪口が時を得ていた。そして公衆は例によつて、それらのもつともくだらない破廉恥な非難を、ただ呆ほうぜん然ぜんとして迎えていた。

クリストフは、自分の地位がかなり困難になつてゐることに氣づかないらしく、ちようどそういうときに自分の出版者とも仲な違ちがひがした。とは言え彼は、そのヘイトを恨む筋はないはずだった。ヘイトは彼の新しい作品を几帳面きちょうめんに出版してくれたし、商売にかけては正直だった。もちろん正直だからとて、クリストフに不利な契約を結んではいた。そして

その契約を守っていた。あまりによく守っていた。ある日クリスマスツツは、自分の七重奏曲が四重奏曲に変えられてるのや、一連の二手用ピアノ曲が四手へ拙劣に書き直されてるのを、見出したいへん驚いた。しかも彼へ無断でされてるのだった。彼はヘヒトのもとへ駆けつけて、その証拠の楽曲をつきつけながら言った。

「君はこれを承知ですか。」

「もちろんです。」とヘヒトは言った。

「よくも……よくも君は、僕の作品を書き改めることができましたね、僕の許しも求めないで！……」

「なんの許しをですか。」とヘヒトは平然として言った。「あなたの作品は私のものです。」

「また僕のものでもあるはずだ。」

「いいえ。」とヘヒトは静かに言った。

クリスマスツツは飛び上がった。

「僕の作品が僕のものではないんだって？」

「もうあなたのものではありません。あなたは私に売られたでしょう。」

「馬鹿なことを言っちゃいけない！ 僕は原稿を売ったのだ。君はそれで勝手に金をこしらえたまえ。しかし原稿の上に書かれてるものは、僕の血なんだ、僕のものなんだ。」

「あなたはすべてを売られたのです。この作品の代わりに、私は三百フランお渡ししました。すなわち、原書が一部売れるに従って三十サンチームの割で、ちょうど限度です。それによってあなたは、あなたの作品についてのすべての権利を、なんらの制限も保留もなしに私へ譲られたのです。」

「作品を破壊する権利をも？」

ヘヒトは肩をそびやかし、呼鈴を鳴らして、一人の店員へ言った。

「クラフトさんの帳簿をもっておいで。」

彼は落ち着き払って、クリストフが読みもしないで署名したその契約の本文を、読んできかした。——それによれば、音楽出版業者がそのころなしていた契約の常則に従って、つぎのことが成立するのだった。——「ヘヒト氏は、著者のあらゆる権利と理由と訴権とを取得し、該作品を、いかなる形式においても、自己の利益のために、出版し、発行し、翻刻し、印刷し、翻訳し、貸与し、販売し、音楽会、奏楽珈琲店、舞踏会、劇場、などに演奏させ、いかなる楽器にも、または言葉を付加することにさえ、作品を変更して、そ

れを発行し、ならびにその表題を変更し……云々、云々、の権利を、一手に有するものなり。」（契約原文どおり）

「ごらんとおり、」と彼は言った、「私はかなり穩和のほうですよ。」

「なるほど、」とクリストフは言った、「僕は君に感謝すべきだ。君は僕の七重奏曲を寄席珈琲店の歌にでも変え得られたはずだから。」

彼は両手に頭をかかえて、途方にくれて、口をつぐんだ。

「僕は自分の魂を売っちゃった。」と彼は繰り返していた。

「御安心なさい。」とヘヒトは皮肉に言った。「私は無茶なことはしませんから。」

「いったいフランス共和国が、こんな取引を許すとは！」とクリストフは言った。「君たちフランス人は、人間は自由だと言っていながら、思想を競売してるのだ。」

「あなたは代価を受け取られたでしょう。」とヘヒトは言った。

「貨幣三十枚、そうだ。」とクリストフは言った。「それを返すよ。」

彼はヘヒトへ三百フランを返そうと思つて、ポケットを探った。しかしそれだけの金をもたなかった。ヘヒトはやや蔑むさげすように軽く微笑ほほえんだ。その微笑にクリストフは腹をたてた。

「僕は自分の作品がいるのだ。」と彼は言った。「作品を皆買いもどすよ。」

「あなたにはそうする権利はありません。」とヘヒトは言った。「しかし私は人を無理につなぎ止めたくありませんから、あなたにお返しすることを同意しましょう——至当な補償金を出してくださいることができれば。」

「すると、」とクリストフは言った、「僕自身の身体を売っても。」

彼はヘヒトが二週間後にもち出してきた条件を、文句なしにすべて承諾した。まったく狂気沙汰^{ざた}ではあったが、彼は初めもらった金高より五倍もの価で、自分の作品全部の版權を買いもどすことにした。五倍というのも誇張ではなかった。なぜなら、ヘヒトがそれらの作品によって得た実際の利益に従って、細密に計算された代価だったから。クリストフはそれを払うことができなかった。ヘヒトの予期したとおりだった。ヘヒトはクリストフを、芸術家としてまた人間として他の青年音楽家のだれよりも高く評価していたので、彼をいじめるつもりではなかった。しかし彼に訓戒を与えたいのだった。彼は自分の権利に属する事柄に人から反抗されるのを許し得なかった。彼があれらの契約規定をこしらえたのではなかった。それは当時の規定だった。それゆえに彼はそれを正当なものだと思っていた。そのうえ彼は、それらの規定は出版者のためになるとともに著者のためにもなるも

のだと、真面目まじめに信じていた。なぜなら、出版者は作品を広める方法を著者よりもよく知っているし、尊敬すべきではあるがしかし著者の真の利益には相反するいろんなよくよした心づかいに、著者ほど拘こうぐ泥でいしはしないからである。彼はクリストフを成功させようと考えていた。しかしそれは彼一流の仕方においてであって、クリストフが手も足も出せないで全身を任せてきたらという条件においてであった。自分の世話からそうたやすく脱せられるものではないということ、彼はクリストフに感ぜさせたかった。二人は条件付きの取引契約をした。もしクリストフが六か月の猶予期限内に金を払い得ないときには、作品はまったくヘヒトの所有に帰するということにした。クリストフが所要の金額の四分の一も集め得ないだろうということは、予知するにたくはなかつた。

それでもクリストフはがんばってみた。思い出の深いその部屋を捨てて、もつと安い住居へ移った。——いろんな品物を売り払った。それがどれも価のない物ばかりなのに、彼はたいへん驚いた。——金を借りた。モークの好意にすがった。がおり悪あしくモークはそのころ、リユーマチで家から出られなくて、ひどく不如意がちで病んでいた。——他の出版屋を捜した。しかしどこへ行っても、ヘヒトのと同じく偏頗へんぱな条件に出会ったり、あるいは断わられたりした。

それはちやうど、彼にたいする攻撃が、新聞雑誌の音楽欄でもっとも盛んな時期だった。パリーのおも立つた新聞の一つが、ことに熱心だった。その編集者の一人は、名前を出さずに、彼を猛烈に非難していた。エコー新聞には、彼を馬鹿にした邪悪な小文が毎週現われた。その音楽批評家は、名前を隠してる同業者の仕事を手伝っていた。わずかの口実さえあれば、ついでに恨みを晴らそうとしていた。しかしそれはまだ最初の小競り合いにすぎなかった。ゆつくりやっついていて、そのうちにほんとうの攻撃に着手すると、彼はほのめかしていた。彼らは少しも急いではいなかった。はつきりした非難を加えるよりも執拗に諷示を繰り返すほうが、公衆には利目が多いいことを、彼らはよく知っていた。彼らは猫が鼠に戯れるように、クリストフをもてあそんでいた。クリストフはそういう論説を送られて、それを軽蔑したが、やはり苦にならないではなかった。それでも彼は黙っていた。そんなものに答え返す代わりに——（答え返そうとしても彼にはそれが果たしてできたらうか？）——彼は自分の出版者との無益な不釣り合いな自負心の争いに固執していた。そして時間と力と金とを失い、唯一の武器まで失っていた。というのは、ヘヒトが彼の音楽のためにしてくれる広告を、彼は喜んで見捨てようとしていたから。

すると突然、万事が変わった。新聞に予告された論説は現われなかった。諷示も消え失

せてしまった。戦いはぴたりとやんだ。なおそればかりでなく、二、三週間後には、その新聞の批評家がついでにといったふうで、賞賛的な数行を発表した。和解が成立したかのような調子だった。ライプチヒのある大出版者は、彼の作品を出版しようと申し込んだ。その契約は有利な条件で結ばれた。オーストリア大使館の印章がついてる丁寧な手紙が来て、大使館で催される大夜会の番組のうちに、彼の作品を数種加えたいとの希望を伝えた。クリストフが聾^{ひい}にしていたフィロメールは、その大夜会にいつか一度、演奏を聞かしてほしいと頼まれた。その後引きつづいて彼女は、パリー在住のドイツやイタリーの貴族たちから、客間の演奏をたびたび頼まれた。クリストフ自身も、それらの音楽会に招かれて、その一つにやむを得ず行ってみると、大使から非常に歓待された。それでも少し話してみると、大使はあまり音楽趣味がなくて、彼の作品については少しも知るところがなかった。ではいつたい、こういう突然の同情はどこから生じたのだろうか？ 見えざる一つの手が、彼を庇護^{ひご}してくれ、障害を除いてくれ、道を平らにしてくれてるがようだった。クリストフは探ってみた。大使はそれとなく彼の二人の味方をほのめかした。それはベレニー伯爵夫妻であって、彼に非常な好意をいだいてるのだった。クリストフはまだその二人の名前さえ知らなかった。大使館へ来た晩には、二人に紹介される機会がなかつ

た。が彼は強いて二人を知ろうとはしなかった。彼はちようど人間が嫌いきらになつたときであつて、味方をも敵をも同様に信用していなかつた。味方も敵も同じように不確かなものだつた。ちよつとした風の調子で変わつてしまふのだつた。そういうものなしにやつてゆけることを学ばなければいけなかつた。十七世紀のあの老人のように言わなければいけなかつた。

神は予に友人らを与え、しかしてまた彼らを予より奪えり。友人らは予を捨てて去りぬ。予も彼らを捨てて、彼らのことを述べじ。

彼がオリヴィエの家を立ち去つて以来、オリヴィエはもう生きてるしるしども見せなかつた。二人の間は万事終つたらしかつた。クリストフは他に新たな友情を結びたくなかつた。彼はベレニー伯爵夫妻をも、味方だと自称する多くの当世才士らと同様だろうと想像した。そして彼ら二人に会おうとは少しも努めなかつた。むしろ二人から逃げたかつた。彼が逃げたいのはパリー全体からだつた。なつかしい静寂の地に数週間逃げ込みたかつた。ああ数日間、ただ数日間でも、故郷の地に身を置くことができたら！ そういう考え

がしだいに病的な願望となってきた。あの河や空や故人の土地をふたたび見たかった。ふたたび見ないではいられなかった。しかし、一身の自由を賭してでなければそれができなかった。ドイツから逃亡当時の逮捕令状のもとにまだあるのだった。しかし彼は、ただ一日でもいいから立ちもどるためには、どんな狂気じみたことをもやりかねないという気がした。

仕合わせにも彼はそのことを、新しい保護者の一人に話した。ドイツ大使館付の青年外交官が、彼の作品が演奏される夜会で彼に会って、故国は彼のような音楽家を有するのを誇りとしてると言ったとき、彼は苦々しげに答えた。

「故国は私をあまりに誇りとしていますから、私に戸を開いてくれずに、門前で私を死なせようとするのでしよう。」

青年外交官はその事情を話した。そして数日後に、クリストフに会いに来て、彼に言った。

「上のほうではあなたに同情していますよ。あなたに加えられてる判決の効果を停止する権能がある、ただ一人のごく高い地位にある人が、あなたの境遇をきかれて、たいへん心を動かされたようです。あの方がどうしてあなたの音楽を好きになられたのか、私には合

点がいきません。というのは——（この場限りの話ですが）——あまり上等な趣味をそなえてる人ではありませんからね。しかし物がよくわかつて寛大な心をもっていられます。あなたに下されてる判決を目下のところでは取り去るわけにゆきませんが、もしあなたが家の人たちに会うために、故郷の町で四十八時間だけ過ごされるのなら、大目に見てやろうとのことです。これがその旅行券です。到着の時と出発の時にこれをお示しなさい。気をつけて、人目をひかないようになさいよ。」

クリストフはも一度、故郷の土地に再会した。その土地とその地中にいる人々とだけ話を交えて、与えられた二日間を過ごした。彼は母の墓を見た。草が生えていた。しかし近ごろ手向けられた花があった。それと相並んで父と祖父とが眠っていた。彼は彼らの足下にすわった。墓は囲いの壁を背にしていた。壁の向こうの隘路あいろに生えてる一本の栗くりの木が、影を投げていた。その低い壁越しに、金色の農作物が見えていた。なま暖かい風がそれに柔らかい波を打たせていた。うつらうつらしてる土地の上に太陽が照り渡っていた。麦畑の中には鶉うずらの鳴き声が聞こえており、墓の上には糸杉いとすぎのやさしいそよぎが聞こえていた。クリストフはただ一人きりで、夢にふけた。心は静かだった。膝ひざのまわりに両手を組

み背中を壁にもたせてすわりながら、空をながめていた。ちよつと眼瞼まぶたを閉じた。ああすべてがなんと簡素なことだろう！ 彼は自分の家で骨肉の人々に取り巻かれてる心地がした。手を取り合つてるがように彼らのそばにじつとしていた。時間が流れ去つていった。夕方になつて、小径こみちの砂の上に人の足音がした。墓守はかもりが通りかかつて、そこにすわつてゐるクリストフをながめた。クリストフはだれが花を手向たむけたのかと尋ねた。ブイルの百姓女が年に一、二回やつて来るのだと、男は答えた。

「ロールヘンだろう？」とクリストフは言った。

二人は話しだした。

「あなたは息子むすこさんかね。」と男は言った。

「息子は三人あるよ。」とクリストフは言った。

「わしが言うのはハンブルグの息子さんでさあ。ほかの二人は悪くそれちやいましてね。」
クリストフは頭を少しそらし加減にして、じつとして口をつぐんでいた。太陽は没しかけていた。

「もう閉しめますよ。」と墓守は言った。

クリストフは立ち上がつて、墓守といっしよにゆつくりと墓地を一回りした。墓守は親

切にしてくれた。クリストフは立ち止まっては碑名を読んだ。いかに多くの知人らがここに集まっていることだろう！ オイレル老人——その婿——先のほうには、幼年時代の友だちや、いつしよに遊んだことのある少女たち——また彼方かなたには、心ときめく名前、アーダ……。すべての人たちに平和あれ……。

夕映えの光が、静かな地平を取り巻いていた。クリストフは墓地を出た。そしてなお長い間野の中を歩き回った。星が輝いてきた……。

翌日、彼はまたやつて来て、その午後を前日の場所でふたたび過ごした。しかし、前日の黙々たる美しい静けさは元気づいていた。彼の心は呑気のんきな幸福な賛歌を歌っていた。彼は墓の縁石に腰をかけて、膝ひざの上に開いた手帳に鉛筆で、聞こえてくる歌を書き取った。かくしてその日は過ぎた。昔の小さな自分の室で仕事をするような気がし、母が仕切りの向こうにいるような気がした。書き終えて立ち去らなければならないときになって——すでに墓から三、四歩遠ざかったときに——彼はふと思いついて、またもどって来、その手帳かずらを葛かずらの下の草の中に埋めた。数滴の雨が落ち始めていた。クリストフは考えた。

「じきに消えてしまおうだろう。それでいいのだ！……あなただけに差し上げます。他のだれにでもない。」

彼はまた河をも見た。馴染み深い街路をも見た。そこには多くの変化があった。町の入口には、古の稜堡いにしえりようほの跡の遊歩場に、アカシアの木立が植えられるのを昔彼は見たのだが、それがすっかりあたりを占領して、古い樹々きぎを窒息させていた。ケリツヒ家の庭をめぐらして壁に沿って行くと、悪戯いたずらつ児この時分にその広庭をのぞき込むためよじ登った、見覚えのある標石があった。そして彼は、その通りも壁も庭も非常に小さくなったのに驚かされた。正面の鉄門の前で彼はちよつと立ち止まった。また歩き出すときに馬車が一つ通った。彼はなんの気もなしに眼をあげてみた。生き生きした太った快活な若い婦人の眼にかち合った。向こうは彼を不思議そうに見調べていた。と彼女は驚きの声をたてた。彼女の合図で馬車は止まった。彼女は言った。

「クラフトさん！」

彼は立ち止まった。

彼女は笑いながら言った。

「ミンナですよ……。」

彼は初めて会った日とほとんど同じくらいに心を躍おどらして（第二卷朝参照）、彼女のそばに駆け寄った。彼女は一人の紳士といっしよだった。背が高く、でっぷりして、頭はが禿

げ、得意げにぴんとはね上がった口髭くちひげをもっていた。その男を彼女は、「高等法院顧問官フオン・プロムバッハ」——彼女の夫——だと彼に紹介した。彼女は彼に立ち寄ってもらいたがった。彼は辞退しようとした。しかし彼女は叫んだ。

「いえいえ、ぜひとも、寄ってくださいさならなければ、お食事をしに寄ってくださいさならなければいけません。」

彼女はたいへん高い声でたいへん口早にしゃべりだして、尋ねられるのも待たずに、もう身の上話を始めていた。クリストフはその快弁と声音とに耳鳴りがして、半分くらいしか聞き取れずに、彼女の顔をながめていた。それはまったくあのかわいいミンナだった。はなやかで、強健で、全身がはちきれそうに太って、きれいな皮膚、薔薇色ばらの顔色、だが顔だけは太く、鼻がことに丈夫で充実していた。身振り、態度、優しさ、すべてが以前のままだった。ただ容積が変わっていた。

彼女はなお話しつづけていた。昔話や、打ち明け話や、夫に愛し愛されてるありさまなどを、クリストフに語った。クリストフは当惑した。彼女は無批判な楽道家であって、自分の町や家や家庭や夫や自分自身を、完全でもっともすぐれたものだと思っていた——（少なくとも、他人の前にいるときには）。彼女は夫の話をして、「これまで見た人のう

ちでももつとも堂々たる人物」であるとか、「超人間的な力」をもつてる人であるなどと、その面前で言っていた。その「もつとも堂々たる人物」は、笑いながらミンナの頬ほっぺたをつついて、「卓越した女」であると、クリストフへ断言していた。この高等法院顧問官は、クリストフの身の上を知っているらしかった。そして、一方に彼の処刑があり、他方に彼をかばつてゐる高貴な保護があるので、敬意をもつて彼を取り扱うべきか、あるいは敬意なしに取り扱うべきか、はつきりわからないらしかった。で結局両方を交えた態度で取り扱おうと決心した。ミンナのほうは始終口をきいていた。自分のことをクリストフへ十分述べつくすと、こんどはクリストフのことを話しだした。彼が尋ねもしないのに非常に打ち解けた事柄まで話して聞かしたと同様に、きわめて打ち解けた事柄まで尋ねかけて彼を困らした。彼女は彼に再会したのをたいへん喜んでいた。彼の音楽については何にも知らなかったが、彼が有名になつてゐることは知っていた。昔彼から愛されたことを——（そしてそれをしりぞけたことを）——ひそかに誇りとしていた。冗談の調子でかなり露骨にそのことをもち出した。彼女は自分の写真帳アルバムに彼の自署を求めた。彼女はパリーのことをしつつこく尋ねた。パリーにたいして好奇心と軽蔑けいべつとを同じくらいにいだいていた。フォリー・ベルジュール座とオペラ座とモンマルトルとサン・クルーとを見たことがあるので、

パリー全体を知つてると称していた。彼女の説によれば、パリーの女はみな娼婦しょうぶでよからぬ母親で、できるだけ子供を産まないし、子供を産んでもその世話をせず、家に打ち捨てておいて、自分は芝居や遊び場所に入りしめるのであった。彼女はそれに反対されるのを許さなかった。その晩彼女は、クリストフへピアノで一曲演奏を求めた。彼をみごとな腕前だと賞賛した。けれど心の底では、夫の演奏にも同様に感心してゐたのだつた。

クリストフがうれしかったのは、ミンナの母親ケリツヒ夫人に再会したことだつた。彼はまだ彼女にたいしてひそかな愛情をもつていた。なぜなら彼女から親切にされたのだから。彼女はやはりその温良さを少しも失わないでいた。そしてミンナよりいっそう自然だつた。しかし彼女はやはりクリストフにたいして、昔彼をじれさしたあのちよつとしたやさしい皮肉を見せつけた。彼女は以前別れたときと少しも違っていかなかった。あのときと同じ事柄を好んでいた。進歩したり変わつたりすることを、彼女は許容できないいらしかった。彼女は昔のジャン・クリストフと今日のジャン・クリストフとを対立させていた。そして前者のほうを好んでいた。

彼女の周囲では、クリストフを除いてはだれも精神の変化をきたしてゐるものはいなかった。小都会の無変化やその天地の狭小さが、クリストフには苦しかった。一家の人たちは

彼が知りもしない人々の悪口をもち出して、その晩の一部をつぶした。彼らは近所の人々の滑稽さをうかがってばかりいて、自分たちと違つてゐるものはみな滑稽だとしていた。たえずつまらぬことばかりにこだわつてゐる不親切なそういう好奇心は、ついにクリストフに堪えがたい不快の念を起こさせた。彼は外国での自分の生活を話そうと試みた。しかしすぐに、フランス文明を彼らに感じさせることが不可能なのを知った。フランス文明に彼は苦しめられてきたが、今自国においてそれを代表すると、至つてなつかしいものに見えるのだつた——知力を第一の法則とする自由なラテン精神、「道徳」の規範を犯してまでできるだけ理解せんとする心。彼は一家の人たちのうちに、ことにミンナのうちに、自分が昔それから傷つけられながら忘れていたあの傲慢な精神を、ふたたび見出したのだつた——弱点と美点とから共に来る傲慢さ——自分の徳操を誇り自分が陥ることのない過失を軽蔑する、その無慈悲な正直、申し分なきことにたいする尊重、「不規則な」優秀さにたいする、響、蹙的な軽蔑。ミンナは常に自分が正しいという落ち着いたもつたいぶつた確信をいだいていた。他人を批判するのになんらの度合いをも設けなかつた。それに元來他人を理解しようとの念がなかつた。自分のことばかりにかかわつていた。彼女の利己主義は漠然たる抽象的な色に塗られていた。「自我」が、「自我」の発展が、たえず

問題であつた。彼女はおそらく善良な女で人を愛することもできたであろう。しかし自身をあまりに愛していた。ことに自分自身をあまりに尊敬していた。「自我」の前で主の禱りいのや聖母の禱りをたえず唱えてるがようだった。彼女が最愛の夫でも、彼女の「自我」の品位に相当した尊敬をたとい一瞬間でも欠くならば——（そのあとで彼がどんなに後悔しようとも）——彼女はまったくそして永久に彼を愛しやめるかもしれないらしかつた：
∴。ああ、その「自我」こそは悪魔にでもいつてしまふがよい！ 少しは「他」を考えるがよい！……

けれどもクリストフは、きびしい眼で彼女を見てはいなかつた。平素はあれほどいらだちやすい彼だったが、今は大天使のような我慢強さで彼女の言葉を聞いていた。彼は彼女を批判すまいと心にきめていた。円光のごときもので、幼時の敬けい虔けんな思い出で、彼女を包んでおいた。そしてあくまでも彼女のうちに、小さなミンナの面影を求めようとした。それを彼女のある身振りのうちに見出せないではなかつた。彼女の声音のある響きは、彼の心を動かす反響を喚よび起こした。彼はそれらのもののなかに浸り込みながら、口をつぐみ、彼女の言葉には耳を貸さず、聴きいてるようなふうを装い、たえずやさしい敬意を示してやった。しかし気を一つに集めるのは困難だった。彼女はあまりに騒々しかつた。彼女

は昔のミンナの声を聞く邪魔となった。ついに彼は少し疲れて立ち上がった。

「可憐なるミンナよ！ お前がここにいることを、喚わめきたてて僕を退屈させるこの美しいでつぷりした女のなかに、お前がいることを、皆は僕に信じさせたがるだろう。しかし僕はそうでないことを知っている。さあ出かけよう、ミンナよ。こんな人たちになんの用があらうぞ。」

彼は明日また来ると約束して、辞し去った。その夜出発するのだと言ったら、汽車の間まで放されなかつたろう。夜のなかに踏み込むとすぐに彼は、馬車に出会う前の安らかな気持を取り返した。その晩の煩わしい会合の記憶は、海綿でも拭ぬぐい去られるように消えていった。もう何にも残らなかつた。ライン河の音がすべてを浸した。彼はその岸の上を、自分が生まれた家のほうへ歩いていった。その家は訳なく見出せた。雨戸が閉まってすっかり眠っていた。クリストフは路のまん中に立ち止まった。もし戸をたたいたら、見覚えのある人の影が戸を開いてくれそうな気がした。家のまわりの河に近い牧場の中、昔夕方ゴツトフリートと話しにやつて来た場所へ、彼ははいり込んだ。そこに腰をおろした。過ぎ去った日々がよみがえってきた。いっしょに初恋の夢を味わったなつかしい少女が、生き返っていた。幼い愛情ややさしい涙や無限の希望などのうちに、二人はまたいっしょ

に生きた。そして彼は温和な微笑ほほえみを浮かべてみずから言った。

「人生は僕に何事も教えてはくれなかつた。いくら知つたとて……いくら知つたとて、甲か斐いはない……。僕はいつまでも同じような幻ばかりをいだいている。」

限りなく愛しそして信ずることは、なんといいことだろう！ 愛に接するすべてのものは死から免れる。

「ミンナよ、僕といつしよにいる——僕といつしよで他の者といつしよでない——ミンナよ、お前はけつして年老いることがないのだ！……」

おぼろな月が雲間から出て、河の面に銀の鱗うろこを輝かした。クリストフは、今自分がすわつてる場所のかく近くを、昔河が流れてはしなかつたような気がした。彼は河のほうへ行つてみた。そうだ、あのころそこには、この梨なしの木の向こうに、細長い砂地と小さな芝生しばふの斜面とがあつた。そこで彼は幾度も遊んだものだった。それを河は蚕食してしまつていゝた。進んで来て梨の根を洗つていた。クリストフは切ない心地がした。彼は停車場のほうへ引き返した。その方面には新しい一郭が——貧弱な住宅、建築中の工作場、製造工場の大煙突など——でき上がりかけていた。クリストフはその日の午後に見たアカシアの木立に思いをはせた。そして考えた。

「彼処あそこにもまた、河が蚕食くちやみしている……。」

古い町は、生者も死者もすべてを包み込んで、暗闇くらやみのなかに眠っていたが、そのほうが彼にはまだなつかしかった。なぜなら、この町も脅かされてるような気がしたから……。

困壁は敵の手中にあり……。

いざ同胞を救い出さんかな！ われわれが愛するものはすべて死にねらわれている。過ぎ去る面影を永遠の青銅の上に、急いで刻みつけようではないか。火災がプリアムの宮殿をのみ尽くさないうちに、祖国の宝を炎から取り出そうではないか……。

クリストフは洪水こうずいを逃げる者のように、汽車に乗って立ち去った。けれども、自分の町の難破から鎮守の神々を救い出す人々と同様に、彼は、故郷の土地からかつてほとぼしり出た愛の火花と、過去の神聖な魂とを、自分のうちに担にない去っていった。

ジャックリーヌとオリヴィエとは、しばらくの間親しくしていた。ジャックリーヌは父

を亡くしたのだった。その死亡から深く心を動かされた。ほんとうの不幸に面すると、他の悲しみはすべてつまらない馬鹿げたものに感ぜられた。そして、オリヴィエが示してくれるやさしい情愛は、オリヴィエにたいする彼女の愛情をふたたび勢いづけた。数年以前、叔母おばマルトの死と楽しい恋愛との間に介在したあの悲しい日々へ、彼女はふたたび連れもどされた気がした。自分は人生にたいして忘恩者であると、彼女は考えた。与えられたわずかなものを奪われないでいることを、人生に感謝すべきであると考えた。そのわずかなものの価が今やわかつたので、彼女はそれをねた妬ましげに胸に抱きしめた。喪の悲しみを紛らすために医者から命ぜられて、一時パリを離れ、オリヴィエとともに旅をし、新婚のころたがいに愛し合った場所へ、一種の巡礼を試みると、彼女はしみじみとした気持になった。消え失せてると思っていたなつかしい愛の面影を、道の曲がり角かどなどにふたたび見出して、それが過ぎ去るのを眺め、それがまた消え失せる——いつまで？ おそらく永遠に？——消え失せるだろうということを知って、二人は憂愁に沈みながら、絶望的な情熱でそれをかき抱いた……。

「残っていてほしい、私たちといっしょに残っていてほしい！」

しかし二人は、それを失いかけてることをよく知っていた……。

ジャックリーヌはパリへもどると、愛に醸^{かも}し出された小さな新たな生命が、自分の身内に躍動するのを感じた。しかし愛はもう過ぎ去っていた。彼女のうちに重みを加えてくる重荷は、彼女をオリヴィエへ結びつけはしなかった。彼女はその重荷について、期待していた喜びを少しも感じなかった。彼女は不安げに自分の心にたずねてみた。以前苦しんでいたころ彼女は、子供ができたら自分は幸福になるだろうかと、しばしば考えたことがあった。そして今や子供はできた。しかし幸福はやって来なかった。自分の肉の中に根をおろしてるその人間植物が、領分の血を吸って成長してゆくのを感じて、彼女は恐怖の念を覚えた。その未知の存在から一身を所有され吸い取られ、ぼんやりした眠つきで、耳を澄まし思いに沈みながら、幾日もじつとしていた。漠^{ぼくぜん}然とした甘い眠つたい気がかりな響きだった。そしてはまたはつとして、そのぼんやりした状態から我に返った——汗にぬれ、身体がおののき、反抗の気がむらむらと起こった。自分をとらえてる自然の網に逆らつて身をもがいた。生きたかった、自由になりたかった。自然に欺かれたような気がした。そしてまたつきには、そういう考えをみずから恥じ、自分を奇体な女だと考え、自分は一般の女よりも悪い者であるかあるいは別種の者であるかしらと、みずから怪しんでみた。そしてしだいに、ふたたび心が鎮^{しず}まってきて、胎内に熟してる生きた果実の養液と夢との

うちに、樹木のように官能が鈍つてきた。その果実は、どういふものになるのかしら？…

初めて明るみに出たその呱呱ここの声を聞いたとき、人の心を撃つ可憐かれんなるその小さい身体を見たとき、彼女の心はすっかり和らいだ。一瞬の眩暈めまいのうちに彼女は、世にもつとも力強い喜びたる光榮ある母性の喜びを知った。自分の苦しみをもって、自分の肉より成る一つの存在を、一つの人間を、創り出したのである。そして、世界を撼ゆるがす愛の大波は、頭から足先まで彼女を抱きしめ、彼女を巻き込み、彼女を天までもち上げた……。おう神よ、児こを産む女は汝にも匹敵する。しかも汝は彼女の喜びに似た喜びを知らない。なぜなら、汝は苦しまなかつたのだから……。

やがてその大波は鎮まつた。魂はまたどん底に触れた。

オリヴィエは感動のあまり震えながら、子供をのぞき込んでいた。そしてジャックリーほほえに微笑みかけながら、自分たち二人とまだほとんど人間とも言えないその憐あわれな存在との間に、生命のいかなる神秘なつながりがあるかを、理解しようと努めていた。その皺しわ寄しわった黄色い小さな顔に、彼はやや無気味そうにしかもやさしく、そつと唇くちびるをあてた。ジャックリー又は彼をながめていたが、妬ねたましげに彼を押しつけた。そして子供を取り、胸に

抱きしめ、やたらに接吻した。子供は泣きたてた。彼女は子供を渡した。そして壁のほうへ顔を向けて泣いた。オリヴィエは彼女を抱擁し、彼女の涙を吸ってやった。彼女も彼を抱擁して、強いて微笑んだ。それから、子供をそばにして休みたいと求めた……。ああ、愛が減びてはもはや致し方もない。男のほうは、自己の半ば以上を理知に委ねるので、強い感情を失つても、その痕跡を、その観念を、かならず頭脳のうちには保存する。彼はもう愛さなくてもいられる。過去に愛したことを忘れずにいる。しかしながら、理由なしに全身をあげて一度愛したことがあり、そして理由なしに全身をあげて愛することをやめた女のほうは、なんとなし得るであろうか？ 意欲するか？ 幻を描くか！ しかも、意欲するにはあまりに弱く、幻を描くにはあまりに真摯である場合には……。

ジャックリーヌは寢床に牝をついて、やさしい憐れみの念で子供をながめた。子供は何者であるか？ たとい何者であろうとも、それは全部彼女ではなかった。それはまた「他」でもあった。そしてその「他」を、彼女はもう愛していなかったのである。憐れなる小さなものよ！ いとしき小さなものよ！ 死に失せた過去に彼女を結びつけようとしてるその存在にたいして、彼女はいらだちの念を覚えた。そしてそのほうへかがみ込みながら、それを抱擁しまた抱擁した……。

現代の婦人の大なる不幸は、彼女らがあまりに自由であるとともにまた十分自由でないということである。もつと自由であつたら、彼女らはいろんな束縛を求めて、そこに一種の愉悦と安寧^{あんねい}とを見出すだろう。またさほど自由でなかつたら、彼女らはいろんな束縛に忍従して、それを破り捨て得ないだろう。そして苦しむことも少なくなるだろう。しかしもつともいけないのは、身を縛^{いまし}めない束縛やのがれ得る義務などをもつてることである。もしジャックリーヌが、自分の小さな家こそ一生の間自分にあてがわれたものだと思つていたならば、彼女はそれをさほど不便にも狭くも感じなくて、それを安樂なものにしようとかふうしたのであろう。始めと同じように終わりまでそれを愛したのであろう。しかし彼女は、自分は家から外に出ることができると知つていた。そして家の中で息苦しさを覚えた。彼女は反抗することができた。ついには反抗しなければならぬと信ずるにいたつた。現時の道徳論者らは、不思議な者どもばかりである。彼らはその観察能力のために全身が萎縮^{いしゆく}している。彼らはもはや生活を見ることしか求めない。生活を理解しようとはほとんどせず、生活を欲しようなどは少しもしない。人間の性質中に現存する事柄を認識し記載するときには、もう自分の仕事はそれで終われりとして、こう言うのである。

「それが事実だ。」

彼らはその事実を変えようとは少しもつとめない。彼らの眼には、存在してるといふだけの事実が一つの道徳的価値とでも映じてるらしい。あらゆる弱点はそのまま一種の神聖な権利を有してるように思われてる。世は民衆化する。昔は国王一人だけしか責任をもつていなかった。現今では、責任をもつていないのは万人であり、ことに下層民たちである。そうだ。実に驚くべき意見ではないか！ 彼らは、多くの苦心と細心な注意とを払って、弱き者にいかなる点において弱いかを示そうと骨折っている。弱き者は永遠に弱きように自然から定められてるといふことを、示そうと骨折っている。もしそうだとすれば、弱き者は腕を拱くこと以外に何をなし得よう？ 弱き者に自惚れの念なきときは幸いなるかなだ！ 汝は病弱な子供であるときり返し聞かせらるるうちには、女はついに病弱なる子供であることを誇りとするようになる。人は女の卑怯な性質を培養し、それに花を咲かせている。しかし、試みに子供に向かつて、幼年期のある年齢では、魂はまだその平衡の状態になつていないで、罪悪や自殺や心身のはなはだしい墮落に陥ることがあると、冗談にも話してきかして、そしてその罪を許してみるがいい——ただちに、罪が生まれてくるだろう。男でさえも、汝は自由でないときり返し言われるときには、もう自由でなくなつて

禽獸きんじゆうに等しくなる。女に向かつて、汝は責任を帯びており、自分の身体や意志の主人である、言ってみるがいい——女は実際にそうなるであろう。しかし諸君は卑怯なあまりに、それを言うのを差し控えている。なぜなら、女がそのことを知らないのが諸君に利益だからだ……。

ジャックリーヌは、その悲しむべき環境のために迷わされてしまった。彼女はオリヴィエから離れると、若いころ軽蔑けいべつしていたあの社会にまたはいり込んでいた。彼女や彼女の友人たる既婚婦人らのまわりには、若い男女の小さな社会ができていた。それらの若い男女はみな、富裕で、優美で、閑散で、伶俐れいりで、気弱だった。そこでは思想も話題も絶対に自由であつて、ただ機知を交えられるために多少穏和になつてのみだった。一同は好んでラブレールの僧院の銘言を採用していた。

好きなことをやるべし

しかし彼らは多少自惚うぬぼれてるのだった。実際のところ大したことを望んではしなかった。テレームの衰弱者どもばかりだった。喜んで本能の自由を公言していた。しかし彼らのう

ちには、その本能がひどく衰微していた。彼らの放縦ほうしゅうは主として頭腦的なものだった。文明の逸樂的な氣のぬけた大浴槽よくそうの中に浸り込む氣持を、彼らは享樂していた。そのなまぬるい泥潭でいねいの浴場では、人間の精力、荒々しい生活力、原始的な動物性、その信仰や意志や熱情や義務の花などは、溶解してしまっていた。そういうゼラチンめいた思想の中に、ジャックリーヌの美しい身体は浴していた。オリヴィエはそれを妨げることができなかつた。そのうえ彼自身も時代の病氣にかかつていた。彼は愛する女の自由を拘束する權利が自分にあるとは思っていながかつた。愛によってでなければ何物も得ようとは欲しなかつた。そしてジャックリーヌは、自分の自由は自分の一つの權利であると思つていたので、オリヴィエの態度を別に感謝してもいながかつた。

もつともいけないことには、彼女はその水陸兩棲りょうせい的な世界のうちに、あらゆる曖昧あいまいをきらう全き心をもつてはいり込んでいた。彼女は一度信ずると、それに身を投げ出すのだつた。熱烈で勇敢な彼女の小さな魂は、その自己主義の中においてさえ、がむしゃらに突進するのだ。そして彼女は、オリヴィエとの共同生活から得た道徳的な一徹さをまだ失わないでいて、それを不道徳な行ないにまで応用しようとしていた。

彼女の新しい友人らはきわめて用心深くて、自己の真相をなかなか他人に示さなかつた。

理論の上では、道徳と社会とのもろもろの偏見にたいして、完全なる自由を看板としていたが、実行においては、自分らの利益となるような人とは、真正面から仲なかつたが違ちがいすることのないように振る舞っていた。あたかも主人のものをごまかす不忠実な召使のように、彼らは道徳と社会とを悪用していた。習慣と閑散とのためにたがいに盗み合つてさえた。自分の妻が情夫をもつてることを知つてる者が幾人もいた。また細君のほうでも、夫が情婦をもつてることを知らないではなかつた。そして彼らはよく和合していた。人の噂うわさがたたなければ憤慨しなかつた。そういう仲のよい夫婦生活は、関係者たち——共犯者たちの間の暗黙な了解の上にたつていた。しかしジャックリーヌは彼らよりいっそうまっ正直であつて、生きいっほん一本な行動をしていた。一にも二にも真面目まじめであり、常住不斷に真面目だつた。真面目ということもまた、当時の思想が激賞する美德の一つだつた。しかし、健全なる者にとつてはすべてが健全であり、腐敗せる心にとつてはすべてが腐敗であるということとは、ここにおいて見られるのである。時としては、真面目であることがきわめて醜悪になる。凡庸な者どもにとつては、自分の胸底を読み取ろうとするのは悪いことである。彼らはそこに自分の凡庸さを読み取る。しかも自尊心を育てるだけのものはなお残つている。ジャックリーヌは、鏡で自分の姿をながめてばかりいた。見ないほうがよろしいいろん

なことを見て取った。見てしまった後ではもう、それから眼をそらすだけの力がなかった。それらを征服するどころか、それらがしだいに大きくなるのを認めた。非常に大きくなつていつて、ついには眼も考えもそのほうに奪われてしまった。

子供は彼女の生活を満たすに足りなかった。彼女は乳が不足して、子供は衰えていった。乳母を雇わなければならなかった。初めはそれがたいへんつらかった——が間もなくそれは安堵あんどの念をもたらしした。もう子供はたいへん丈夫になった。根強く元気に育つてゆき、少しも手数をかけず、たいてい眠つてばかりいて、夜もあまり泣かなかつた。乳母——強健なニヴェルネー人で、幾度か子供に乳をやったことがあるが、そのたびごとに、動物的な嫉妬しつと深い煩雑な情愛を、乳児にたいしていただくのであつた——その乳母のほうが、ほんとうの母親のようだった。ジャックリーヌが何か意見を言つても、乳母は勝手なことばかりしていた。ジャックリーヌは、いろいろ言い争つてみると、自分が何にも知っていないことに気づくのだった。彼女は子供を産んでから、健康が回復していなかった。初期の静脈ようみやくえん炎のために、がっかりして根気がなかった。幾週間もじつとしていなければならなくて、もどかしがつていた。焦燥した考えは、単調な幻覚的な同じ悲嘆をいつまでも繰り返していた。「ほんとうに生きたこともなかつた、生きたこともなかつた。そしてもう

一生は終わってしまった……。」「彼女の想念はいらだたせられていた。自分は永久に不具者になったのだと思っていた。そして、暗黙な苛辣からつな口に出せない怨恨えんこんが、病苦の無辜むこな原因者にたいして、子供にたいして、起こってきた。それは、人が思うほど珍しい感情ではない。ただ人はその上に覆おほいをかぶせてるだけである。それを実際に感じてる女たちでさえ、心の奥底でそれを承認するのを恥としている。ジャックリーヌは、みずから自分をとがめた。利己心と母性愛との間に争いが起こった。子供がいかにも幸福そうに眠つてのを見ると、彼女の心は動かされた。しかしすぐそのあとで彼女は苦々にくにくしく考えた。

「この子が私を殺したのだ。」

そして彼女は、自分の苦しみで幸福あがなを購あつてやったその子供の、無関心な眠りにたいするいらだたしい反抗を、押えつけることができなかつた。彼女の身体が回復し子供が少し大きくなってからも、そういう敵意ある感情はおぼろげながら残っていた。彼女はその感情をみずから恥じたので、それをオリヴィエのせいだとした。彼女はやはり自分は病気であると思っていた。そして、病氣の原因たる無為閑散——（子供からは離れ、働くことを強しいて禁ぜられ、まったく孤立してしまい、脂肪太りにされる家畜のように、寢床に長くなつたまま腹いっぱい食わせられて過ぐす、むなし日々）——それを医者たちから勧め

られてますます生じてくる、いろんな不安、健康にたいする絶えざる懸念、などはついに彼女をして自分のことばかり考えさせるようになった。実際、神経衰弱にたいする近代の療法くらいおかしなものはない。それは自我の一つの病気に代うるに、自我の他の病気たる自我肥大症をもつてするのである。なぜその利己心へ出血療法を行なわないのであるか？ もしくは、多すぎる血をもつていない場合には、精神的な剛健な反対療法によって、なぜその血液を頭から心へもどらせることをしないのであろうか？

ジャックリーヌは右の容態から脱した。肉体的には、前より強壮になり肥満し若返っていた——が精神的には、前よりいつそう病気になっていた。数か月の孤独な生活は、彼女をオリヴィエに結びつける思念のつながりを、最後のものまで断ち切ってしまった。オリヴィエのそばにとどまつてゐる間は、いろんな弱点を有しながらも信念のうちに確固としてとどまつてゐるその理想主義的な性格の威力を、彼女はなおこうむっていた。自分よりもしつかりしてゐる精神から隷属させられることに反抗し、自分を洞どうけん見して時とすると不本意ながらも自責の念を起こさせられるその眼つきに反抗して、彼女はいくら身をもがいても駄目だめだった。けれども、偶然にもその男から離れると——その洞どうけん察的な愛が自分の上のしかかつてくるのをもう感じなくなると——自分の身が自由になると——ただちに、二

人の間になお存していた親しい信頼に引きつづいて、彼女のうちに起こってきたものは、自分自身を相手の手中に委ねたという怨恨の情であり、もう実際に感じていない愛情の軛を長らく負っていたという憎悪の情であった……。相手に愛せられまた相手を愛してらしい女の心の中に生ずる、一徹な怨恨を、だれが説明し得よう！ 今日と明日との間にすべては一変する。前日まで彼女は、愛していたし、愛してようだったし、自分でも愛してると思っていた。しかし今日はもう愛していない。彼女が愛した男は彼女の考えの中では抹殺される。男は自分が彼女にとつてはもう無に等しいことを突然気づく。そして訳がわからなくなる。彼女のうちで行なわれていた長い間の働きを少しも見てとらなかつたのである。自分にたいして積ってきた彼女のひそかな敵意を夢にも知らなかつたのである。彼はそういう返報や憎悪の理由を感じようとはしない。その理由はたいてい遠い数多くのおぼろなものであつて——あるいは、寢所の帷の下に隠れたもの——あるいは、傷つけられた自尊心、気づかれ批判された心の秘密——あるいは……彼女自身にさえよくわからない、いろんなものである。知らず知らずなされたものでしかも彼女がけつして許し得ないほどの、ある隠れた侮辱が世にはある。男にはそれがどうしてもわからないし、女自身にもよくわかつてはいない。しかしその侮辱は彼女の肉体の中に刻みつけられる。彼女

の肉体はけつしてそれを忘れない。

愛情を流し去るこの恐るべき力にたいして戦うことは、オリヴィエとはまったく異なった性質の男でなければできないのだった——もつと自然に近く、もつと単純であるとも、に撓たわみやすく、感傷的な懸念に煩わされず、本能に富み、必要に応じては理性が認めない行動をもなし得るような男でなければ、できないのだった。ところがオリヴィエは前もつて打ち負け落胆していた。彼はあまりに明敏だったので、ジャックリーヌのうちに、その意志よりも強い遺伝性があるのを、母親の魂がふたたび現われてきてるのを、長い前から認めていた。彼女がその種族の奥底に石のようころがり落ちるのを、彼は見てとつていた。そして弱くかつ拙劣だったので、いくら骨折つてもますます彼女の墜落を早めるばかりだった。彼は静平にしていようとつとめた。しかし彼女は無意識的な考慮をめぐらして、彼を軽蔑けいべつすべき理由を得んがために、その静平から脱せさせんとし、乱暴な激しい卑しいことを言わせようとした。もし彼が怒れば、彼女は彼を軽蔑した。もし彼がそのあとできまり悪がつて恥ずかしい様子をすれば、彼女はいつそう彼を軽蔑した。また彼がもし怒らなければ、怒ろうとしなければ——こんどは、彼女は彼を憎んだ。そしてもつともいけないのは、顔をつき合わせながら幾日も黙り込んでることだった。人を窒息させ狂乱させ

るような沈黙で、それに浸つているともつともやさしい者でさえも、ついには狂暴になつてきて、害したり怒鳴ったり怒鳴らしたりしたい欲求をときどき覚えるものである。そういう沈黙では、まっ暗な沈黙では、愛もまったく分散してしまい、人はあたかも天体のように、各自に自分の軌道に従つて、暗黒の中に没してゆく。……ジャックリーヌとオリヴィエとは、たがいに接近するためになす事柄までがすべて疎隔の原因となるまでに、立ち至つてしまった。彼らの生活は堪えがたいものとなつた。そしてある偶然の事柄がその情況を急進させた。

一年ほど前から、セシル・フルーリーがしばしばジャンナン家を訪れてきた。オリヴィエはクリストフのところと彼女に会い、それからジャックリーヌが彼女を招待した。そしてセシルは、クリストフが彼らと別れてから後も、なお引きつづいて彼らに会つていた。ジャックリーヌはセシルに親切だった。彼女自身は音楽家でもなければ、またセシルをやや平凡な女だと思つたけれど、セシルの歌と和やかな感化なごとに心ひかれたのだった。オリヴィエは彼女といつしよに音楽をひくのを楽しみとした。しだいに彼女は家庭の友となつていった。彼女は信頼の念を起こした。彼女が打ち解けた眼と、健康な様子と、聞くも愉快なやや太い善良な笑い声とで、ジャンナン家の客間にはいつてくると、あたかも霧の

なかに一条の日の光がさし込んだようなものだった。オリヴィエとジャックリーヌとはある慰安を心を感じた。彼女が帰ってゆくときには、彼らはこう言いたかった。

「いてください、もつといてください。寂しいから。」

ジャックリーヌの不在中に、オリヴィエはいつそうしばしばセシルに会った。そして彼は自分の悩みを幾分か彼女に隠し得なかった。弱いやさしい魂が、息苦しさを覚えて、胸の中を打ち明けたくなり、身を投げ出してゆくような、無分別な放心さで、彼は悩みをもちらした。セシルは心を動かされた。母親めいたやさしい言葉をかけてくれた。彼女は彼ら二人を気の毒に思った。気を落としてはいけないとオリヴィエに勧めた。けれども彼女は、そういう打ち明け話に彼よりもいつそう気兼ねしだしたのか、あるいはまた何か他の理由でか、いろんな口実を設けて前ほどは来なくなつた。おそらく彼女は、ジャックリーヌにたいして誠実な振る舞いではないと思ひ、それらの秘密を知る権利は自分にないと思つたのだろう。少なくともオリヴィエは、彼女の遠のいた理由をそういうふうに解釈した。そして彼は彼女の行為を是認した。なぜなら、打ち明けたことをみずからとがめていたから。しかし彼女が遠のいたことによつて彼は、自分にとってセシルはどういう者であつたかを感した。彼は自分の考えを彼女に分かつ習慣がついていた。彼女一人が圧倒してくる苦し

みから彼を解放してくれるのだった。彼は自分の感情を読み取ることに通じていたので、今この感情にいかなる名前を与うべきかを迷わなかった。彼はその感情についてセシルへはなんとも言わなかった。しかし、自分が感じていることを自分のために書きたいという要求には逆らい得なかった。彼は少し以前から、紙の上で自分の考えと話を交えるという危険な習慣に、ふたたび立ちもどっていた。恋愛の間はそれから脱していたが、今や孤独の自分を見出すと、その遺伝的な習癖にふたたびとらわれたのだった。それは苦しいおりの慰安であり、また自己解剖をする芸術家としてやむにやまれぬことだった。かくて彼は、あたかもセシルに語るようにして、しかもセシルに読まれることがないからいつそう自由に、自分自身を描写し、自分の苦しみを書きしるした。

ところが偶然にも、その文章がジャックリーヌの眼に触れることとなった。その日ちようど彼女は、幾年来になくもつともオリヴィエに近づいてる気がしていた。戸棚とだなを片付けながら、彼からもらった古い恋の手紙を読み返した。涙が出るほど心打たれた。戸棚の影にすわって、片付け物を終えることができずに、過去のことを思い浮かべた。その過去を破壊したのが痛切に悔いられた。オリヴィエの苦しみのことも考えた。かつて彼女はそういう考えを平気で見守ることはできなかつたのである。彼女は彼を忘れることはできた。

しかし自分のせいで彼が苦しんでるといふ考えを堪えることはできなかつた。彼女は胸さける思いをした。彼の腕の中に身を投げ出して言いたかつた。

「ああ、オリヴィエ、オリヴィエ、私たちはなんといいことをしたのでしよう。私たちは狂人だわ、狂人だわ。もう苦しめ合うことはやめましようね！」

もしそのとき、彼が帰つて来たら……。

ちようどそのとき、彼女は手紙の文章を見出した……万事終わつた。——彼女はオリヴィエから實際欺かれたと思つたろうか？ おそらく思つたろう。しかしそれだけならば構わない。裏切りは彼女にとつては、行為においてなら意志におけるほど重大ではなかつた。ひそかに心を他の女に与えることよりも情婦をもつことのほうを、彼女はいつそう容易に愛する男に許し得たろう。それは道理もつともなことであつた。

「おかしなことだ！」とある人々は言うだろう——（けれどそれこそ、愛の裏切りが完成されたときにしかそれを苦しまない憐あわれな者どもである……。心が忠実である間は、肉体の汚れなどは大したことではない。一度心が裏切つた場合には、その他のことはもう駄目になつてしまうのだ。）

ジャックリーヌはふたたびオリヴィエを自分のものにしようとは寸時も思わなかつた。

もうおそすぎた。彼女はもう彼を十分愛していなかった。もしくは、あまりに愛してたのかもしれない……。彼女が感じたのは嫉妬しつとではなかった。信頼しんらいの念がごとく崩壊し、彼女の内心に残っている彼への信念と希望とがごとく、崩壊したのだった。彼女自身こそ彼を馬鹿にしたのだということ、彼女が彼を落胆さしてそういう愛にはしらしたこと、そしてその愛は純潔なものであること、要するに愛してもしくは愛しないのは人間の自由になるものではないこと、などを彼女は考えてみなかった。その感傷的な誘引を、クリストフと自分との艶事つやごとに比較することなどは、彼女の頭に浮かびもしなかった。クリストフといえば、彼女は少しも愛してのではなかったし、物の数ともしていなかったのである。彼女はその情熱的な誇張のために、オリヴィエから欺かれたと考え、自分はもうオリヴィエにとつてはなきに等しいのだと考えた。最後の支持が、ちょうどそれをつかもうと手を差し出したときに、なくなってしまったのである……。万事終わった。

オリヴィエは、その日彼女がいかに苦しんだかを、まったく知らなかった。しかし彼女と顔を合わせたとき、彼もまた万事終わったという気がした。

それ以来二人は、他人の前にいるときしかたがい口をきかなかつた。あたかも狩りたてられて用心し恐れている二匹の獣のように、彼らはたがいに観察し合った。ジエレミア

ス・ゴットヘルフは、もう愛し合わなくてたがいに監視し合つてる夫婦の痛ましい状態を、無慈悲な質しつぱく朴くさで描えがいている。その二人はおのおの相手の健康をうかがい、病気の徴候を待ち受けており、しかも相手の死を早めようと考かんえてるのではなく、また相手の死をねがつてるのでもないが、ただ不慮の事變を待ち望のぞむようになり、そしてたがいに自分のほうが頑がん丈じょうだと喜よろこんでるのである。ジャックリーヌとオリヴィエとはときどき、それに似た考かんえを相手がいだいてるように想像することがあつた。がどちらも實際さういう考かんえをいだいてはしなかつた。とは言いえ、相手にさういう考かんえがあるように思おもうだけでも、よくのことである。たとえばジャックリーヌは、夜中に幻覚的な不眠に襲襲われるとき、相手のほうが自分より強つよくて、自分をしだいに磨すりへらしてゆき、やがて自分を打ち負まかしてしままうだらうと思おもつた……。狂くるいたつた想像と心との奇怪な幻覚である。——しかも、彼らは心の底ではもつともよき部分で愛し合つてたことを、考かんえてみれば……。

オリヴィエはその重荷に堪たえかねて、もう戦たたかおうともせず、わきに身を避よけて、ジャックリーヌの魂たまを勝手な方向に進すすましておいた。彼女は一人放任ほう任せ、嚮きやう導どう者がなくなつて、自分の自由じゆうさに眩げん惑わくした。彼女には反抗はんしてぶつかつてゆくべき主人しゆじんが必要ひつやうだつた。それがない場合ばあいには造つくり出ださなければならなかつた。そして、彼女は自分の固定観念こていがん

の捕虜とりことなった。これまで彼女は、いかに苦しんだとは言え、オリヴィエと別れることわかつて頭に浮かべはしなかった。がこのときから彼女は、あらゆる絆きずなから脱したと思った。彼女は恋しなかった。あまり遅れないうちに恋したかった。——（まだ若かったけれども、もう年老いてると自分では思っていたのである。）——彼女は恋した。空想的な痛烈な情熱を知った。その情熱こそ、なんでも出合い頭がしちのものに、ちよつと見た顔に、ある名前に、時とすると単なる名前に、すぐ執着し、それをつかみ取ったあとには、もう手をゆるめようともせず、一度選んだその対象物なしにはもう済ませないことを、人の心に信じさせ、心全体を食い荒らし、他の愛情や、道德觀念や、追憶や、自負の念や、他人にたいする敬意など、すべて心を満たして過去の事柄を、全然空に帰せしめてしまう。そして固定觀念がもはや身を養うべきものをもたずに、すべてを焼きつくしてみずからも死んでゆくときに、なんたる新しい自然がその廃墟はいきよから飛び出してくることぞ！ 好意も慈悲も若さも幻もまたない自然であつて、あたかもこわれた建築を蚕食する雑草のように、生命を蚕食することしか考えないのである。

ジャックリーヌの場合も例によつて、心を欺くにもつとも適した男へ、その固定觀念はからみついていった。憐れなジャックリーヌが惚れ込んだ男は、ある運のよいパリーの著

述家で、美しくも若くもなく、鈍重で、赭^{あか}ら顔で、擦^すれっからしで、齒は欠け、心はひどく乾^{かわ}ききつていて、そのおもな値打ちと言つては、世にもはやされてることと、多数の女を不幸な目に会わしたことであった。この男の利己心を知らなかつたとの弁解さえ、ジャツクリー又はなし得ないはずだつた。なぜなら彼はその利己心を芸術中に誇示していたから。彼は自分のしていることをよく知つていた。芸術のうちにはめ込まれた利己心は、雲雀^{ひばり}どもにたいする鏡であり、弱き者どもを妖^{まじ}わす炬火^{きよか}である。ジャツクリー又の周囲でも、多くの婦人が彼にとらえられたのだつた。ごく最近も、彼女の友の一人で結婚して間もない若い婦人が、彼のために訳なく墮落させられ、つぎには捨^{はた}てられてしまった。そういう婦人らは、口惜^{くや}しさを隠しおおせるほど巧みではなくて、側^{はた}の人々の笑い事となりはしたけれど、はなはだしい悲嘆に沈みはしなかつた。もつともひどい害をこうむつた者でも、自分一身の利害と世間的な務めとを気にして、心の乱れを常識の範囲内だけにとどめていた。彼女らは少しも騒動をひき起こしはしなかつた。夫や友人たちを欺くにしても、あるいは自分が欺かれて苦しむにしても、すべて暗黙のうちにおいてだつた。彼女らは人の噂^{うわさ}にたいしては女丈夫^{じょじょうふ}であつた。

しかしジャツクリー又は狂人だつた。彼女は自分の言つてることを実行し得るばかりで

はなく、自分のしてることを吹聴ふいちようすることもできた。彼女の無分別には、いろんな打算がなかったし、全然私心がなかった。彼女には危険な美点があつて、常に自分自身にたいして率直であり、自分の行為の結果に辟易へきえきしなかつた。彼女はその社会の他の者よりいつそうすぐれていた。それゆえにかえつていつそういけなかつた。恋したとき、姦淫かんいんの心を起こしたとき、彼女は絶望的な率直さで無我夢中にそれへ突進した。

アルノー夫人は一人で家において、ペネローペがあの名高い編み物をしてるときの落ち着きを思わせるような、逆上のほせ気味の落ち着きで編み物をしていた。そして実際ペネローペのように、彼女は夫の帰りを待つていた。アルノー氏はいつも昼間を外で過すごした。午前と午後とに授業があつた。少し跛を引いている上に学校はパリーの反対の端にあつたけれど、たいてい昼食をしに帰つてきた。その長い道を歩くのは、好きだからというよりも、または経済だからというよりも、むしろ習慣になつてたからだった。しかし日によつては、生徒に復習をしてやるために引き留められた。あるいは図書館が近所にあるのを利用して、そこへ勉強に行った。でリュシル・アルノーは、がらんとした部屋へやの中に一人でいた。八時から十時まで手荒い仕事をやりに来る家事女と、毎朝注文を聞いて品物をもって来る商

人とを除いては、だれも訪れてくる者がなかった。その建物の中には、もうだれも知人がなかった。クリストフは移転していた。リラの植わつてゐる庭には新しく来た人たちが住んでいた。セリーヌ・シャブランはオーギュスタン・エルスベルゼと結婚していた。ユリー・エルスベルゼは鉱山採掘の任を帯びて、家族を連れてスペインへ行つてゐた。老ヴェールは妻を失つて、パリーの住居にはほとんど来るこゝろがなかった。ただクリストフとその友のセシルとだけが、リュシル・アルノーとまだ交際をつづけてゐた。しかしその二人は遠くに住んでいて、毎日苦しい仕事に追われていたので、幾週間も彼女を訪ねて来ないことがあつた。彼女は自分だけを頼りにするのほかはずなかつた。

彼女は少しも退屈してはゐなかつた。自分の興味をそそるにはわずかなもので足りた。日々のちよつとした仕事。毎朝母親めいた入念さで細かい葉を洗つてやる小さな植木。灰色のおとなしい飼ひ猫ねこ。その猫は、かわいがられてゐる家畜の例にもれず、ついには彼女の様子に多少感染してきて、彼女のように一日じゅう、暖炉の隅すみやテーブルの上のランプのそばなどにうづくまつて、仕事をしてゐる彼女の指先を見守り、ときどき彼女のほうへ妙な瞳ひとみをあげてながめ、それからまた無関心な眠つきになるのだった。種々の家具もまた彼女の友となつた。どれも皆親しい顔つきをしてゐた。それをよくみがきたてたり、横のほう

についで埃ほこりをそつと拭ふいたり、きまつてる場所に注意深くすえ直したりするのが、彼女には子供らしい楽しみだつた。彼女はそれらの物と無音の話を交えた。ことに自分のもつてる唯一のりっぱな古い家具、ルイ十六世式の精巧な円筒卓に向かつて、彼女はいつも微笑ほえみかけた。それを見ると、毎日同じような喜びを覚えた。また彼女はしきりに衣装を調べた。幾時間も椅子いすの上に立つて、顔と両腕とを大きな田舎筆筒いなかだんすの中につつ込んで、ながめたり片付けたりした。すると猫は訝いぶかしそうに、幾時間も彼女の様子をながめていた。

けれども、すべての仕事を終え、一人で昼食をとまかくも済まし——（彼女はいつもあまり食欲がなかつた）——必要な用ようたし達に外へ出かけ、一日の用が済んで、四時ごろ居間に引つ込み、編み物と小猫こねことをかかえて、窓ぎわや暖炉のそばに落ち着くとき、彼女は非常にうれしかつた。時とすると何かの口実を設けて、まったく外出しないこともあつた。家に引きこもつているのが、ことに冬で雪の降つてるときには、うれしかつた。彼女自身もごくきれいな繊細な弱々しい小猫にすぎなくて、寒気や風や泥や雨などが嫌いきらだつた。商人が御用聞きに来るのをうっかり忘れるようなときには、昼食を求めに外出するよりも、食べないで家にいるほうが好ましかつた。そういう場合には、一片のチョコレートや戸棚とだなの中の果物くだものなどをかじつた。彼女はそれをアルノーへ言うのを差し控えていた。そうい

うことが彼女の怠惰だった。そして、日影の薄いその日々、また時とすると日の照り渡つた麗わしい日々——（ひっそりとした薄暗い部屋のまわりには、戸外には、青空が輝いており、街路の物音が響いていた。それはちようど、彼女の魂を取り巻いてる蜃気楼しんきろうのようだった。）——彼女は好きな片隅かたすみに座を占め、脚台に両足をのせ、編み物を手にして、指先を動かしながらも、じつと思いにふけた。そばには愛読書を一冊置いていた。たいしてそれは、イギリスの小説の翻訳である赤表紙の粗末な書物だった。彼女はほんの少ししか読まなくて、日に一章がせいぜいだった。それで膝ひざの上の書物は、長い間同じページが開かれてるままだつたし、てんで開かれていないことさえあつた。彼女は読まない先からそれを知っていた、それをぼんやり想像していた。それでデイケンズやサツカレーの長い小説は、読むに数週間かかったが、彼女はそれを数年間夢想してゐるのだった。それらの小説はしみじみとした情愛で彼女を包み込んでいた。早急に濫読する現今の人々は、いい書物をゆつくり味わうときにそれから輝き出す靈妙な力を、もはや知り得ないのである。アルノー夫人は、それら小説中の人物の生活が自分の生活と同じく現実であることを、少しも疑わなかつた。彼女が自分の一身をささげたく思うような人物もあつた。母親と乙女おとめとの心をそなえてひそかに恋に燃えている、嫉み深いまたやさしいキャスルウッド夫人は、

彼女にとっては姉妹のように思われた。小さなドンビーは、自分のかわいい息子むすこのように思われた。死にかかつてる世間知らずの細君ドラ―は、自分自身のように思われた。善良な純潔な眼で世をながめてゆくそれら童心の魂たちのほうへ、彼女は両手を差し出した。そして彼女の周囲には、おかしなまたいじらしい空想を追っかけてる、愛すべき貧民やおとなしい恋人の行列が、通りすぎていった――そして、自分の夢を笑いまた泣いてる善良なデイケنزのやさしい天才が、その先頭に立っていた。ちようどそういうとき、彼女が窓から外をながめると、この空想世界の親愛な人物や獐どうもう猛な人物が、通行人のうちに見とられた。人家の壁の向こうに、同じような生活があるのが推察された。彼女が外出を好まないというのも、神秘に満ちてるその世界を恐れてるからだ。彼女は自分のまわりに、悲劇が隠れていたり喜劇が演ぜられていたりするのを気づいていた。そしてそれはいつも幻影ばかりではなかった。彼女は孤独な生活をしてるうちに、ある神秘的直覚の才能を得ていたので、通りすがりの人々の眼つきを見ても、その中に、往々彼ら自身も気づかないでいる過去や未来の彼らの生活の秘密を、読みとることができた。そしてそれらの真実な幻像は、彼女にあつては、架空的な追憶が加わるために変形されてしまった。彼女はそういう広漠こうばくたる世界のうちにおぼれる気がした。しっかりした足がかりを得るため

に家へもどらなければならなかった。

けれども、他人を見たりその心中を読みとったりする必要が、なんで彼女にあったろう？ 彼女はただ自分自身の内部をながめるだけで十分だった。外部から見たところでは光のない蒼白あおしろい彼女の存在も、内部においてはいかに光り輝いてたことだろう！ なんと
いう充実した生活だったろう！ 人が夢にも知らないほどの、なんとというたくさんの追憶が、宝が、あつたことだろう！……そしてそれらのものは、かつて多少の現実性を有したことがあるか——もちろんある。それらは現実だったのだ。なぜなら彼女にとって現実だったから……。おう、夢想の魔法杖つえに変容させられる憐れあわな生活よ！

アルノー夫人は長い歳月をさかのぼって、幼年時代までも思い起こしていた。消え失うせた希望のかよわい小さな花までが、一つ一つひそかに咲き返った……。ある少女にたいする幼い初恋。彼女はその娘を一目見たときからもう魅惑されたのだった。この上もなく純潔なおりの恋愛とも言えるもので、彼女はその娘を愛した。その娘から触さわられるのを感じると、息がつまるほど感動した。その娘の足に接せつ吻ぶんし、その娘の愛子となり、またその娘と結婚したかった。がその偶像は、やがて結婚し、幸福な目にも会わず、子供を一人もち、その子供も死に、自分も死んでしまった……。また十二歳のころ、同年配の他の娘に

たいする恋。その娘はいつも彼女をいじめてばかりいた。悪^{いたずら}戲^{いたずら}な快活な金髪の娘で、彼女を泣かすのを面白がり、泣かしたあとではやたらに接吻してくれた。二人はいつしよに、架空的な未来の計画をいろいろたてていた。がその友は、なぜか突然に、カルメル会の尼となつてしまった。幸福に暮らしているそうだった……。つぎには、ずっと年上のある男にたいする深い情熱。この情熱についてはだれも知らなかったし、当の男でさえもそれを知らなかった。しかし彼女はそこで、献身の熱誠を、情愛のいろんな宝を、費やしたのだつた……。それから、なおも一つの情熱、こんどは向こうから彼女を愛していた。しかし彼女は、妙な臆^{おくびよう}病^{びよう}さのために、自信の念の乏しさのために、愛せられてるのを信ずることもできなかつたし、愛してる様子を示すこともできなかつた。そして幸福は、つかまれずに過ぎ去つてしまった……。つぎには……。しかし、自分だけにしか意味のない事柄を他人に語つたとてなんの役にたとう？ 彼女には深い意味をもたらしたのも、実際はいろんなつまらない事柄ばかりだった。友が払ってくれた注意、オリヴィエがなんの気もな^よく言つたやさしい一言、クリストフの親切な訪問、彼の音楽が喚^よび起こしてくれた楽しい世界、見知らぬ人の一瞥^{べつ}など。この正直な純潔なりっぱな女である彼女のうちにも、ある知らず知らずの不実な考えがあるのだつた。彼女はそれに心乱され、それを恥ずかしく思

い、わずかに避けていたが、それでもやはり——罪のないことなので——そのために多少心を輝かされた……。彼女は夫を深く愛していた。夫は彼女の夢想どおりの人ではなかったけれども、至つて善良だった。ある日彼は彼女に言った。

「ねえお前、お前が私にとつてどんなものであるかは、お前にはわかるまい。お前は私の生活のすべてなのだ……。」

彼女の心はすっかり解けたのだった。その日彼女は、永久にすっかり彼と結合した心地がした。そして二人は年ごとにますます密接に結びついた。いっしょに美^{うつく}わしい夢想を描いた。仕事や旅行や子供の夢想だった。そしてそれはどうなったか？……悲しいかな！……でもアルノー夫人はやはり夢想をつづけていた。夢想の中に一人の子供がいた。彼女はその子供のことを、あまりにしばしばあまりに深く考えたので、実際そこにいるかのようによく知っていた。幾年となくそのほうへ考えを向けて、自分の見たもつとも美しいものや自分の愛したもつともかわいいもので、たえずそれを飾りたてていた……。そして、沈黙！……

それがすべてだった。それが彼女の世界だった。ああいかに多くの人知れぬ悲劇が、もつとも深い悲劇さえもが、外観は至つて静穏平凡な生活の奥に、隠れていることであろう

！　そしておそらくもつとも悲壯なのは、それら希望の生活のうちに、何事も起こらないということである——自分の権利であるところのものに向かつて、自然から約束されそして拒まれた自分の所有物であるところのものに向かつて、絶望的な叫びをあげ——熱烈な苦悩のうちに身をさいなみ——しかも外部にその様子を少しも示さない——それら希望の生活のうちに、何事も起こらないということである。

アルノー夫人は自分の幸福のために、自分のことばかりに没頭してはなかつた。彼女の生活は、彼女の夢想の一部をしか満たしてはなかつた。彼女はなお、今知つてゐる人々や昔知つた人々の生活をも、みずから生活してゐた。それらの人々の地位に身を置いていた。クリストフのことを考え、友のセシルのことを考えていた。今日も彼女はセシルのことを考えていた。二人はたがいに愛情をいだいていた。不思議なことには、二人のうちの強健なセシルのほうがいっそう、かよいアルノー夫人によりかかりたがっていた。この快活な丈夫な大きな娘は、実は、見かけほど強くはなかつた。彼女はちょうど危機を通じていた。もつとも沈着な心の人でさえ、意外な羽目に陥ることがある。彼女のうちにはごくやさしい一つの感情がはいり込んでいた。彼女は初めそれを認めたくなかつた。しかしそれはしだいに大きくなつてきて、眼に留めないわけにゆかなくなつた——彼女はオリ

ヴィエを愛してゐるのだつた。その若者の静かなやさしい振る舞い、その身体つきのやや女性的な美^{うる}わしき、その弱々しい信賴的な性質、などはすぐに彼女をひきつけたのだつた。

——（母性的な性格は自分を頼りにする者からひきつけられる。）——その後彼女は、オリヴィエの夫婦生活の苦しみを知つたために、危険な憐^{あわ}れみの念を彼にたいして起こした。もちろんそういう理由ばかりではなかつた。一人の者が他の者に熱中する理由を、だれがすつかり言い得よう？ どちらもなんでもないことがしばしばである。そのときの場合によるのであつて、用心していない人の心は、途上に横たわつてゐる最初の愛情に、ふいに引き渡されてしまうことがある。——セシルは、もはや自分の愛に疑いの余地がなくなると、その愛を罪深い不条理なものだと考えて、それを抜き去ろうと勇ましく努力した。彼女は長くみずから自分を苦しめた。心の傷を癒^いやすことができなかつた。だれも彼女の心中に起こつてゐる事柄を気づかなかつた。彼女は幸福な様子を雄々しくも装つていた。ただアルノ——夫人だけがその苦しみを察していた。セシルはやつて来ては、彼女の花^{きゃしや}車な胸に、首筋の頑^{がん}丈^{じやう}なその頭をもたせかけた。そして黙つて涙を流し、彼女を抱擁し、それから笑いながら歸つていった。そのかよわい友にたいして、セシルは深い尊敬をいだいていた。この友のうちに彼女は、ある精神的な力と自分の信念よりもすぐれた信念とを、見出して

いた。彼女は心中を打ち明けはしなかった。しかしアルノー夫人は、片言隻語で察知することができた。ただ彼女にとつては、世の中は悲しい誤解ばかりのように思われた。そしてその誤解をとくことは不可能であつた。人はただ愛し憐れみ夢想することができるばかりである。

そして、夢想の群れが心の中であまりに騒々しく飛び回るとき、頭がふらふらするとき、彼女はピアノについて、低音の鍵キにとりとめもなく指を触れながら、音響の和なごやかな光明で、生活の迷夢を包み込むのであつた……。

しかしこの善良な可憐な女は、日々の務めの時間を忘れはしなかった。アルノーが家にもどつてくると、燈火はともされ、食事の支度はできていて、妻の蒼あおしろ白いにこやかな顔が待つていた。そして自分の不在中、彼女がどういふ世界に生きてたかを、彼は少しも気づかなかつた。

困難なのは、二つの生活を衝突させずにいっしょに維持してゆくことだつた。日常生活と、遠い地平線をもつてゐる大なる精神生活。その二つを維持するのはいつも容易なことではなかつた。幸いなことにアルノーもまた、書物のうちに、芸術作品のうちに、半ば空想的な生活をしていた。その永遠の火によつて、揺らめいてゐる魂の炎が支持されていた。し

かしこの数年間彼は、職務上のいろんな煩わしい些事さじや、同僚または生徒との間の不正や不公平や不愉快などから、しだいに多く心を奪われていった。彼は氣むずかしくなった。政治を談じ始め、政府やユダヤ人をのしり始めた。自分が大学教授の地位を得られなくなったのは、ドレフユースのせいだとした。彼のそういう苦にが々しい気分は、アルノー夫人へも多少伝わった。彼女は四十歳近くなっていた。生活力が乱されて平衡を求める年齢だった。彼女の思想のうちには大なる亀裂きれつが生じた。しばらくの間、彼らは二人とも生存の理由をすべて失った。なぜなら彼らは、その蜘蛛くもの巣を張るべき場所をもはやもたなかったのだから。いかに弱い現実の支持であろうとも、その一つが夢想には必要である。ところが彼らにはなんらの支持もなかった。彼らはもうたがいにささえ合うことができなかつた。彼は彼女を助けないで、彼女にすがりついてきた。そして彼女のほうでは、彼をささええるだけの力が自分にないことを知った。するともう彼女は自分を支持することもできなかつた、ただ奇跡によつてなら救われるかもしれないなかつた。彼女は奇跡を呼び求めている……。

奇跡は魂の深みからやつて来た。否応なしに創造したいという崇高な無法な欲求、否応なしに自分の蜘蛛くもの巣を空間に織り出したという欲求が、孤独な心から湧わき出てくるの

を彼女は感じた。それはただ織り出す喜びのためにばかりであって、自分がどこに運ばれてゆくかは、風のままに、神の息吹いぶきのままに、うち任せたのだった。そして神の息吹きは、彼女をふたたび生活に結びつけ、眼に見えない支持を彼女に見出さしてやった。そこで夫妻は二人とも、空想のりっぱな無益な蜘蛛の巣を、ふたたび気長に織り出し始めた。それは彼らの血液のもっとも純潔なもので作られたのだった。

アルノー夫人は一人で家にいた……日は暮れかかっていた。

訪問の鈴りんが鳴った。アルノー夫人はいつもより早く夢想から呼び覚さまされて、ぞつと身震いをした。丁寧ていねいに編み物を片付けて、立つて行って扉とびらを開いた。クリストフがはいって来た。彼はひどく感動していた。彼女はやさしく彼の手をとった。

「どうなすったの？」と彼女は尋ねた。

「あの、オリヴィエがもどって来たんです。」と彼は言った。

「もどっていらして？」

「今朝やって来ました。『クリストフ、助けてくれ!』と言うんです。僕は抱擁してやりました。泣いていました。『僕にはもう君だけだ、彼女は行ってしまった、』と彼は言い

ました。」

アルノー夫人はびっくりして、両手を握り合わせて言った。

「まあ不仕合わせなお二人ですこと！」

「彼女は行ってしまったんです、」とクリストフはくり返した、「情夫といっしよに。」

「そしてお子さんは？」とアルノー夫人は尋ねた。

「夫も子供も置きざりです。」

「まあ不仕合わせな女ひとですこと！」とアルノー夫人はまた言った。

「オリヴィエは彼女を愛していました、」とクリストフは言った、「彼女だけを愛しているんです。もうその打撃からふたたび起たち上がることはできません。『クリストフ、僕は彼女から裏切られた……僕のいちばんよい友から裏切られた、』とくり返し言うんです。僕は言っただけです。『君を裏切った以上は、彼女はもう君の友ではないのだ。君の敵なのだ。忘れてしまえよ、そうでなければ殺してしまえよ。』とそう言っても、甲斐かいがないんです。」

「ああ、クリストフさん、何をおっしゃるんです！　あまりひどいことじゃありませんか。」

「ええ、それは僕にもわかっていきます、あなたがたには殺すということが、歴史以前の野蛮行為のように思われるでしょう。このパリーのきれいな人たちは、おす牡が自分を裏切った^{めす}牝を殺そうとする畜生的な本能にたいして、いろいろ抗弁して、寛大な理性を説くんですね。なるほどりっぱな使徒です！ この雑種の犬どもの群れが、動物性への逆転を憤るのは、実にりっぱな見物ですよ。彼らは生活を侮ったあとに、生活からその価値をすべて奪い去ったあとに、宗教的な崇拜で生活を包むのです……。心情も名誉もない生活、単なる物質、一片の肉体の中の血液の鼓動、そんなものが彼らには尊敬に催するのだと考えるのでしよう。すると彼らはあの肉屋の肉にたいして、十分敬意を払っていませんね。それに手を触れるのは一つの悪罪でしょう。魂を殺すなら殺すがいい、しかし身体は神聖なものだとも……。」

「魂を殺すのはもつとも悪い殺害です。けれども、罪は罪を許しません。あなたもそのことはよく御存じでしょう。」

「知っています。あなたの言われることは道理です。僕はよく考えもせずには言ってるのです……。けれど、おそらく僕はそのとおりのことをやりかねないんです。」

「いいえ、あなたは自分で自分をけなしていらっしやるのですよ。あなたはいいい人ですも

の。」

「僕は熱情に駆られると、やはり他人に劣らず残酷になります。ねえ、僕は先刻さつきどんなにか怒おこつてたでしょう！……自分の愛する友人が泣くのを見ては、彼を泣かしてゐる者をどうして憎まずにいられますよう？ 子供をも見捨てて情夫のあとを追っかけていった浅ましい女にたいしては、いくら苛酷かこくにしてやつてもまだ足りないではないでしょうか。」

「そんなふうにおつしやるものではありません、クリストフさん。あなたにはよくわからないのです。」

「えッ！ あなたはあの女の肩をもたれるのですか。」

「私はあの女ひとをお気の毒に思います。」

「僕は苦しんでゐる人たちをこそ気の毒だと思つてゐます。人を苦しめる奴やつらを気の毒だとは思いません。」

「じゃああなたは、あの女ひともやはり苦しんだとはお考えになりませんか。単に浮氣のせい
で、子供を捨てたり生活を破壊したりされたのだと、お思いになりますの。あの女ひと自身の
生活も破壊されたわけではありませんか。私はあの女ひとをあまりよくは知りません。お目にか
かったのも二度きりで、それもほんのついでにだったんです。私に親しい言葉もおかけに

なりませんでしたが、同情ももっていられませんでしたが。それでも私は、あなたよりもよくあの女の心を知っています。悪い方でないことを確かに知っています。かわいそうな方ですわ。あの女の心中にどういことが起こったか、私には察しられます……。」

「りつばな正しい生活をしていられるあなたに！……」

「ええ私に。あなたにはわからないのです。あなたはいい方だけれど、男ですもの。やさしくはあつても、みんな男の人と同じように、やはり頑固がんこなのです——自分以外のものには少しも察しがないのです。あなたがた男の人は、自分のそばにいる女の心を、夢にも御存じありません。自己流に女を愛してはいらつしても、少しも女を理解しようとはされません。たやすく自分だけに満足していられるのです。あなたがたは私たち女のことを知っていると思い込んでいられますけれど……ああ、私たちにとつては、あなたがたから少しも愛せられていないということではなく、どんなふうにも愛せられてるかということ、私たちをもっともよく愛してる人たちにとつて私たちがなんであるかということ、それを見るのが時としてはどんなに苦しいか、あなたがたに知っていただけさえしましたら！ クリストフさん、時によりますと、『愛してくださいますな、愛してくださいますな、こんなふうに愛してくださいますよりも、他のことのほうがどんなことでもまだよろしいのです、』と

いう叫び声を押えるためには、爪つめが手のひらにくい入るほど拳こぶしを握りしめて我慢しなければならぬことでもあります……。あなたはある詩人のこういう言葉を御存じですか。『自分の家においてさえも、子供たちの間においてさえも、女は虚偽の名譽にとり巻かれ、極悪な悲惨よりもはるかに重い軽蔑けいべつを堪え忍ぶ。』そのことを考えてごらんさい、クリストフさん……。」

「驚いたことを言われますね。僕にはよくのみ込めません。けれどなんだか少しは……ではあなた自身も……。」

「私はそういう苦しみを知りました。」

「ほんとうですか？……だがそんなことはどうでもいいです。あなたがあの女と同じようなことをされようとは、僕にはけつして信じられません。」

「私には子供がありませんよ、クリストフさん。あの女の身ひとになったらどんなことをしたかわかるものですか。」

「いいえ、そんなことはありません。僕はあなたを信じています。あなたを尊敬しすぎてるくらいです。そんなことはない僕が誓います。」

「誓えるものではありません。私もあの女ひとと同じようなことをしかかったことがあります

……。あなたからよく思っていたのを打ちこわすのは、心苦しいことですが、あなたも、誤った考えをいただくまいと望まれるなら、私たち女のことを少しお知りにならなければいけません。——まったくです、私はあの女ひとと同じような馬鹿げたことを危うくするところでした。そして私がそれをしなかったのも、多少はあなたのおかげです。ちょうど二年前のことでした。私はそのころ、悲しみに身を嘔かまれるような心地がしていました。いつもこう考えていました、私はなんの役にもたたない、だれも私に注意をしてはくれない、だれも私を必要としてはいない、夫さえも私なしで済ましてゆけるだろう、私が生きたのも無駄むだであった……。そして私は逃げ出そうとしました、なんだか馬鹿げたことをしようと思いました。あなたのところへ上がって行きました……。覚えていらっしやいますか？……。あなたはなんで私がやって来たのかおわかりになりませんでした。私はお別れにまいったのでした……。それから、どんなことになったか私は存じません。どんなことをあなたがおっしゃったか知りません。もうはつきり思い出せないのです……。けれどもたしかに、あなたに何か言われました……。(御自分ではお気もつかれなかったのでしょうが)……。その言葉が私にとっては一筋の光明でした……。まったくその瞬間には、ほんのわずかなことで、私は駄目になるか救われるかする場合だったのです……。私はあなた

のところから出て、自分の室に帰り、閉じこもって、一日じゆう泣きました……。それからはずっかりよくなりました。危機は通り過ぎてしまったのです。」

「そして今では、」とクリストフは尋ねた、「それを後悔していらっしやるのですか。」
 「今ですって？」と彼女は言った。「ああもしそんな馬鹿な真似まねをしていましたら、私はもうとつくにセーヌ河がわの底にでも沈んでるでしょう。私はその不名誉を忍びきれなかったでしょう、気の毒な夫にかけた苦しみを忍びきれなかったでしょう。」

「ではあなたは幸福なんですね。」

「ええ、この世で人が幸福になり得られるだけの程度には。まったくのところ、おたがいに理解し合い尊重し合つて、おたがいに信じてることをよく知つてる夫婦というものは、世にはめつたにありません。それも、多くは幻にすぎない単なる愛の信念からではなくて、いっしよに過ごした長年の経験から、陰鬱いんうつな平凡な長年の経験から、そうなったのでして、打ち勝つてきたいろんな危険の思い出がありながらも——いえ、ことにその思い出があるのです、いっそうそうなつてゆくのです。そして年取るに従つて、それはますますよくなつてゆくものなんです。」

彼女は口をつぐんだ、そして突然顔を赧あかくした。

「まあ、私はどうしてこんなことをお話したのでしよう？……どうしたのでしよう？……お忘れになつてくさいね、クリストフさん、お願いですから。だれにも知られてはいけないことなんです……。」

「御心配には及びません。」とクリストフは彼女の手を握りしめながら言った。「それは神聖なことですから。」

アルノー夫人は話したのを悔いて、ちよつとためらつた。それから言った。

「お話してはいけなかつたのですけれど……でも、ただ私はあなたに見せてあげたかつたのです。よく一致してゐる家庭のうちにも、女……クリストフさん、あなたが尊重していただけるような女たちのうちにも、あるときには、あなたがおっしゃるような心の迷いばかりではなく、真実な堪えがたい苦しみがあるものです。その苦しみは、人を馬鹿げた行ないに導いて、一つの生活を、二つの生活をも、破壊してしまふものです。あまりきびしい判断をしてはいけません。人はもつとも深く愛し合つてるときでさえ、たがいに苦しめ合うものなんです。」

「それでは、各自別々に生きなければならぬのでしょうか。」

「そんなことは、私たち女にとってはなおさらいけないのです。一人で暮らして男のよう

に（そしてたいはいは男にたいして）戦わなければならぬ女の生活は、そういう思想に適していないこの社会では、そして大部分そういう思想に反対してこの社会では、恐ろしいことなんです……。」

彼女は黙り込んで、身体を軽く前にかがめ、暖炉の炎に眼をすえていた。それからまた、やや曇った声で静かに言い出した。ときどき言いよんだり、言いやめたりしたが、また言いつづけるのだった。

「けれども、それは女のせいではありません。女がそういう生活をする場合には、気まぐれでするのではなくて、やむを得ずするのです。パンをかせぎ出さなければなりませんし、男なしで済ましてゆくことを覚えなければなりません。なぜなら、女は貧乏なときには、男から求められないものですから。そして女は孤独な生活を強いられ、しかもその孤独からなんの利益も得はしません。というのは、男のように無邪気に自分の独立を楽しんできますと、きつと醜聞をこうむるのですから。何もかも女には禁ぜられています。——私のお友だちに、地方で中等教員をしてる女が一人あります。たとい空気の通わない牢屋ろうやの中に閉じこめられても、これほど孤独で息苦しくはないだろうと言っています。中流社会の人たちは、自分で働いて生活しようとしてとめる、こういう女たちに向かって、戸を閉ざし

てしまいます。彼らは疑い深い軽蔑けいべつの念を投げかけます。彼女たちのちよつとした行ないもみな、悪意ある眼でながめられます。男子の学校の同僚たちは、町の陰口を恐れてか、あるいはひそかな反感か粗野な気質からか、彼女たちを常にのけものにして、珈琲店に入りびたつて淫みだらな話にふけつたり、一日の仕事に疲れはてていたり、知識階級の女に飽き飽きして嫌悪けんおの念をいだいたりしています。そして彼女たちも、もう辛抱ができなくなります。ことに学校にいつしよに住まわせられるときにそうです。彼女たちの若いやさしい魂は、その無味乾燥な職業と非人間的な孤独の生活とをしていると、間もなく落胆させられてしまいますが、校長はたいいの場合、そういう魂をほとんど理解しません。彼女たちを助けようとしてもしないで、人知れず悶もだえるまま放っておきます。高慢な人たちだと考えるのです。そしてだれも彼女たちに同情する者はありません。財産と手蔓てづるとがないので、彼女たちは結婚することもできません。働くことに追われてばかりいるので、知的生活を営んでそれに愛着し慰められることもできません。宗教的なあるいは道徳的な特別な感情——（私は異状の病的な感情とも言いたいくらいです、なぜなら、全然自分をささげてしまふというものは自然ではありませんから）——そういうある感情から、右のような生存が支持されないおりには、それは生きながらの死と同じです。——精神を働かすことがな

いからというので、慈善をやってみたところで、それが女に何かの助けをもたらすでしょうか。公の慈善や世間並みの慈善、博愛的な談話会、軽薄や親切やお役所風などが変に混ざり合ったやり方、情事の合い間に困窮を相手にしてしゃべり散らすふざけたやり方、そんなことで満足するにはあまりに真面目な魂をもっている女たちは、慈善ということからどんなに多くの苦い味をなめさせられることでしょうか！ もしそれに嫌気を起こして無謀にも、単に聞きかじつただけの困窮のまん中へ一人で飛び込んでゆくとしましたら、まあなんとという光景に出会うことでしょうか！ ほとんど我慢できない光景です。それはまったく地獄です。それを救うために何ができましょう？ 彼女自身その不幸の海のなかにおぼれてしまいます。それでもなお戦って、幾人かの不幸な人たちを救おうとつとめ、その人たちのために自分を疲らしてしまい、いっしょにおぼれるだけのことです。一人か二人かを救い得るとしたら、この上もない幸いです。けれども、その彼女のほうは、だれが救ってくれるでしょうか。だれが彼女を救おうと気をもんでくれるでしょうか。彼女自身が、他人や自分のあらゆる苦しみを苦しんでではありませんか。彼女は他人に信仰を与えるに従って、自分には信仰が少なくなりません。悲惨な人たちはみな彼女に必死としがみついできます。そして彼女は何にもすがれるものをもちません。だれも彼女に手を差し出しては

くれません。そして時とすると、石を投げられることさえあります……。クリストフさん、あなたも御存じでしょう、もつとも謙遜けんそんなもつとも価値のある慈善事業に一身をささげたあの感心な婦人を。彼女は、子供を産んだ宿なしの売笑婦たちを、貧民救助会から顧みられもしないし、また向こうでもそれを恐れる不幸な女たちを、自分の家に引き取りました。そして、彼女たちを肉体的にも精神的にも癒いしてやろうとつとめ、子供といっしょに引き留めようとつとめ、母親の感情を呼び覚さましてやろうとつとめ、一つの家庭を、正直に働く生活を、立て直してやろうとつとめました。けれども彼女は、悲しみや苦しみに満ちてるその陰鬱いんうつな仕事にたいして、十分の力をもってはしませんでした。——（救ったのはごくわずかな人数です。救われることを願ったのはごくわずかな人数です。それにどの子供もみな死んでしまいます。罪のない子供ですが、生まれながら不幸な運命になつてるのです……。）——そして、他人の苦しみをすべて一身に引き受けたその婦人が、人間の利己心の罪をみずから進んで贖あがなったその潔きよい婦人が、クリストフさん、人からどう判断されたとお思ひになりますか？ 意地悪な世間は彼女をとがめて、その事業から金を儲もけてるのだと言ったり、保護してやった女どもから金を儲けてるとさえ言ったのです。彼女は力を落としてしまって、その町から立ち去らなければなりません……。——

独立した婦人たちが現在の社会となさなければならぬ戦いが、どんなに残酷なものであるかは、とてもあなたには想像もつきません。保守的な無情な現在の社会は、自分死にかかっています。残っているわずかな元気を、他人の生きるのを妨げることばかりに費やしているのです。」

「でもそれは、婦人ばかりの運命ではありません。われわれ男のほうもみなそういう戦いを知っています。そして僕はまた避難所も知っています。」

「どんな？」

「芸術です。」

「それはあなたがたにはいいかもしれませんが、私たち女には駄目だめです。そして男のうちでさえ、芸術を利用できる人がどれだけありますでしょうか？」

「あのセシルをごらんなさい。幸福ですよ。」

「あなたにはそれがわかるものですか。ほんとにあなたは早合点ばかりなさるんですね。あの女ひとが元気だからといって、いつまでもぐずぐず悲しんでいないからといって、悲しみを他人に隠しているからといって、それであなたはあの女ひとが幸福だとおっしゃるのでしょうか。もとよりあの女ひとは、身体も丈夫だし戦うこともできますから、幸福には違いありません。」

けれどあなたはあの女の戦いひとがどんなものか御存じありません。人を欺きやすい芸術生活にあの女が適してると思つていられるのですか。芸術！ 書いたり演じたり歌つたりする光栄を、幸福の絶頂かなんかのようにあこがれてる憐れあわな女たちがいることを、考えてもみますと！……彼女たちにはあらゆるものがかなり不足してるとは違ひありませんし、もう自分ではどういふ愛情に身を委ゆたねてよいかわからないに違ひありません……。芸術、もしもその他のいっさいのものを共にもつていないならば、芸術も何になりましょう？ 他他のことをすっかり忘れさせるようなものは、世の中にただ一つきりありません、それはかわい子わいこ供です。」

「そして、子供があつてさえ、まだ十分ではないじゃありませんか。」

「ええ、いつでもというわけにはいきません……。女というものはあまり幸福ではありません。一人前の女であることはむずかしいことです。一人前の男であるよりもずっとむずかしいことです。あなたには十分おわかりになりますまい。あなたがたは、精神的な熱情に、なんらかの活動に、没頭されることができません。不具になつても、そのためにかえつて幸福になることができます。ところが健全な女は、苦しまなければ幸福にはなれません。自分自身の一部を窒息させるのは非人間的なことです。私たちは一方で幸福な場合は、他

方で後悔しています。私たちは多くの魂をもっています。があなたがたには、一つの魂があるきりです。それも、女の魂よりずっと強くて、たいがい乱暴で、怪物じみてさえいます。私はあなたがたに敬服しております。けれどあまり利己的であられてはいけません。あなたがたは自分で気づかずにひどく利己的です。あなたがたは女にたいして、自分で気づかずに多くの悪を行なつていられます。」

「だつてしかたありませんよ。それはわれわれのせいではないんです。」

「ええ、あなたがたのせいではありませんとも、クリストフさん。あなたがたのせいでもなければ、私たちのせいでもありません。つまりは、生活というものがけつして単純なものでないからです。自然な生活をするばかりだ、という人もあります。けれども、いったいどんなことが自然なのでしょう？」

「まったくです。われわれの生活には自然なものは何もありません。独身も自然ではありません。結婚も自然ではありません。そして自由結婚は、弱者を強者の貪食どんしよくに任せるばかりです。われわれの社会そのものからして、自然なものではありません。われわれの手でこしらえ上げたものです。人間は社会的動物だと言われていますが、なんとという馬鹿げたことでしょう！ 生きるためにそうならざるを得なかつたのです。自分を役だたせん

がために、自分の身を守らんがために、快樂を得んがために、偉くならんがために、社交的になつたのです。そういう必要上、いろんな約束を結ぶようになったのです。しかし自然は反抗して、そうした無理を復讐ふくしゅうします。自然はわれわれのためにできてはしません。われわれはその自然を變形させようとします。それは一つの戦いです。われわれのほうがいよいよ打ち負かされるのは、驚くに当たりません。これを脱するにはどうしたらいいでしょう？——強者にならなければいけません。」

「善良な者にならなければいけません。」

「そう、善良な者になることです。利己心の胸当てを取り去り、よく呼吸し、人生を、光明を、自分の見すばらしい仕事を、自分が根をおろして一隅いちぐうの土地を、愛することです！ あたかも狭い所にある樹木が太陽のほうへ伸び上がってゆくように、遠い地平に得られないものを、深さや高さにおいて得ようと努力することです！」

「そうですよ。そしてまず第一に、たがいに愛し合うことです。男は女の兄弟であつて、女の餌食えじきではないということや、女は男の餌食であるべきでないということ、男がもつとよく感じようとさえしますならば！ 両方でたがいに自分の慢りおごりを投げ捨てて、自分のことをもつと少なく考え相手のことをもつと多く考えようとさえしますならば……私た

ち女は弱い者なんです。私たちを助けてくださらなければいけません。つまりいた者に向かつて、『俺おれはもうお前のことなんか知らない、』などと言わないで、『しっかりおしよ、いつしよに抜け出そうよ、』と言っておやりなさらなければいけません。』

二人は暖炉の前にすわって口をつぐみ、小猫こねこがその間にうづくまっていた。三人ともじつと考え込んで、暖炉の火をながめていた。消えかかっている炎は、いつにない内心の興奮のためにあか赭あかくなってるアルノー夫人の細ほつそりした顔を、ひらひらと燃えたつごとに照らしていた。彼女はこんなに心を打ち開いたことを自分でも驚いていた。かつて彼女はこんなに多くしゃべったことがなかった。また今後とてもこんなにしやべることはおそらくないだろう。

彼女はクリストフの手の上に自分の手をのせて言った。

「あなたがたは子供をどうなさいますの？」

それは彼女が初めから考えてる問題だった。彼女はいろいろ述べた。まるで人が違ったようになり、酔っているかのようだった。しかし彼女はこの問題だけを考えてるのだ。クリストフの言葉を初め少し聞くや否や、彼女は心の中に一つの小説を組み立ててい

た。母親から見捨てられた子供の事、その子供を育て上げてやる喜び、その小さな魂のまわりに自分の夢想や愛情を編み出す喜び、などを彼女は考えていた。そしてみずから言っていた。

「いやこれはいけないことだ。他人には不幸である事柄を、私が楽しんではいけない。」
しかしそれは彼女の自由にはならなかった。彼女はつぎからつぎへと述べた。そして彼女の黙々たる心は希望に浸されていた。

クリストフは言った。

「ええもちろん、僕たちは子供のことも考えました。かわいそうな子供です。オリヴィエも僕もそれを育てることはできません。女の人から世話してもらわなければなりません。だれか知人の女から助けてもらえたらと考えたんです……。」

アルノー夫人はほとんど息もつけなかった。

クリストフは言った。

「僕はあなたにそのことをお話しするつもりでした。ところがちようど先ほどセシルがやって来ました。そして事情を知って、子供を見ると、彼女はたいへん心を動かされて、非常に喜ばしい様子をして、私に言うんです、『クリストフさん……。』」

アルノー夫人は血の流れも止まった。その後のことは耳にもはいらなかった。眼の前が何もかも混乱した。彼女は叫び出したかった。

「いいえ、いいえ、私に子供をください……。」

クリストフは話しつつづけていた。彼女にはその言葉も聞こえなかった。けれど彼女は我を押えようと努力した。セシルがそれとなく打ち明けた事柄に思いをさせた。彼女は考えた。

「私よりもあの女にはいつそう子供が必要なのだ。私には親愛なアルノーもあるし……それから、いろんなものもあるし……それから、私のほうが年もとっている……。」

そして彼女は微笑ほほえんで言った。

「それがよろしいでしょう。」

しかし、暖炉の炎は消えていたし、顔の赧あかみも消えていた。そのやさしい疲れた顔にはもはや、いつものあきらめきつた温良さの表情があるばかりだった。

「愛する者に裏切られた。」

そういう考えにオリヴィエは圧倒されていた。クリストフは愛情のあまり、彼をきびし

く鞭撻べんたつしてやったが、その甲斐かいもなかった。

「しかたがないさ。」とクリストフは言った。「味方から裏切られることなんかは、病氣や貧困や馬鹿どもとの戦いと同じように、ごくありふれた試練あわなんだ。それにたいして武装していなければいけない。それに抵抗できないなどは、憐れあわな人間にすぎない。」

「ああ、僕はまったく憐れな人間なんだ。それを誇りとはしていないが……。まったくだ、情愛が必要で、それをなくすれば死ぬよりほかはない、憐れな人間なんだ。」

「君の生活はまだ終わってはしない。他に愛すべき者がいくらかもあるよ。」

「僕はもうだれをも信じない。友もない。」

「おい、オリヴィエ！」

「いや許してくれ。僕は君を疑ってやしない。時とすると、すべてを……。自分をも……。疑うようなことはあっても……。けれど、君は強者だし、だれをも必要としないし、この僕がいなくても済ましてゆける。」

「彼女のほうが僕よりもいっそうよく、君がいなくても済ましてゆけるさ。」

「君は残酷だね、クリストフ。」

「ねえ君、僕は君をいじめてるよ。しかしそれは君を発奮させるためなんだ。なんとという

ことだ！ 自分を愛してくれる人たちを犠牲にして、自分をあぎけつてるだれかに生命をささげるなどは、実際恥ずべきことだ。」

「僕を愛してくれる人たちも僕に何になろう！ 僕は彼女をこそ愛してるのだ。」

「働きたまえ。昔君が興味をもつてた事柄は……。」

「……もう僕には面白くないのだ。僕は疲れてる。人生の外に出てしまったような気がする。何もかも僕には、遠く……遠く思われる。いくら見ても、もう何にもわからない……。時計のような機械的な仕事を、無味乾燥な務めを、新聞紙的な議論を、快楽のつまらない追求を、毎日あかずに繰り返してる人々、ある内閣や書物や役者などに夢中になって賛成したり反対したりしてる人々が、世の中にあるかと考えると……。ああ、僕はひどく老い込んだ気がする。僕はもうだれにたいしても、憎しみも恨みも感じない。何もかも嫌だ。何にもないという気がする……。物を書けというのか。なんのために書くのだ？ だれが理解してくれよう？ 僕がこれまで書いていたのも、ただ一人の者のためにだった。僕がこれまで何かであったのは、すべてその一人の者のためにだった……。もう何にもない。僕は疲れてるのだ、クリストフ、疲れてるのだ。僕は眠りたい。」

「じゃあ眠りたまえ。僕が番をしてあげよう。」

しかしオリヴィエはなかなか眠れなかった。ああ、苦しんでる者が、数か月間、苦悶が消えて一身が新しくなるまで、まったく別人となるまで、もし眠ることができさえするならば！ しかし人はそういう能力をもつことはできない。またそれを望みもしない。苦しみを奪われることこそ最も悪い苦しみなのである。オリヴィエは自分の熱で身を養つてゐる熱病患者に似ていた。ほんとうの熱に犯されていて、一定の時間に、ことに夕方、日の光が消えてゆくころから、その発作が現われてきた。その他の時は、しきりに傷心し、恋愛に中毒し、追憶に悩まされ、あたかも一口の食物を嘔下し得ないで反嚼してゐる白痴のように、同じ考えばかり繰り返し、頭脳の力はすべてただ一つの固定観念に吸い取られていた。

彼は、クリストフのように、自分の不幸を呪い、不幸の原因たる彼女を真正面からのしる、などという術を心得なかった。彼はクリストフよりいっそう明知で公正だったので、自分にも責任があることや、自分一人だけが苦しんでるのではないことを、よく知っていた。ジャックリーヌもまた被害者なのだった——彼女は彼の被害者だった。彼女は彼に信頼していた。それを彼はどうしたのであったか？ 彼女を幸福にする力がなかったのなら、なにゆえに彼女を自分に結合させたのか？ 彼女は自分を害する絆を断って、当然なことを

したまでである。

「彼女が悪いのではない。」と彼は考えた。「私が悪いのだ。私は誤った愛し方をした。私は深く彼女を愛していた。けれども、彼女に私を愛させることができなかつた以上は、私は彼女をほんとうに愛する道をしらなかつたのだ。」

かくて彼は自分をとがめた。おそらくそれが正当だつたらう。しかし過去のことを云々うんぬんとしてもそれは大して役にたちはしない。いくら云々したところで、繰り返されるべきことは繰り返される。そして生きることができなくなす。強者は、人からなされた善を忘れる——のみならずまた、悲しくも、自分のなした害を自分の力で贖あがない得ないと知れば、それをもただちに忘れてしまう。しかし人は、理性によつて強者になるのではなく、熱情によつて強者になるのである。愛と熱情とはたがいに縁遠い。いっしよに連れだつことはめつたにない。オリヴィエは愛していた。彼が強いのは自分自身に反する方面にばかりだつた。一度受動的な状態に陥ると、あらゆる病苦にとらえられた。流行感冒、気管支炎、肺炎などが彼に襲いかかつた。その夏の大半は病氣だつた。クリストフはアルノー夫人に助けられて、手厚い看護をした。そして二人は病氣を阻止することができた。しかし精神上の病苦にたいしては、二人はまがつく無力だつた。彼の絶えざる悲しみから受ける有害

な疲労と、その悲しみのもとから逃げ出したい欲求とを、二人はしだいに感じだした。

不幸は、不思議な寂寞せきぼくのうちうちに当の人を陥おとしれるものである。一般に人は不幸を本能的に嫌悪けんおする。あたかも不幸が伝染しはすまいかと恐れてるかのようである。かりに一步譲つても、不幸は人に嫌気いやげを起こさせる。人は不幸から逃げ出してしまふ。苦しむのを許してやる者はきわめて少ない。ヨブの友人らの古い話といつも同じである。テマン人びとユリパズは、ヨブの短慮を責める。シュヒ人びとビルダデは、ヨブの不幸はその罪の罰であると主張する。ナアマ人びとゾパルは、ヨブを僭越せんえつであるとする。「時に、ラムの族やからブジンバラケルの子エリフ、大なる怒りを発せり、ヨブ神の前におのれを正しとするによりて、彼はヨブに向かいて怒りを発せり。」——真に悲しめる者は至つて少ない。悲しんでると言われる者は多いけれど、ほんとうに悲しみに沈んでる者はあまりない。がオリヴィエはそのまれの一人だった。ある人間嫌きらいの男が言ったように、「彼は虐待されるのを喜んでるがようである。こういう不幸な人間の役を演じたとてなんの利益もない。人から忌みきらわれるばかりである。」

オリヴィエは自分の感じてることを、だれにも、もつとも親密な人々にさえ、話すことができなかった。それをうるさく思われることに気づいていた。親愛なるクリストフでさ

えも、そういう執拗しつようなうるさい苦悶くもんには我慢しかねた。彼はそれを治癒ちゆしてやるには自分あまり拙劣ちつれつだと知っていた。実を言えば、彼は寛大な心をもっており、またみずから苦しい試練に鍛えられてきたのではあるが、友の苦しみをほんとうに感ずることはできなかった。人間の性質はそれほど偏頗へんぱなものである。善良で、情け深く、伶俐れいりであつて、多くの死を悲しんできていながら、友の歯痛の苦しみをも感じられないことがある。もしその病苦が長引くおりには、病人は大袈裟おおげさな苦情を言うものだと考えたがる。ことにその病苦が魂の底に潜んでいて眼に見えない場合には、なおさらのことである。その病苦の原因でない者は、自分にほとんど関係のない一つの感情のために、相手の男がそんなにも苦しんでるのを、煩わしいことだと考える。そしてついには、自分の良心を安めるためにみずから言う。

「自分に何ができよう？ あらゆる理屈もなんの役にもたたない。」

あらゆる理屈も……というのはほんとうである。人が善をなし得るのは、苦しんでる人を愛し、その人をやたらに愛し、その人を説教しようとはせず、その人を回復さしてやろうとはせず、ただ愛し憐れむあわことよつてのみである。愛のみが愛の痛手にたいする唯一の慰安である。しかし愛というものは、もつともよく愛する人たちのうちにおいても無尽

蔵ではない。彼らはある限られた分量の愛をしかもってはいない。見出し得る限りのやさしい言葉を一度言いもしくは書いてしまったときには、自分の義務を果たしてしまつたのみずから思うときには、彼らは用心深く身を退いて、あたかも罪人にたいするよう苦しんでる者にたいして、その周囲に空虚を作り出す。そして彼をあまり助けてやらないことをみずからひそかに恥じているので、ますます助けてやらなくなる。向こうに自分を忘れさせようとつとめ、自分でも自分を忘れようとつとめる。そしてもし、煩わしいその不幸が執拗しつようにつづくならば、不謹慎な訴えが自分の隠れ家へまではいつて来るならば、悩みに堪えきれないでいるその勇氣のない男にたいして、苛酷かこくな批判をくだすようになつてくる。そしてその男は、不幸に圧倒されてしまふときには、友人らの心からの憐憫れんぴんの情の底に、つぎの軽蔑けいべつ的な裁断を見出すに違いない。

「氣の毒な奴だ。俺は彼をもつとすっかりした男だと思つていた。」

そういう普遍的な利己心のうちにおいて、ちよつとしたやさしい言葉や、細やかな一つの注意や、憐れあわみをたたえた愛の眼つきなどが、いかに得も言えぬ慰安を人に与えることだろう。人はそのときに初めて温情の価値を感じる。そして他のすべてのことは、温情に比較してはいかにも貧弱に思われるのである。……この温情のためにオリヴィエは、友の

クリストフによりも、いつそう多くアルノー夫人に接近していった。でもクリストフは、つとめてりっぱな忍耐を事としていた。彼は愛情の心からして、オリヴィエにたいする自分の考えを隠していた。しかしオリヴィエは、苦しみのために鋭敏になつてゐる眼で、友の心中になされてゐる戦いを見てとり、自分の悲しみが友にはいかに重荷となつてゐるかを見てとつていた。そのためにこんどは彼をクリストフから遠ざけ、クリストフに向かつてこう叫びたい気を彼に起こさした。

「僕から去つてくれたまえ。」

かくのごとく、不幸は往々にして愛し合つてゐる心をもたがいと離れさせるものである。唐箕^{とうみ}が穀粒^えを選び分くるように、不幸は生きんと欲する者を一方に置き、死せんと欲する者を他方に置く。愛よりもさらに強い恐るべき生の法則である。息子の死ぬ^{むすこ}のを見る母親、友のおぼれるのを見る人——もしその死んでゆく者たちを救い得ない場合には、彼らはやはり自分自身を救おうとして、いっしょに死にはしない。それでも彼らは、その死んでゆく者たちを、自分の生命より何倍となく愛しているのである……。

クリストフは、オリヴィエを非常に愛してゐたにもかかわらず、時とするとそのそばから逃げ出さざるを得なかつた。彼はあまりに強く、あまりに健やかであつて、空気のない

その苦しみの中では息がつけなかった。いかに彼は自分自身を恥じたことだろう。友のたれにもなし得ないのをみずから憤慨した。そしてだれかにその腹癒せはらひをしたくなくなって、ジャックリーヌを恨むようになった。アルノー夫人の明敏な言葉があつたにもかかわらず、彼はなおジャックリーヌを苛酷に判断していた。それも、まだ人生をよく知っていないために、人生の弱点にたいしては思いやりのない、年若い激烈な一閃な魂をもっている彼としては、無理もないことだった。

彼はセシルとセシルに託されてる子供とによく会いに行つた。セシルは養ひ児の母親となつて様子が一変していた。若く楽しく上品にやさしくなつてるようだった。ジャックリーヌが立ち去つたことが、彼女のうちに知らず知らず幸福の希望を起こさしてはいなかつた。ジャックリーヌの追想は、ジャックリーヌがそばにいるよりもなおいっそう、自分からオリヴィエを遠ざけるといふことを、彼女は知っていた。そのうえ、彼女の心を乱した嵐あらしは、もう通り過ぎていた。それはただ一時の危機であつて、ジャックリーヌの狂乱を見たことが、かえつてその危機を消散させる助けとなつた。彼女はまた平素の落ち着きに立ちもどつてきて、どうして自分の心がああまでに乱されたかがわからなくなつた。愛したい欲望の大部分は、子供にたいする愛で満足させられた。女特有の驚くべき幻覚の——直

覺の——力で、彼女は自分の愛してる男を、その小さな子供を通じて見出して見出した。委託されたその弱い子供が彼女の掌中にあつた。子供はまったく彼女のものだった。そして彼女は、子供を愛することができた、心から熱く愛することができた。無心な子供の心や光しずくの雫しずくみたいなその澄んだ青い眼が、いかにも純潔だったと同じに、彼女の愛も純潔だった。……それでも彼女の愛情には、ある憂鬱ゆううつな遺憾の念が交じつてこないでもなかった。ああそれはけつして自分の血を分けた子供と同じではない!……しかし、それでもやはりいいものである。

クリストフは今では、前と異なつた眼でセシルをながめていた。彼はフランソアーズ・ウードンの皮肉な一言を思い起こした。

「あなたとフィロメールとは、夫婦になるのにちようどよいのに、愛し合わないなんてどうしたことでしょう?」

しかしフランソアーズは、その理由をクリストフよりもよく知っていた。クリストフのような人物は、自分のためになり得る者を愛することはめつたにない。むしろ自分の害になり得る者を愛することが多い。相反するものこそたがいひき合う。自然は自己の破壊を求める。自然は自己を節約する用心深い生活によりも、自己を焼きつくす強烈な生活に

好んではしりたがる。できるだけ長く生きることではなくて、もつとも強く生きることをおきて
掟として、クリストフのような人物にとっては、それが至当である。

クリストフはフランソアーズほどの明察力をもたなかったが、それでもやはり、恋愛は一つの非人間的な力だと思っていた。恋愛はたがいに相いれ得ない人々をいつしよにする。同じ種類の人々をたがいに排斥させる。恋愛が破壊するものに比ぶれば、恋愛が鼓吹するものはごくつまらないものである。幸いにも恋愛は意志を溶かす。不幸にも恋愛は心を破る。いったい恋愛はなんのためになるのか？

そして、そういうふうに恋愛をのしついているとき、彼の目には恋愛の皮肉なまたやさしい微笑が見えた。その微笑は彼にこう言っていた。

「恩知らずめ！」

クリストフはまだ、オーストリア大使館の夜会へ出席することをのがれ得なかった。フイロメールが、シューベルトやフォーゴ・ヴォルフやクリストフの歌曲リートを歌っていた。彼女は自分の成功を喜んでいたし、りっぱな人たちからでもはやされるようになってきた友人クリストフの成功を喜んでいた。一般公衆のうちにさえも、クリストフの名は日に日に

高まつていった。レヴィー・クルルのような者らも、もはや彼を知らない様子をすることができなかつた。彼の作品は各音楽会で演奏された。一つの作品はオペラ・コミック座で採用された。眼に見えない幾多の同情が彼に集まつていた。一度ならず彼のために働いてくれたあの不可思議な友が、彼の願望の達成に助力しつづけていた。クリストフは自分の行動を助けてくれるその好意ある手を、幾度も感じたのだった。だれかが彼を見守つてくれていて、しかも執拗しつように身を現わさなかつた。クリストフはその人を見出そうとつとめた。しかしその友は、クリストフがもつと早く自分を見出そうとしなかつたことを怒つてゐるかのようで、少しも手がかりを与えなかつた。それにまたクリストフは、他のいろんなことに気をとられていた。彼はオリヴィエのことを考えていた。フランソアーズのことを考えていた。現にその朝ある新聞で、彼女がサン・フランシスコにおいて重い病気にかかつてるといふことを、読んだのだった。他国の町にただ一人ぼっちで、旅館の一室に横たわり、だれにも面会を断わり、友人たちへも手紙を書かず、齒をくいしばつて、一人で死を待つてゐる、そういう彼女の姿を彼は頭に浮かべたのだった。

クリストフはそれらの考えにつきまとわれて、大勢の人込みを避け、小さな別室に退いた。薄暗いその隠れ場所で、壁に背をもたせ、緑の木と花との仕切りの後ろから、シユー

ベルトの菩提樹を歌つてるフィロメールの哀切な熱烈な美声に、彼はじつと耳を傾けていた。するとその純な音楽のために、いろんな追憶の憂愁が心に上ってきた。正面の壁にいつてる大きな鏡には、隣の大広間の燈火や活気が写っていた。が彼はその鏡を見はしないで、自分の内部をながめていた。眼の前には涙の霧がかかっていた。……と突然、シユーベルトの打ち震える老木のように、彼は理由もなく震えだした。そのまま身動きもしないで真蒼まっさおになつて、数秒間震えていた。それから眼の曇りが消えて、自分の前に、大鏡の中に、こちらをながめてる「女の友」の姿が見えた。……女の友？ それはいつたいだれか？ 彼には何にもわからなかつた。彼女が自分の友であり、自分は彼女を知っている、ということだけしかわからなかつた。そして、眼を彼女の眼に定め、壁にもたれながら、彼はなお震えつづけた。彼女は微笑ほほえんでいた。彼女の顔や身体の格好も、彼女の眼の色合も、また彼女の背が高いか低いか、あるいはどんな服装をしてるか、そんなことは目につかなかつた。彼はただ一つのことを見てとつた。彼女の同情深い微笑のけ高い温良さを。そしてその微笑が突然クリストフのうちに、ごく幼いころの消え去つた思い出を呼び起こした。……六、七歳のころのことで、学校に通つていて、いつも悲しい目に会い、自分より年上の強い仲間から辱はずかしめられなぐられ、皆からあざげられ、また教師からは不当な罰

を受けさせられた。他の者が皆遊び戯れてるのに、自分は一人ぼっちで片隅かたすみにうずくま
 って、低く泣いていた。すると、他の者といつしよに遊んでいない一人の憂鬱ゆううつな少女が
 ——（彼はその後かつて彼女のことを考えたことはなかったが、今になってその姿が眼の
 前に浮かんできた。身体がずんぐりしていて、頭が大きく、まつ白なほどの金褐色きんかつしよくを
 した頭髮まゆげと眉毛まゆげ、ごくうすい青色の眼、広い蒼白あおしろい頬ほお、太い唇くちびる、多少脹れた顔、赤い小
 さな手をしていた）——その少女が、彼の近くへやって来て、立ち止まって親指を口にく
 わえ、彼の泣くのをながめた。それから彼の頭に手をのせて、ちようど同じような同情深
 い微笑を浮かべながら、おずおずと、早口で彼に言った。

「泣くんじやないのよ……」

するとクリストフはもう辛抱できなくて、彼女の胸に顔を押し当てながら、わつと泣き
 だした。彼女はやさしい震え声で繰り返した。

「泣くんじやないのよ……」

それから数週間後に、彼女は死んでしまった。あのときにはもう彼女は死の手にとらえ
 られていたであろう。……その少女のことを、どうして彼は今思い出したのだろうか？
 遠いドイツの町の取るに足らぬ平民の娘である、その忘れられた死んだ少女と、今彼を

ながめてる貴族の若い夫人との間には、なんらの関係もないのだった。しかし、だれにとつてもただ一つの魂しか存在しない。無数の人々は、あたかも天空を運行するもろもろの世界のように、たがいに異なつてるように見えはするけれど、数世紀隔たつて人々の心のうちにさえ、同時に輝き出すところのものは、愛の同じ光である。クリストフは、自分を慰めてくれた少女の、色褪あせた唇くちびるの上に過ぎるのを見てとつたあの輝きを、ふたたび見出したのだつた……。

それはほんの一瞬間のことだった。人波が室の入り口をふさいで、向こうの広間の光景はクリストフの眼にはいらなくなつた。彼は急いで、鏡に写らない影のほうに退いた。自分の惑乱した様子を人に見られたくなかつたのである。しかしいくらか心が静まつてくると、また彼女を見たくなつた。彼女が帰りはすまいかと気づかわれた。彼はその広間にはいつていつた。そして、彼女はもう鏡の中のとくと同じには見えなかつたけれど、彼は群集の間からすぐに彼女を見つけ出すことができた。今や彼は、みやびな貴婦人の一団中にすわつてゐる彼女を、横から見やつた。彼女は肱掛ひしかけいす椅子の腕木に片肱をつき、身体を少しかがめ、手先で頭をさきさえて、伶俐れいりなしかも心を他処よそにした微笑を浮かべながら、人々の話に耳を貸していた。ラファエロの討議の中で、年若な聖ヨハネが、半ば眼を閉じて、自分

一人の考えに微笑ほほえんでいるのと、ちょうど同じような顔つきだった……。

そのとき、彼女は眼をあげ、彼の姿を見、そして驚きもしなかった。彼は彼女の微笑が自分にたいしてのものであるのを見てとった。彼は心を動かされて会釈をし、彼女に近寄っていった。

「あなたは私がおわかりになりませんの。」と彼女は言った。

その瞬間に彼は彼女がわかった。

「グラチア……。」と彼は言った。(第五巻広場の市参照)

ちょうどそのとき、通りかかった大使夫人が、長く望んでいた出会いがついになされたのを喜んでくれた。そしてクリストフを「ベレニー伯爵夫人」へ紹介した。しかしクリストフはいたく感動していて、その言葉が耳にもはいらなかった。そしてその聞き知らぬ名前に少しも気を留めなかった。彼にとってはやはり、彼女は小さなグラチアだった。

グラチアは二十二歳になっていた。一年前にオーストリア大使館付の若い男と結婚していた。この男は、オーストリア帝国の一首相の親戚しんせきに当たる名家の貴族であって、気取りやで、道楽者で、伊達者だてで、早くも憔悴しょうすいしてしまっていた。彼女はこの男に真面目まじめ

に恋したのであつて、いろいろ批判しながらもお愛していた。彼女の老父はもう死んでいた。夫はパリ―大使館付に任命されていた。そして、ちよつとしたことにも恐れをいだく内気な小娘だった彼女は、ベレニー伯爵の知友関係や、自分自身の容色や知力などによつて、パリ―社交界でもつともてはやされる若い婦人の一人となつていた。彼女はそうなるためになんらの努力もしなかつたが、またそうなつたのを嫌だとも思わなかつた。若くてきれいで人に喜ばれまた人が喜んでるのを知つてゐることは、一つの大なる力である。

自分の希望と運命との和やかな調和のうちに幸福を見出すような、きわめて健全できわめて晴朗な落ち着いた心をもつてゐることも、また同じく大なる力である。生命の美しい花が開いたのだつた。しかし彼女は、イタリーの土地の強い光と平和とに養われた、ラテン魂の静穏な音楽を、少しも失いはしなかつた。当然のことだが、彼女はパリ―社交界にある勢力を得ていた。そしてそれを少しもみずから驚きはしなかつたし、自分の力を借りにくる芸術的なあるいは慈善的な事業のために、その勢力を利用することを知つてゐた。ただそれらの事業の表立つた世話は、みな他人に任せておいた。というのは、彼女は自分の地位相当の振る舞いをする術を心得てはいたけれど、野中の寂しい別荘で暮らした多少粗野な幼年時代から、あるひそかな独立的氣質を受け継いでいたのである。その氣質は、社交

界にたいして面白がりながらも疲れを覚えたが、しかし愛想のよい親切な心から出るやさしい微笑の下に、けんたい倦怠の情を隠すことができるのだった。

彼女は大きな友だちクリストフのことを忘れはしなかった。がもちろん彼女はもう、無言のうちに潔白な愛情を燃やしている少女ではなかった。現在のグラチアは、きわめて思慮深い女で少しも空想的ではなかった。自分の幼い愛情のいろんな誇張にたいしては、穏やかな皮肉の念をいだいていた。とは言え、それらの追憶によって心を動かされずにはいられなかった。クリストフの思い出は彼女の生活のもっとも純潔なころと結びついていた。彼の名前を聞くとうれしかった。そして彼の成功を一々、あたかも自分がそれに関係しているかのように楽しんでいた。なぜなら彼女は彼の成功を予感したのであったから。彼女はパリへ来るとすぐに、彼に再会しようとした。少女時代の昔の名まで書き添えて、彼へ招待状を出した。クリストフはそれに注意も払わないで、招待状をくずかご屑籠に投げ込んだまま、返事さえ出さなかった。彼女は別に気を悪くしなかった。彼に知らせないようにして、彼の仕事やまた多少生活までも探っていた。新聞紙が彼にたいしてなした最近の戦いにおいて、親切な救いの手を彼へ差し出したのは、彼女だったのである。清麗なグラチアは、新聞社会とはほとんど関係をもたなかった。しかし友へ尽くす場合になると、こうかつ狡猾な策略

を用いて、もつとも嫌いな人々をさえ取り込むことができた。吠えたてる犬どもの群れを率いてる新聞社長を、彼女は招待した。そしてたやすく気を乱さしてしまった。彼の自尊心を喜ばすことができた。彼を瞞しこみながらうまく誘って、クリストフに向けられる攻撃に關し、軽蔑的な驚きの言葉をそれとなくちよつと発しただけで、戦いをぴたりとやめさせたのである。社長は翌日現われるはずだった侮辱的な記事を差し止めた。筆者が記事差し止めの理由を尋ねると、社長はきびしくしかりつけた。そしてなおそれ以上のことをした。頤使のままになる部下の一人に命じて、半月ばかりたつうちに、クリストフにたいする贊嘆の記事をこしらえさせた。でき上がったその記事は、思いどおりの感激的な大袈裟なものだった。また、大使館でクリストフの作品を聴かせようと思ひ立つたのも、グラチアだったし、クリストフがセシルを鼻肩にしていることを知って、その若い歌手を世に知らせようと尽力したのも、グラチアだった。それからまた、彼女はドイツの外交社会との關係によつて、穩やかな巧妙さで、ドイツから放逐されてるクリストフに対する政府筋の同情を、ごく徐々に喚起させ始めた。そしてしだいに世論の趨勢を一定さして、故国の名誉たる大芸術家に故国の門を開いてやるべき勅令を、皇帝から得させようとつとめた。その特赦状を期待するのは目下のところまだ尚早に失ずるとしても、少なくとも彼女は

は、彼が故郷の町へ数日の旅をすることについて、当局に眼をつぶってもらうことができたのだった。

そしてクリストフは、眼に見えない友の存在を自分の上に感じながら、それがだれであるかを見出し得なかつたけれど、鏡の中で微笑みかけた若い聖ヨハネの面影のうちに、今やその本体を見てとつた。

二人は過去のことを話した。話してる事柄がどんなことであるか、クリストフはほとんど自分でもわからなかつた。人は愛する女をよく見ないと同じく、その言葉をもよく聞きはしない。そして深く愛するときには、愛してるということさえも考えない。クリストフは何にも気づかなかつた。彼女がそこにいる、それだけでもう十分だつた。他のことはもう何も存在しなかつた……。

グラチアは話しやめた。ごく背の高い、かなり美男子の、身装を凝らし、髯を剃り、頭は半ば禿げ、退屈げな軽蔑的な様子をしてる、一人の若い男が、片眼鏡越しにクリストフをじろじろ見ていたが、早くも尊大な丁寧さで辞儀をしていた。

「夫ですよ。」と彼女は言った。

広間の騒々しさがまた感ぜられてきた。内心の光は消えた。クリストフはぞつとして口をつぐみ、男の挨拶あいさつに答礼しながら、すぐに引きさがってしまった。

芸術家の魂の要求こそ、また、芸術家の熱烈な生活を支配する子供らしい法則の要求こそ、実に滑稽こっけいなしかも痛烈なものである！ 彼はその女の友を、昔向こうから愛せられてたときには気にも止めず、もう数年来思い浮かべたこともなかったが、今ふたたびめぐり会うや否や、彼女は自分のものであり、自分の所有であつて、だれかが彼女を取つてる場合には、それは自分の手から盗んだのである、というように思えた。彼女自身にも他人へ身を与える権利はない、というように思えた。クリストフは自分のうちに何が起こつてるかをみずから知らなかった。しかし彼の創造の悪魔は彼の代わりにそれをよく知つていて、そのころ切ない恋のもつとも美しい歌を幾つかこしらえ出した。

その後かなり長く彼は彼女に会わなかった。オリヴィエの悲しみと衰弱とが彼の心につきまといつていた。がついにある日、彼女からもらつた住所書きを見出して、彼は思い切つて訪問した。

階段を上つてゆくとき、職人らが金槌かなづちで釘くぎを打つてる音が聞こえた。控え室は荷箱やかばんでいっぱいになつて取り散らされていた。伯爵夫人はお目にかかれなると給仕が答

えた。クリストフは落胆して、名刺を渡して帰りかけた。ところが給仕が追っかけてきて、詫びを言いながら彼を室に通した。敷物がすっかりめくられ巻き収められている小さな客間に、クリストフは案内された。グラチアは晴れやかな笑顔を喜びに駆られて手を差し出しながら、彼を迎えに出て来た。つまらない恨みはみな消えてしまった。彼も同じく喜び勇んでその手を握りしめ、それに唇づけをした。

「ほんとに、」と彼女は言った、「おいでくださいっつうれしゅうございます。あれきりお目にかからないで出発してしまうのかと、心配しておりました。」

「出発……出発なさるんですか。」

ふたたび暗い影が彼に落ちかかってきた。

「御覧のとおりですよ。」と彼女は室の中の乱雑さをさし示しながら言った。「今週の終わりに、私どもはパリーを立ち去ります。」

「長くですか。」

彼女は身振りをしながら言った。

「わかりませんわ。」

彼は口をきくのが苦しかった。喉がしめつけられていた。

「どこへいらつしやるのですか。」

「アメリカへまいりますの。夫がその大使館の一等書記官に任命されましたので。」

「そしてこれで、これで……」と彼は言った（唇が震えていた）、「……お別れですか。」

「あなた、」と彼女は彼の調子に心動かされて言った、「いいえ、お別れではありませんわ。」

「お別れするためにあなたにめぐり会ったようなものです。」

彼は眼に涙を浮かべていた。

「あなた！」と彼女はくり返した。

彼は眼に手を当てて、自分の感情を見せないように顔をそむけた。

「悲しがつてはいけません。」と彼女は彼の手の上に自分の手をのせながら言った。

そのおりにまた彼は、ドイツの少女のことを頭に浮かべた。彼は口をつぐんだ。

「なぜこんなにつつまでも来てくださいますでしたの？」と彼女はついに尋ねた。「私はあなたにお目にかかりたがっていました。けれどあなたは返事もくださらなかったでしょう。」

「私は少しも知らなかったんです、少しも知らなかったんです……。」と彼は言った。

「ねえ、私に知らせないようにして、私を何度も助けてくださったのは、あなただったでしょう……私がドイツへ帰ることができたのも、あなたのおかげだったんですね。私を見守っていてくれた親切な天使は、あなただったんですね。」

彼女は言った。

「私はいくらかでもあなたのためになるのがうれしゅうございました。たいへん御恩になつていますから。」

「なんでです？」と彼は尋ねた。「私は何にもあなたのためになることをしたことはありません。」

「どんなに私のためになつてくださったかは、あなた自身で御存じないのですわ。」と彼女は言った。

彼女は、自分が娘時代に、叔父おじのストウヴァン家で彼に出会つて、彼によつて、彼の音楽によつて、世の中にある美しいものを啓示されたころのことを、話し出した。そしてしだいに、やさしい興奮を見せながら、明らかなしかし控え目な短い暗示的な言葉で語つた、幼いころの感動のことや、クリストフの悲しみを分かち荷になつたことや、彼が皆に口笛を吹かれてそのために自分が涙を流したあの音楽会のことや、彼にあてて書いた手紙のことな

どを。彼はその手紙に返事も出さなかった。それを受け取りはしなかったから。そしてクリストフは彼女の話に耳を傾けながら、今自分が覚えてる感動や、自分のほうへかかみ込んでるそのやさしい顔にたいして、心の底から起こってくる情愛などを、しみじみと過去のうちに投影させていた。

二人はやさしい喜びの念で無邪気に話し合った。クリストフは話しながらグラチアの手をとった。そして突然二人とも話をやめた。グラチアはクリストフが自分を愛していることに気づいたし、クリストフもまたそれに気づいた……。

クリストフは気にもつかなかったが、グラチアは一時クリストフを愛したことがあった。そして今では、クリストフはグラチアを愛していた。グラチアはもう穏やかな友情しかいだいていなかった。彼女は他の男を愛していた。世間にしばしば起こるように、彼らの生活の二つの時計の一方が他方より進んでいるというだけで、彼らの生活は両方とも一変されてしまったのである……。

グラチアは手を引つ込めた。クリストフはそれを引き止めなかった。そして二人はそのまま、しばらくは言葉もなく当惑していた。

そしてグラチアは言った。

「ではこれで……。」

クリストフはくり返し訴えた。

「これでお別れですか。」

「このままのほうがよろしいと思いますわ。」

「お発^たちになる前にもうお目にかかれないうか。」

「ええ。」と彼女は言った。

「いつまたお目にかかれるでしょう？」

彼女は悲しげに疑いの身振りをした。

「それでは何になるでしょう、」とクリストフは言った、「ふたたびお会いしたのも何になるでしょう？」

しかし彼女のとがめる眼つきを見て、彼はすぐに言った。

「いえ、ごめんください。私がいけないんです。」

「私はこれからも始終あなたのことを考えておりますわ。」と彼女は言った。

「ああ私は、」と彼は言った、「あなたのことを考えることさえできません。私はあなたの生活を少しも知らないんです。」

平然と彼女は、自分の日常生活を、どんなふうにも日々を暮らしてるかを、手短かに話してきかした。自分と夫とのことを、やさしい美しい笑顔で話してきかした。

「あああなたは、」と彼は妬ま^{ねた}しげに言った、「御主人を愛していられますね。」

「ええ。」と彼女は言った。

彼は立ち上がった。

「さようなら。」

彼女も立ち上がった。そのとき初めて彼は、彼女が妊娠してることを認めた。そのために、嫌悪^{けんお}と愛情と嫉妬^{しつと}と熱い憐憫^{れんびん}との名状しがたい印象を心に受けた。彼女はその小さな客間の扉口^{とぐち}まで送ってきた。彼は扉口で向き遡り、彼女の手のほうへ身をかがめ、それに長く唇^{くちびる}をあてた。彼女は眼を半ばつぶって動かなかった。ついに彼は身を起こした。そして彼女の顔を見ないで、急いで出て行った。

……その時、いかなるものなるやと尋ぬる者
ありしならば、予はみずから卑下^{ひげ}の色を面^{おもて}に
浮かべつつ、ただ愛とのみ答えしならん……

諸聖人祭の日。戸外には、灰色の光と寒い風。クリストフはセシルの家^{いなか}にいた。セシルは子供の揺籠^{ゆりかご}のそばにすわっていた。通りがかりに立ち寄ったアルノー夫人が、子供の上に身をかがめてのぞき込んでいた。クリストフは夢想にふけていた。彼は幸福を取り逃がしたような気がしていた。しかし愚痴をこぼそうとは思わなかった。幸福が存在していることを知っていた。……太陽よ、御身を愛するためには御身を見るの必要はない！ 私が影の中で打ち震えてるこの冬の長い日々の間、私の心は御身でいっぱいになっている。私の愛は私を暖かくしてくれる。私は御身がそこにいることを知っている……。

セシルも夢想にふけていた。彼女はつくづく子供を見守って、ついにその子供を自分の子だと思ふようになっていた。ああ、生活の創造的な想像たる夢想の祝福された力よ！ 生活……生活とはなんであるか？ それは冷たい理性やわれわれの眼が見るところのものではない。生活とはわれわれが夢想するところのものである。生活の基準は愛である。

クリストフはセシルをながめた。眼の大きな田舎^{いなか}めいたその顔は、母性的な——真の母親よりもいっそう母親めいた——本能の光に輝いていた。またクリストフは、アルノー夫

人の疲れたやさしい顔をながめた。そしてそこに、興深い書物の中で見るように、人妻生活の隠れたる楽しみや苦しみを読み取った。人妻の生活は往々にして、人には気づかれな
いが、悲しみや喜びにおいては、ジュリエットやイゾルデの恋と同じほど豊富なものである。しかも宗教的な偉大さをより多くそなえている……。

人間的にして神的なるものの伴はなりよ侶……

そして、既婚および未婚の女の幸福もしくは不幸をなすものは、信仰の有無ではないと同様に、子供の有無でもないと、クリストフは考えた。幸福というものは、魂の香りかおであり、歌う心の諧かいちよう調である。そして魂の音楽のうちのもっとも美しいものは、温情にほかならない。

オリヴィエがはいつて来た。彼の挙動は落ち着いていた。新たな晴朗さが彼の青い眼に輝いていた。彼は子供に微笑ほほえみかけ、セシルやアルノー夫人と握手をし、そして静かに話し始めた。人々はやさしい驚きの念で彼を見守った。彼はもはや以前と同じではなかった。あたかも毛虫がみずから紡いだ巢の中にこもるように、苦悩といっしょに孤独の中に閉じ

こもつていて、辛い努力のあとに、自分の心痛を脱穀ぬげからのように振るい落とすことができただった。もう嫌いやになつて犠牲にするしかないと思つていた自分の生活をすっかりさげつくすべき、りっぱな主旨をどうして彼が見出すようになったかは、後に物語ることにしよう。そして、自分の生活をそのために投げ出そうと心の中で誓つてからは、普通の例にもれず、彼の生活はふたたび輝いてきたのだった。親しい彼らは彼をうちながめた。彼らはどういうことが起こつたかを少しも知らなかつた。それを彼に尋ねかねた。けれども、彼がすでに解放されて、何事についても、まただれにたいしても、愛惜や怨恨えんこんをもはやいだいていないということを、彼らは感じたのだった。

クリストフは立ち上がつて、ピアノのところへ行き、オリヴィエに言った。

「ブラームスの旋律メロデーを一つ歌つてきかせようか。」

「ブラームスの？」とオリヴィエは言った。「君は今では旧敵の作をもひくのか。」

「今日は諸聖人祭だ。」とクリストフは言った。「万人にたいする赦免の日だ。」

彼は子供の眼を覚さまさないように小声で、シュワーベンの古い民謡を数句歌つた。

お前が愛してくれた時のこと

わたしは有難ありがたがつてるよ、
他処よそではもつとお前に幸さちあれと
わたしは祈つておりますよ……

「クリストフ！」とオリヴィエは言った。

クリストフは彼を胸に抱きしめた。

「さあ君、」と彼は言った、「僕たちは運がいいんだ。」

彼らは四人で、眠ってる子供のそばにすわっていた。少しも口をきかなかつた。そして
どういうことを考えてるかと思ねる人があつたならば——彼らはみずから卑下の色を顔に
浮かべてただこう答えたであろう。

「愛。」

青空文庫情報

底本：「ジャン・クリストフ（三）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年8月18日改版第1刷発行

入力：tatsuki

校正：伊藤時也

2008年1月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ジャン・クリストフ

JEAN-CHRISTOPHE

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 第八巻 女友達

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>